が、ナタアシヤは唯つた數分前に、宥るして、その爲めに祈ることが能きるやうに、成るべく多く敵を欲しがつて居たのだから、敵を脚下に蹂躙るやうにとは祈れ無かつた。

が、ナタアシヤは、僧が跪づいて讀んだその祈禱の義しいものであることは少しも疑は無かつた。ナタアシヤは、人間の罪、殊に自分の罪に對して、加へらるべき罰に對して、畏怖の戰慄を心の裡で感じた、そして、彼等總て、及び自分をも宥し、彼等總てや、自分に、平和と幸福を與へて呉れるやうにと、神に祈つた。

で、神が自分の祈禱を聞いて呉れたやうに、ナタアシヤには思はれたのであつた。

（十九）

ピエールが、ナタアシヤの有り難がつた顔容を未だ自分の心の裡に新しく持つて、ロストオフ家から歸つて行く途で、空を横斷つて延て居る彗星を見て、新發見を爲たことを感じた日以來、この世の有ゆる物が空なもので愚なものであるといふ常久に心を苦しめる疑問は、ピエールの心を占有し無くなつた。『何故か』とか、『何の爲めか』とかいふ――前には、何樣なことを爲て居る時でも彼の前に出て來た――恐しい疑問は、彼に取つては、他の問題へ沈み込んで了まつたのでも無く、彼の疑問に對する何等かの返答の裡へ沈み込んだのでも無くして、それは、彼の女の影像の裡へ沈み込んで了まつたのであつた。

彼は、瑣末な下ら無い談話を聞いて居る時にしても、或は、自分自身がそれを先導になつてやつて居る時にしても、人間といふものゝ奸惡なこと、愚劣なことを、讀む時にしても、或は聞く時にしても、最早往時のやうな慄然とするやうな感をば覺え無かつた、彼は、人生がこれ程短かく且不可解であるのに、人間は何故さうもがくやうになるのであるのか、自ら問は無かつた。が、彼は、自分が最後にナタアシヤを見た時に、ナタアシヤが何樣な風であつたかを、思ひだした、と、彼の總ての疑が直ぐ消えて了まつた、それは、ナタアシヤが、彼の種々な疑問に對して答を與へて呉れたからだといふのでは無くして、その女の影像が、靜な、そして、心靈の活動に滿ちた、且其所には、正、不正の問題の一切無い他の世界――單りそれのみが人生を生き甲斐あるものならしむる美と愛の世界――へ直ぐに彼を引き上げて呉れたからであつたのだ。人生に於ける何樣な奸惡なことが、彼の注意の前へ持つて來られたにしても、彼は、獨り斯う云つたらう――

『うん、では、N・N・に勝手に政府や皇帝を掠奪させて置け、そして、政府と皇帝をして

勝手に彼に名譽を飽くまで負擔させて置け、が、彼の女は、昨宵俺を見て莞爾した、そして、再來て呉れと俺に賴んだんだ、俺は彼の女に戀して居る、が、誰にも知らせはせんぞ』

で、彼の心は、穩かに、瞭乎となつた。

ピエールは、尙且往時のやうに、道樂な交際社會へ行くことを續けて居た、そして、大酒を飲んだ、が、それは、ロストオフ家で送ることの能き無かつたやうな時には、彼が何うにかして送ら無ければなら無い時間が多量あつたので、莫斯科での彼の習慣と知人たちが、彼の上に非常な把握力を持つて居た斯ういふ生活し方へと、何時も彼を誘惑したからであつたのだ。

が、この頃は、戰地からの報知がだん〳〵不安になつて來ると共に、それから、ナタアシヤの健康が十分好くなりだして、彼の心の裡に、前のやうな心配の憐憫の感情を起させ無くなると共に、彼は、全然何とも解から無い焦々とすることの犧牲になりだして、それがだん〳〵甚くなつて行くのであつた。彼は、自分の今居る位地はさう長く續かぬことや、自分の全生活を變へて了まう筈の或る大轉機が近づいて居ることを、知覺して居た、そして、彼は、この迫まつて來て居る大轉機の前兆を有らゆるものゝ裡で見出さうと焦つたのであつた。

共濟組合のなかの或る一人が、聖約翰の默示錄から拔かれたナポレオンに關する次のやうな

預言にピエールの注意を喚んだ。默示錄の十三章十八節に、斯う書いてある、『此獸の數目の義を知るものは智慧あり、才智ある者は此獸の數を算へよ、獸の數は人の數なり、其數は六百六十六なり』。それから、同じ章の五節には斯うある、『この獸夸大なる言と瀆す言とをいふ口を予へられ、又四十二ヶ月のあひだ働をなすべき權を予らる』

佛蘭西のアルファベットの文字を、希伯來の計算法に從つて、初の九文字を單位の數とし、その後を十宛進んで行くものとして、配列して見ると、次のやうな意義になるのだ——

a	b	c	d	e	f	g	h	i	k	l	m	n	o	p	q	r	s	t	u	v	w	x	y	z
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	20	30	40	50	60	70	80	90	100	110	120	130	140	150	160

今、l'Empereur Napoleon（皇帝ナポレオン）といふ語が殘らず、この暗號で書かれるとすると、その結果は、その文字の總額六百六十に上ぼつて、それ故に、ナポレオンが默示錄に載つて居る獸であるといふことになるのだ。のみならず、又、Quarante deux（四十二）——即ち夸大なる言と神を瀆す言をいふ權が獸に與へられる四十二ヶ月といふ時に當る——に、この同なじ暗號が適てられるとすると、同なじ計算法に從がつて夫れ等の文字の總額が六百六十六に

なるのだ、で、その結果としては、ナポレオンの權力は、彼が四十二の年齡に達する千八百十二年まで續かして置かれるのだといふことになる。

ピエールは、透視のこの方法に非常に驚かされた、そして、彼は、何うすれば、獸、即ち、ナポレオンの權力を無くして了まうことが能きるだらうかと、屢自問した、で、彼は、自分が提出したその問題に對する答を見出す爲めに、同なじ暗號と計算法とを用ゐた。さういふ風で、彼は、試めしに、l'Empereur Alexandre（皇帝アレクサンドル）と La Nation Russe（露西亞國民）を書いた、が、さういふ文字の總額は、六百六十六より多いか、少いかであつた。

或る時、斯ういふ計算にかゝつて居るうちに、彼は、自分の名、Comte Pierre Bezouhoff（伯爵ピエール・ベズウホフ）を書いた、が、數字の總計は合は無かつた。で、綴方を變へ、s を z に代へて、不變詞の "de" を加へ、冠詞の "le" を加へた、が、それでも、望みの結果は得られ無かつた。

それから、問題に對して望んだ答が、自分の名のなかに含まれて居るのであつたら、それは確に又自分の國籍をも含んで居るに違ひ無からうといふことに、フト氣が付いた。彼は Le Russe Besuhof（露西亞人ベズウホフ）と書いた、そして、數字を計算して、六百七十一を得た。唯つた五つだけ多過ぎるのだ。五は e に當るのだ、"Empereur" の前の冠詞のなかで略したその同なじ e なのだ。文法の法則には反いて居るが、その e を略して、ピエールは望み通りの、六百六十六に等しい l'Russe Besuhof といふ答を得た。

この發見が彼を昂奮させた。何うして、何樣な關係で、自分が、默示錄に預言されて居るこの大事件へ結び付けられて居るのか、彼には分ら無かつた、が、彼は、寸時の間も、何等かの關係のあることだけは、疑は無かつた。ナタアシャに對する自分の戀愛、基督の敵ナポレオンの入寇、彗星、六百六十六、l'Empereur Napoleon それから、l'Russe Besuhof——さういふのを一緒にしたものが、熟し、爆せて、その裡に彼が囚人となつて居るやうに彼が感じて居た莫斯科での習慣の魔法にかゝつたやうな、何も爲無い世界から、彼を引つ張りだして、何か大きい功蹟や、何か大きい幸福へ彼を伴れて行か無い筈は無かつたのであつた。

祈禱が讀まれた日曜の前の晩、ピエールは、自分の極く信友であつたラストオプチンの所から、露西亞人への宣言書と、軍からの最近の報知を持つて來てやらうと、ロストオフ家の人々に約束したのであつた。その朝、ラストオプチンの所へ行くと、ピエールは、丁度軍から來た

ばかりの使者に逢つた。この使者は、ピエールの知人で、莫斯科の諸方の舞踏會へは必然出る男であつた。

『後生だから、君、手助けをしてくださる譯には行きませんか？』と、使者は賴んだ。『朋友や親類に宛てた手紙を旅囊一杯持つて居るんです』

さういふ手紙のなかに、ニコラアイ・ロストオフから父親に宛てたものがあつた。ピエールはそれを引き受けた。この外、伯爵ラストオプチンが、ピエールに、今丁度印刷所から來たばかりの皇帝の莫斯科への檄一部と、軍への最近の命令と、彼自身の『掲示』とを、呉れた。軍の命令を一瞥すると、ピエールは、戰死者、負傷者、行賞を受けた者たちの名を載せてあるそのうちの一つのなかで、ニコラアイ・ロストオフが、オスツロヴナの戰に於いての勇敢なる行爲に對して四等の『ゲオルギイ』を授けられたこと、それから、『一般の命令』のなかで、公爵アンドレエー・ボルコオンスキイが、輕騎兵の聯隊長に任せられたことを見出した。ピエールは、ロストオフ家の人々にボルコオンスキイのことを憶ひ出させやうといふ氣は少しも無かつたけれども、それでも、彼は、彼等の息子に授けられた賞の報知を聞かせて、彼等の心を喜ばさうといふ念を抑へ切れ無かつた、で、食事の間の話柄にする爲めに、宣言書と、『掲示』と、その他の命令は、手許へ止めて置いて、彼は、直ぐに、印刷された命令書と、ニコラアイの手紙を彼等へ送つて遣つた。

ラストオプチン――その人の心配さうな、焦々した調子が彼を驚かした――との談話や、軍のなかの狀態の面白く無いことを無頓着に話したその使者と逢つたことや、莫斯科に敵の間諜が居るといふ風説や、ナポレオンが、秋までには、露西亞の兩都府を占領して了まうと約束したと云つて居る書類が市ぢうに流布して居ることや、明日皇帝が來られるだらうといふ談話――總て斯ういふものが、彗星が初めて現れた夜以來、殊に、戰爭の始まつて以來ピエールの心を離れ無かつた昂奮と期待のその感情に新な力を與へた。

軍隊に入つて戰鬪部員にならうといふ考想が、一寸との間は、彼の心のなかで勝つて居た、そして、第一に、若し、彼が、嚴肅な誓約で結び付けられて居た共濟組合の團體が永久の平和と戰爭を止めることとを唱へるので無かつたらば、彼は必らず軍隊へ入つたのであつたらう、又第二には、軍服を着て、愛國心の必要を說いて歩いて居た莫斯科の住民の多數を見て居るうちに、何うしてだか、自分もさうするのは、可笑しからうといふやうな氣がして來たので、軍隊には入ら無かつた。が、戰鬪部に加はらうといふ考想を妨げた重な理由は、獸の數――六百

六十六――を自分に備へて居る P.Russ. Besuhof なる自分は、夸大なる言と神を瀆す言とを云つた獸の權力を抑へることに何等か大なる働を爲べき筈の人間だといふこと丶、それ故に、自分は何にも爲やうとすべきでは無く、自分が成し就げるべき筈になつて居た事柄の起つて來るのを、待つて、見て居るべきだといふその漠然した考慮との裡に、見出さるべきであつた。

（二十）

ロストオフ家では、日曜には大抵何時でもやるやうに、正餐に朋友を幾人か呼んで居た。

ピエールは、家の人々だけの所へ行くやうにと、早く出掛けた。

ピエールは、この年には、彼が例へそれ程背が高く無く、それ程肩幅が廣く無かつたにしてさへ、非常なものに見えたらうと思はれる位に肥り、自分の重量を如何にも平氣で擔つて居た位、強くなつて居たのであつた。

喘ぎながら、何か一人で呟きながら、彼は、階段を急いで上つた。彼の馭者は、最早此頃では、待つて居やうか何うか尋くことに氣が付か無くなつた。彼は、この頃では、伯爵がロストオフ家へ來た時には、彼は夜半まで居ることを知つたのであつた。

ロストオフ家の從僕たちが、彼の外套を脱る爲めに、勢好く前へ出た、そして、彼の杖と帽子を受け取つた。ピエールは、倶樂部の癖が付いて居て、自分の杖と帽子を次の室へ置いたのであつた。

彼が見た最初の人は、ナタアシヤであつた。彼がナタアシヤの姿を見ぬ前でさへ、次の室で外套を脱いで居るうちでさへ、彼は、音樂室で、ソルフェヂオを謠つて居るナタアシヤの聲を聞いた。

彼は、ナタアシヤが病氣以來一節も謠は無かつたことを知つて居た、で、ナタアシヤの聲の響は彼を驚かすと同時に喜ばせた。彼は、徐に戸を開けた、と、祈禱會に出た時のまゝのライラック色の衣服のナタアシヤが、部室を彼方此方と歩きながら、謠つて居るのを見た。ナタアシヤは、ピエールが戸を開けた時には、彼の方へ背部を向けて歩いて居た、が、直ぐ振り向いて、ピエールの肥つた、驚いた顏を認めるといふと、ナタアシヤは、顏を赤め、そして、彼の方へと急いで來た。

『再謠ふ癖を付けちまはうと思ひますのよ』と、ナタアシヤは云つた。『でも、なぶ〳〵骨なのよ』と、言ひ分でもするかのやうに、言ひ添へた。

『いや、實に立派です』

『眞個に好く來てくだすつたわねえ。私今日は眞個に嬉しいことがあるのよ』と、ナタアシヤは、ピエールが、ナタアシヤには隨分長いこと見掛け無かつたその往時の快活さのやうな風で、叫んだ。『ねえ、ニコラアイがゲオルギイエフスキイ勳章を授けられたでせう。私彼樣な兄があるのが自慢だわ』

『ご道理、私は「任命書」を送りました。いや、最早お邪魔はしません』と、彼は云ひ添へた、『私は客室へ行きます』

ナタアシヤは、彼を呼び戻した——

『伯爵、ねえ、私謠つちやア惡いんでせうか知ら?』と、ナタアシヤは、顏を赤めたが、然し、眼を下げずに、ピエールの顏を、尋くやうに、見ながら、云つた。

『いゝや。何故?。——その反對なんです——けれども、何故貴女は私に尋くんですか?』

『何うしても、私には分かりませんのよ』と、ナタアシヤは、速語で答へた。『ですけど、私、貴下が宜いとおつしやら無いことは、何でも爲まいと思ふんですのよ。私貴下を非常に信認して居ますわ。貴下は、貴下が私に取つて何れ程有り難い人だか、何れ程善い事を私の爲めに爲てくだすつたのか、分かつて居らつしやら無いわ』。ナタアシヤは、速語で云つた、そして、さういふ言語でピエールが何れ程赤くなつたかに氣が付か無かつた。『私、彼の人が——ボルコオンスキイのことなのよ』——ナタアシヤは、急いだ呟語で、彼の名を云つた——『同なじ任命書の中に書いてあるのを見ましたわ、では、彼の人も、再露西亞で勤めて居るんですはねえ。貴下何うお考へなさるの?』と、ナタアシヤは、その談話を終末まで爲るのに必要な力を持ち得無いのを虞れて、云は無ければならぬことを早く云つて了まはうと如何にも急いで居る樣子で、尙且速語で物云ひながら、尋いた——『彼の人は何時か私を宥して呉れるでせうか?。彼の人は何時までも私のことを惡るく思つては居無いでせうか?。貴下それを何うお思ひなさるの?。貴下それを何うお思ひなさるの?』

『私は思ひます』と、ピエールは云ひ始めた——『彼の男は何にも宥すことを持つて居無いと思ひます。若し、私が彼の場所に居たら』——

追懷の力で、ピエールは、直ぐに、彼の想像の裡で、彼が、ナタアシヤを慰さめる爲めに、自分が世の中での一番良い人間で、そして、自由な身體であつたとしたら、自分は跪づいて、結婚を求めると云つた時へと、伴れ戻された、で、今も、憐憫と、愛情と、戀愛のその同なじ感

情が、彼を襲つた、そして、同なじ言語が唇へのぼつて來た。が、ナタアシャは、それを云ふ間隙を彼に與へ無かつた。

『左樣よ、貴下は、貴下は』と、ナタアシャは、その代名詞を繰り返して、非常な眞面目な風で、云つた――『貴下は――それは別なのよ。私は、貴下ほど親切な、高尙な、善い人は一人も知ら無いわ、貴下のやうな人は世の中に有る氣違な無いでせうよ。彼の時も、又今だつても、貴下といふものが無かつたら、私は何うなつて了まつたか分かりませんわ、何故だといふと……』――涙が不意にナタアシャの眼に一杯になつた、ナタアシャは、彼方を向いて、譜の影へ顏を隱くし、音階を謠つて、再部室のなかを彼方此方と歩き始めた。

丁度その時、ペエティヤが客室から駈け込んで來た。ペエティヤは、最早今では厚い赤い唇のある、ナタアシャに其儘の顏容の、十五歳の、奇麗な、ポッと赤い顏の少年であつた。彼は大學へ入る準備をして居た、が、この頃は、彼と、彼の朋友のオボリエンスキイとが、驃騎兵へ入らうと、密かに決心して居たのであつた。

彼は、重要な事柄に就て話を爲やうと、その自分と同名の人の所へと跳んで行つた。彼は、ピエールに、これ迄、自分が驃騎兵へ入らせて貰へるだらうか、聞き合せて呉れと、賴んで居たのであつた。ピエールは、少年をば顧みずに、客室へと行つた。ペエティヤは、彼の注意を引く爲めに、彼の腕を引張つた。

『ねえ、ピョオトル・キリリイチ、何卒、僕の事件は何ういふ風ですか?。吾々に取つて、少しでも希望があるんですか』と、ペエティヤが尋いた。

『あゝ、左樣、左樣、君の事件だつたね。驃騎兵のことだつたね?。尋いてあげる、尋いてあげる、今日屹と』

『やア、君、宣言書を持つて來ましたかね?』と、老伯爵が尋いた。『「小さい伯爵夫人」が、ラズウモフスキイの祈禱會へ行つてね、新しい祈禱を聞いて來た。大變好いものであつたといふ話なんぢやよ』

『左樣です、持つて來ました』と、ピエールは答へた。『陛下は明日此地へお着きださうです。貴族の特別會が招集されました、そして、千に對し十の募兵があるといふ話なんです。それから、此度はまことにお目出度うございます』

『えゝ、えゝ、神のお庇蔭です。所で、軍からの報知は何うですかね?』

『わが軍は尙且退却して居ます。彼等は、今はスモレエンスクに居ます、さういふ話なんで

す』と、ピエールは答へた。

『やア、それは。やア、それは』と、伯爵が叫んだ。『で、宣言書は？』

『宣言書ですかね？。あゝ、左樣』

ピエールは、何の衣嚢の內も、その書類があるかと、探した。未だ衣嚢のなかを探して居ながら、彼は、その時入つて來た伯爵夫人の手に接吻した、そして、彼は、最早謠は無くなつて居たが、まだ他の人々と一緒になら無いナタアシヤを、明かに待ち設けて居るらしい風で、不安さうに見廻して居た。

『いや、何うも、書類を何うし了まつたか知ら』と、ピエールは叫んだ。

『まア、貴下は何時でも何でも無くし了まう人ですねえ』と、伯爵夫人が叫んだ。

ナタアシヤは、和いで居るが、然し動搖した顏容で入つて來て、坐つて、何にも云はずに、ピエールを見て居た。ナタアシヤが出て來るや否や、それまで、翳んで陰氣になつて居たピエールの顏が、晴々として來た、そして、彼は、尙且書類を探して居ながら、始終ナタアシヤを見て居た。

『いや、何うも。家へ遺れて來たに違ひ無いんです。行つて取つて來ませう。確に……』

『でも、食事に間にお合ひなさいませんよ』

『やア、私の馭者も歸つて了まつた』

が、見え無い書類を探しにと、次の間へ行つたソオニヤが、ピエールの帽子の內でそれを見付けた、彼は、それを帽子の裏の內へ丁寧に推し込んであつたのであつた。ピエールは、直ぐにそれを讀まうとした。

『いや、是非食事の後で』と、老伯爵は、この朗讀が客たちへの一番良い歡待だと豫期して居る樣子で、云つた。

食事では——人々は、その間で、聖ゲオルギイの新騎士の爲めに祝盃を三鞭酒で擧げたのであつたが——シインシンが、市での有らゆる風說を話した、それは、グルウジヤの老女公の病氣とか、メティヴィエーが莫斯科から居無くなつたこと、か、或る獨逸人が捕縛されて、ラストオプチンの所へ伴れて來られて、それが木茸（佛蘭西人のことを斯う俗語でいふのであつた）であつたといふことなどであつた。伯爵ラストオプチンが自分でその物語を爲た、彼は、人々に、その男は、木茸では無くして、單に獨逸の菌に過ぎ無いのだと保證して、その男を釋放したことを話した。

『奴等は捉へてばかり居るわい』と、伯爵が云つた、『私は、伯爵夫人に左樣なに佛蘭西語を使つては不好と云つて聞かして居たんぢやが、今は、丁度、その時なんですわい』

『それから、お聞きですかね』と、シインシンは、尙云つた。『公爵ガリイッチンは、露西亞人の家庭教師を――露西亞語を敎へて貰らう爲めに――雇つたんです、街で佛蘭西語を使うのは、危險になつて來たといふのでね』

『ねえ、伯爵ピョオトル・キリリイチ、若し國民兵の動員があるのなら、君も馬に乘らんければなるまいぢや無いか、えゝ？』と、老伯爵が、ピエールに言語を掛けて、尋いた。

ピエールは、食事の間は、默まつて、考へ込んで居た。斯う話し掛けられた時に、何だか解ら無かつたかのやうに、老伯爵を凝視めた。

『えゝ、えゝ、戰爭のことで』と、彼は云つた。『いや、何樣な軍人に私がなれるものですかね。けれども、何にしても、何も彼も實に奇異ですな。實に奇異だ。私は私自身それが何うしても解ら無いんです。私は知りません、私の趣味では國民兵には到底なれません、けれども、今のやうな事態では、誰も自分が何を爲て宜いのか分から無いんです』

食事後、伯爵は、自分の椅子に心持好く身體を据えた、そして、極く眞面目な顏で、上手な讀人であつたソオニヤに讀んで呉れと輕んだ。

『吾々の主都莫斯科へ檄す。

敵は露西亞の境上を侵さんと、非常なる軍力を以つて、來つた。彼は、吾々の愛する祖國を滅す爲めに、此所に來たのだ』と、ソオニヤは、その特質の淸い聲で讀んだ。伯爵は、眼を瞑つて聞いて居ながら、或る條下では、深い溜息を爲た。

ナタアシヤは、緊張した注意で、尋くやうに、父親を見たり、ピエールを見たりしながら、坐つて居た。

ピエールは、ナタアシヤの一瞥が、自分の上に見据えられて居るのを、知覺して居た。伯爵夫人は、有らゆる物が、自分の息子の身に迫つて居る危險がなか〳〵去ら無いことを、自分に見せたので、勅諭のなかの各々の熱烈な言語に對して、嚴かし氣に、そして、不賛成らしく頭を振つた。

シインシンは、皮肉な微笑を含んだ唇で、最初に好機會を自分に供する物を、何でも構はず、茶かして了まはうと明かに待ち構へて居る樣子であつた、それが、適當な辭柄を自分に供するのなら、ソオニヤの朗讀だらうが、伯爵の云ふことだらうが、又、宣言書だらうが、何でも構

は無い氣で居たのであつた。

露西亞を脅かす危險や、皇帝が、莫斯科、特に其所の名高い貴族等の上に置いた希望の條下を讀んだ後で、ソオニヤは、主に人々が、自分の讀むことに非常に注意して聞いて居た爲めに、聲が震えだしながら、次のやうな言語を讀んだ——

『予は、遲滯無く、この都及び帝國のその他の市府の人民の間に到つて、熟議を監理し、現下敵の路を塞ぎつゝあるもののみならず、尙又、敵が彼自身を現はす何れの處に於ても、彼の敗北を來たさしむる爲めに今集まりつゝあるものを併せて、わが總べての軍隊の指揮を爲る。あらう。願ふらくは、敵が、吾々の上に來たさんとする滅亡が反つて彼自身の頭上に反動し、而して、奴隷の狀態より救はれたる歐羅巴が、露西亞の名をます〳〵大にするに至らむことを』

『壯な言語ぢや』と、伯爵は、濕つた眼を開け、强い香のする鹽類の壜が鼻へ當てられたかのやうに、幾度もハア〳〵呼吸を吐きながら、叫んだ、彼は尙斯う云つた、『唯だ一語仰せられえ、陛下、吾々は有らゆる物を、少しも惜まず、犧牲に供しまする』

シインシンが、伯爵の愛國心を茶かす爲めに用意した一寸とした戲言を云ふ間隙の無いうちに、ナタアシヤが、自分の席から跳びあがつて、父親の所へ駈け寄つた。

『眞個に可愛いわ、この人——この私の父上樣は』と、彼に接吻を與へながら、ナタアシヤは叫んだ、で、それから、勢付くと同時に再出て來た、往時のやうな同なじ、自分では氣が付かぬ無い、艶つぽい樣子で、再ピエールを一寸見た。

『この娘は何といふ小さい女愛國者なんだらう』と、シインシンが叫んだ。

『寸毫も女愛國者では無くつてよ、唯……』と、ナタアシヤは、怫然として、云ひ始めた。『貴下は、何でも笑柄にして了まうのねえ、だけど、これは笑ひごとぢやアありませんよ……』

『笑ひごとどころかい』と、伯爵が叫んだ。『陛下にして、唯だ一語左樣仰せられゝば、吾吾は、殘らず隨いて行く——吾々は獨逸人や、何かでは無いんぢや』

『で、お氣付きでしたか』と、ピエールは云つて、『熟議のことを云つてあるのに』

『うん、何の爲めにお出にならうとも……』

誰も少しも構ひ付け無かつたベエティヤが、その途端に、父親の傍へ來た、そして、全然眞赤になつて、今は聲變りの最中で、或ひは低音であり、或ひは最高音である彼の聲で、斯う云つた、『ねえ、父上樣、僕は全く決心して居るんです——で、母上樣も、何卒——僕は實際決心して居るんですから、何うしても、軍人にならせてください、その理由は、何うも不好んですか

ら……で、話はそれだけなんです』

伯爵夫人は、ギヨッとした態で、眼を擧げて、手を握り合はせた、そして、夫の方へ腹立たしさうに、振り向いて、云つた、『何うもまア飛んでも無いことを云ふちやアありませんか』

が、伯爵は、直ぐに、自分の感傷から恢復した。

『これ。これ』と、彼は云つた。『エラい異樣な軍人が出來るぢやらう。いや、愚劣をいふのは止せ。お前は學問をせにやアいかん』

『愚劣なことぢやア無いです、父上樣。フェディヤ・オボリエンスキイは、僕よりか年齡が下なんだけども、行かうとして居ます、けれども、彼が行か無くつても、僕は、最早學問し度くは無いんです、今のやうな斯ういふ時……』

ペエティヤは、躊躇した、そして、汗が額へ出て來るほど赤くなつた、が、それでも、云ひ終つた――『國が危險だといふやうな時には』

『これ。これ。其樣な愚劣なことは最早止せよ……』

『けれども、貴下は、ご自分で今、吾々は有らゆる物を犧牲にすると仰しやつたぢやありませんか』

『ペエティヤ、こら、默まらんかい』と、伯爵は、白くなつてその自分の一番下の息子を見詰めて居た伯爵夫人を、ジロリと見て、叫んだ。

『けれど、實際――このビヨオトル・キリリイチが、その話を爲てくださるんですから……』

『おい、それは、悉皆愚劣なことぢやぞ。母親さんの乳汁が未だお前の唇から干いて居無いんぢや、それぢやに、お前は軍隊に入らうと云ふのぢや無いか。愚劣なことぢや無いか、えゝ』

で、伯爵は、確に寢床へ入る前に自分の居間で今一度目を通す積りらしい態で、書類を掻き集めて、その部室を出やうとした。

『ビヨオトル・キリリイチ、來て、烟草を喫みませんか』

ピエールは、ドギマギした、不決定の態であつた。ナタアシヤの異樣に輝いた、勢ひ込んだ眼が、優しくといふよりは寧ろ唯凝乎と彼の上に見據えられて居たので、彼はさういふ態になつたのであつた。

『いや、家へ歸りませう』

『何？。家へ歸る？。君は今晩はズッと此家に居てくださることだと思つたに。それに、この頃は餘り來てくださらんぢや無いか。で、私のこの娘は』と、伯爵は、快活にナタアシヤに

指しして、『君が居てくださる時ばかりは、氣が引き立つんぢやから』

『えゝ、けれども、何か忘れたやうなんです。何うも歸ら無いと不好いやうです――何か用事が』と、ピエールは、急いで、云つた。

『いや、そんなら、左樣なら』と、伯爵は云つた、そして、彼は、部室を出て去つた。

『何うして、お歸りなさら無きやなら無いの？。何故、其樣なに銷沈つていらつしやるの？何うしたんです？』と、ナタアシャは、ピエールの眼を凝乎と見ながら、尋いた。

『私がお前に戀愛して居るからだ』といふのが、ピエールの唇へ上つて居た言語であつた、が、彼は、それを云は無かつた。彼は、涙含むで來るまで赤くなつた、そして、眼を下げた。

『度々此所へ來無い方が私の利益なんですから……それから又……いや、唯だ用事があるからなんです』

『何うしたんです？。いゝえ。云つてください』と、ナタアシャは、斷乎と云ひ始めた、が、不意に止まつた。二人は、ギョッとして、アタフタして、相互に顏を見合つた。ピエールは微笑まうと爲た、が、それは無効な試であつた、彼の笑顏は彼の苦しみを表はした、で、彼は、何にも云はずに、ナタアシャの手に接吻した、そして、その家を出て了まつた。

ピエールは、最早それ限りロストオフ家を尋ねまいと、嚴重に決心した。

（三十一）

ペエティヤは、劍もホロゝに拒絕を受けた後で、自分の部室へ行つて、誰からも離れて、一人甚く泣いた。が、彼が、默まつて、陰氣な顏で、茶に下りて來た時には、誰も、彼の赤い眼に氣が付か無いやうな態を爲て居た。

次の日、皇帝が着いた。ロストオフ家の家內の隸僕のうちの五六人は、皇帝を見に行く許可を請ふた。

その朝、ペエティヤが、衣服を着、髮を梳き、成人がやるやうに見えるやうに、襟を整へるには、長くかゝつた。彼は、鏡の前に顏を顰めて立つて、手眞似をしたり、肩を揚げたりして居た、が、到頭、何にも云はずに、帽子を冠ぶり、人目にかゝらぬやうに、裏口から出て去つた。

ペエティヤは、皇帝が居らるゝだらうと思ふ場所へ行つて、侍從たち――ペエティヤは、皇帝は何時でも侍從たちに取り圍かれて居るのだと想像して居たのだ――の一人に、全く遠慮無く理由を云つて、自分、即ち、伯爵ロストオフは、それ程年齡の若いに拘らず、國の爲めに盡くさ

うと思つて居ること、忠節の道に於ては、自分の年齡の若いことが決して障碍となる筈は無いこと、それから、自分は、直にでも……といふことなどを、その侍從に話さうと、決心して居た。

ペエティヤは、衣服を着終はつた時分には、自分が侍從に云はうと思つた立派な言詞を十分に用意して居たのであつた。

ペエティヤは、自分が未だ眞の小兒であるその爲めに、皇帝へのその請願には成功するものと、賴んで居た――彼は、誰もが自分の若さに驚き入るだらうとさへ思つた――が、それと同時に、自分の奇麗な、小さい、襟の整へ方や、髪の梳きやうや、落ち着た、勿體のある擧作で、成人だといふ印象を與へやうと、彼は苦心して居た。

が、彼は、行くに隨ひ、內廓の周圍に集まつて來る人民の彌が上の群集の裡へ卷き込まるゝに隨つて、成人の特徵である所の、勿體と、落ち着のその態樣を、保ち續けることをだん〳〵忘れて行つた。

內廓に近付くに從つて、彼は、推し退けられ無いやうにする爲めに、なか〳〵骨が折れた、彼は、思ひ切つて凄い顏をすること丶、四圍の人の橫腹へ、烈しく自分の肱を突き當てることで、それをやつた。が、三位門では、彼の有らゆる勇氣に拘らず、何樣な愛國的な目的で彼が其所へ來たのか一向知ら無かつた人民は、彼が、時の已み難いのに諦らめを付けて、穴倉のやうな穹窿の下を轟いて行く馬車の行列が門口を通り過ぎるまで、止まつて居なければなら無かつたやうな風に、彼を壁の方へと壓し付けて了まつた。

ペエティヤの傍には、一人の農婦と、僮僕と、二人の商人と、一人の退役の兵卒が、立つて居た。門で少し待つてから、ペエティヤは、馬車が悉皆通り切つて了まうまで待たずに、他の者より先きに、もつと進まうと、決心した、で、彼は、烈しく肱を働かし始めた、が、彼の一番傍に居たので、彼の肱の當りを一番に感じた農婦が、甚く怒つて、彼に喚いた――

『こおれ、小旦那、何だつて、私をさうこづくだい？。誰だつて靜と立つてるのが、主にやア解ん無えのけえ？。主一體何處へ行かうてえのだい？』

『到底、無効だ』と、僮僕が云つた、そして、彼も又烈しく肱を働かして、ペエティヤを門口の厭な臭氣のする隅へと、突き遣つた。

ペエティヤは、手で顏の汗を拭いた、そして、濕氣で形無しになつて居た襟――彼が、家を出る時分には、それが、如何にも成人らしい風を見せて居ると思つたので、非常に滿足して居た

その襟――を眞直にしやうとした。

彼は、今見すぼらしい樣子になつたと思つた、そして、若し、其樣な態で侍從の所へ行つたら、皇帝の傍へ行かせられる氣遣は無からうと思つた。が、服裝を直すとか、今居る所から他の場所へ出て了まうとか、することは、非常な群集の裡なので、到底能きることでは無かつた。その途端に通り掛つた將官は、ロストオフ家の知人であつた。ペエティヤは、その將官に聲を掛けて、援助を求めやうかと思つた、が、彼は、それは男らしいことに相應しからぬことだと結論したのであつた。

馬車の行列が通つて了まうと、群集は門内へと突貫した、そして、廣小路へとペエティヤをも諸共に持つて行つたが、其所にも、人民の群集が前から居たのであつた。廣小路ばかりで無く、阪路も、家根も、人の居られる有らゆる所は、人民が充ち滿ちて居た。ペエティヤが、廣小路に落ち着くや否や、内廓ぢうに滿ち渡る鐘の音と、人民の讙呼の聲とが、ペエティヤの耳に亮然と聞えだした。

一寸の間は、廣小路に少し餘地があつた、が、乍ち、有らゆる者が脫帽した、そして、人民の群集全體が前方へと突進した。ペエティヤは、殆ど呼吸が能き無い程に壓し潰ぶされた、で、尙且、讙呼が空氣を裂いた、『萬歲。萬歲』。ペエティヤは、爪立つて、突き飛ばしたり、捻つたりした、が、それでも、周圍の人民より外、何にも見え無かつた。

商人の妻らしい一人の女は、歔欷いて、涙が眼から流れた――

有らゆる顏が、感動の熱中の一つの同なじ表情を帶びて居た。ペエティヤの傍に立つて居る『父、天使、父樣』と、女は、指で涙を擦り除けながら、叫んだ。

萬歲が八方で響いた。

群集は、一寸の間、一箇所に靜然として居た、それから、再前方へと突進した。

ペエティヤは、全然自分を忘れて、野獸のやうに、齒を嚙ひしばつた、そして、顏から突び出すやうな眼で、肱を働かせ、その刹那に、自分は素より直ぐ他人をも殺ろして了まひさうな氣になつて、有る限ぎりの聲を振り上げて、『萬歲』と叫びながら、前方へ突び込んだが、彼の四方八方に、同なじ萬歲を唱へる同なじやうな物狂はしい顏が幾つも幾つもあつたのであつた。

『では、皇帝は此れほど傑い人なんだな』と、ペエティヤは思つた。『いや、俺が自分で願書を出さうつたつて、到底駄目だ、それは餘んまり大膽過ぎるだらう』

それでも、彼は、尙且我無しやらに、掘き進んだ、と、自分の前の幾つもの人背の直ぐ彼方

に、赤い布で蓋つた小路のある空いた場所が見えた、が、その途端に、群集は流れ戻つた、前面の警官が、行列の通る路を塞いで居る群集を追ひ除けて居るのであつた、皇帝が、宮殿からウスピィエンスキイ伽藍へ行かれる所であつたのだ、ペエティヤは、横腹に烈しい攻撃を受けると共に、甚く壓し潰ぶされて了まつて、不意に有らゆる物が、彼の眼の前でボーッとして了まつて、知覺を失つて了まつた。

彼が氣が付いた時には、着古した、青い僧衣の、白髮の長い鬘の、誰だか見知らぬ僧——何うも補祭らしかつた——が、片腕で彼を支へ、今一つの腕で、群集の推し掛つて來るのを防いで居た。

『お前たちは、若い小旦那を踏み倒して了まつたぞ』と、補祭が叫んだ。『氣を付けろ、こおれ。靜に。——お前たちはこの人を潰ぶして了まつたぞ。お前たちはこの人を潰ぶして了まつたぞ』

皇帝は、ウスピィエンスキイ伽藍へ入つた。群集は再少し散薄になつた、で、僧は、眞青で、やう〳〵呼吸をして居るペエティヤをツアール——ブウシカ——大砲の王へ伴れて行つた。五六人、ペエティヤを愍然がるものが出來た、が、その時、不意に再彼の方へ波立つて來た、そして、彼は、既に群集の大波の裡へ捲き込まれて了まつた。が、彼の極く近くに居た人々が、彼に手助を爲、他の人々は、彼の外套の扣鈕を外し、大砲の頂上へ彼を擧げ、そして、彼をさう酷い目に逢はした者どものうちの幾人かを、叱り付けた。

『其樣なにしちやア、此人を壓潰しちまうぞ』——『何うするといふんだい？』——『おい、それぢやア、全然人殺しといふもんだぞ』——『見ろ、この可愍さうな人を、敷布のやうに白くなつてるぢやア無いか』と、種々の聲が云つた。

ペエティヤは、直きに我に返つた、色が頰部へ戻つて來た、痛みは無くなつた、そして、寸時の心持惡さの報ひとして、彼は大砲の上に居ることが能きて、其所から、皇帝が歸へるのを見ることが能きるだらうと思はれるのであつた。ペエティヤは、最早、請願書を出すことなどは、考へもし無かつた。皇帝を見ることさへ能きるのであつたら、彼は、自分の幸福は十分だと思ふのであつた。

皇帝が着いたのを喜ぶ感謝式と、土耳古との平和の結ばれたことに對する感謝とで成り立つて居たウスピィエンスキイ伽藍の式の間に、群集は散薄になり、果醬や、薑餅や、罌麥種——ペエティヤの特に好きであつた物——を賣る行商人が、自分の商品を呼び賣りしながら、現は

れて來た、そして、群集の普通の饒舌聲も聞こえた。

商人の妻は、自分の肩掛の破れたのを悲しんで、それが、何れ程したかを話して居た。今一人は、今日日では、絹物は何でも高くなつたといふことを云つて居た。ペエティヤを助けて呉れた補祭は、誰と誰とが式に於て、長老閣下を助けて居るだらうといふことに就いて、一人の官吏と議論を爲て居た。僧は幾度もツボオルニエ（伽藍所屬の僧）といふ言語を云つた、それがペエティヤには何のことだか解らぬ無かつた。二人の若者が、胡桃をモグ〳〵食つて居た何處かの下女たちにからかつて居た。

總てさういふ談話、特に、ペエティヤの年頃では何時もならば非常に面白く思はれる筈の娘たちと巫山戯て居ることも、今は、ペエティヤの注意を少しも引き得無かつた。彼は、皇帝のことや、彼に對する自分の愛で以て、非常に亢奮して、自分の絶好の位置――大砲の上――に坐つて居た。壓し潰された時の痛みや恐怖の感情と、熱心の感情との重なり合つたことが、尙一層彼の心の裡に、その刹那が重大であるといふ知覺を強めた。不意に、城壁から大砲の音が聞こえた――それは土耳古人との平和の祝砲であつたのだ――そして、群集は、大砲を擊つて居るのを見やうと、熱心に城壁の方へと突進した。

ペエティヤも、行き度かつた、が、自分の保護の下へその若い貴族を取つた僧が許るさ無かつた。その大砲が未だ擊つて居るうちに、ウスピィエンスキイ伽藍から、幾人かの官吏や、將官や、侍從たちが出て來た、それから、もつと他の者が出て來た、再衆皆脫帽し、そして、大砲を擊つのを見にと突進して居た連中が駈け戻りだした。一番最終に、伽藍の戸口から、制服で、リボンを付けた四人の人が出て來た。『萬歲。萬歲』と、群集が叫んだ。

『何れがそれなんです？。何れが？』と、ペエティヤは、涙聲で、四邊の人々に尋いた、が、誰も彼も答を與へ無かつた、誰も彼も氣を取られ過ぎて居た、で、ペエティヤは、嬉し涙で眼が見え無くなるので、艱然のことで、その四人のなかの一人を選んで、自分の全注意をその人の上に集中した――それは皇帝では無かつたのだが――で、狂氣のやうな聲で『萬歲』と叫んだ、そして、その直ぐ次の日に、何樣なことがあらうとも、軍人になつて了まはうと、決心した。

群集は皇帝の後から突進した、彼を宮殿まで送り、そして、それから、散り初めた。最早遲かつた、そして、ペエティヤは何にも喰はず、汗が身體から流れ落ちて居た、それでも、彼は、まだ家へ歸らうなどとはてんで思は無かつた、そして、彼は、皇帝が食事を爲て居る間ぢう、まだ何かあるだらうと待ち設け、食事に加はる爲めに戸口へ來る高官たちは素より、窓の彼方

をチラ〳〵通る給侍を爲る從僕をさへ羨みながら、宮殿の窓を見詰めて居る最早滅りはしたがまだなか〳〵非常な人數の群集と一緒に、宮殿の前に立つて居た。

食事の間に、ヴァルウレフが、窓の外を一寸と見て、『人民は、陛下を今一度拜し度がつて居ります』と、皇帝に注意した。

宴會が終はるといふと、皇帝は立つて、未だ乾菓の殘りを食ひながら、觀物臺へ出て行つた。群集――ペエティヤもそのなかに加はつて――は、觀物臺の方へと突進して、『天使。父。萬歲』と、叫んだ。

『父』と、人民は叫んだ、ペエティヤも亦さうであつた、で、再、女だの、弱い性質の男たちの或者は――ペエティヤもそのうちであつた――嬉しさで泣いた。

皇帝が手に持つて居た乾菓の可なり大きい片が、破れて、觀物臺の欄干の上へ落ち、欄干から地面へ落ちた。一番近い所に立つて居た袖無し外套の馭者が、前方へ跳び出て、その片を攫んだ。群集の裡の五六人が、馭者へ突び掛つた。皇帝は、それを見て、乾菓の幾つも入つて居る皿を渡せと命じた、そして、觀物臺から、乾菓を投げ初めた。

ペエティヤの眼は血走つた、再踏み殺されるといふ虞が有つたけれども、乾菓に向つて突進した。彼は、何故だか分から無かつたが、自分の幸福は、皇帝の手からのそれ等の乾菓を得るか得無いかに依つて、定まるのだと思はれるのであつた、で、彼は、何うしても一歩も讓ることが能き無かつたのであつた。彼は前方へ跳び出して、丁度乾菓を攫んだばかりの老女を突つ倒した。が、老女は、地面に平這つて居たに拘らず、自分が全たく負けて了まつたものとは少しも思はず無かつた、といふのは、老女は乾菓を掌のなかに確乎攫んで居て、落さ無かつたからであつた。ペエティヤは、膝で、それを老女の手から叩き落した、そして、それを攫み、後れて了まうのを恐れるかのやうに、皺嗄た聲で『萬歲』と、叫んだ。

皇帝は引込んだ、そして、その後で、群集の大部分は別れ始めた。『もつと見るものがあると云つたらう、何うだ、さうだつたちやァ無いか』と、群集の間で、種々な聲が、嬉しさうに云つた。

ペエティヤは、幸福ではあつたが、家へ歸つて了まつて、その日の幸福が總て終つて了まつたことを覺へるのは、彼に取つては厭で堪まら無かつた。で、家へは歸らずに、彼は內廓を出て、自分と同なじ十五歲で、又軍隊に入らうと熱望して居た自分の朋友のオボリエンスキイを探しにと行つた。

到頭家へ歸り着くといふと、ベエティヤは、判然と、キッパリと、若し、許可を與へて呉れ無ければ、家から逃げ出して了まうと、云ひ切つた。で、次の日に、伯爵イリヤ・アンドレエーチは、未だ承諾するとは十分には決して居無かつたけれども、ベエティヤが一番危險に露らされ無いやうな位地をベエティヤの爲めに見付けるには、何うしたら宜いのかを調べにと行つた。

（二十二）

それから三日後の、十五日の朝、馬車の無數の群集が、スロボヅスキイ宮殿の近邊に列んだ。廣室々々は悉皆人で一杯になつた。正面の部室には、制服の貴族が居、第二の部室には、顎髯を生し、青い土耳古下衣を着て、徽章を着けた商人たちが居た。

貴族が居た部室には、忙がしさうな音と、動きがあつた。皇帝の肖像が懸つて居る下の大きい卓子の周圍に、最も高い地位の官吏たちが、高い背の椅子に坐つて居た、が、貴族の大部分は、彼方此方と歩いて居た。

總ての貴族――ピエールが、倶樂部や、その人々の家で見慣れて居たその同なじ人々――が、或る者は、カザリン時代から始まつたもの、或る者は、ポオルの時代からのもの、或る者は、アレクサンドルと共に入つて來たもつと新しい型のもの、又或る者は、露西亞の貴族の普通の制服といふ風に、皆それ〴〵制服を着て居た、で、斯ういふ風に誰も彼も制服を着て居ることが、ピエールには善く知れて居る實にさま〴〵な年齢や、型の、さういふ個人たちに、一つの奇異な奇妙な性質を與へたのであつた。殊に眼立つたのは、眼の鈍然した、齒の無い、禿の、肌の黃色くなり掛けて居るとか、皺くちやで瘠せて居るとかいふやうな老人たちであつた。さういふ人人は、大抵、それ〴〵の席に坐つて居て、何にも云ふことを持つて居無かつた、そして、彼等は、歩き廻るとか、話を爲るとかいふ場合でも、何時も自分たちより若い人々に話し掛けるのであつた。又、ベエティヤが內廊の廣小路で見た群集の顏と同なじやうに、此所の人々の顏も最も驚くべきさま〴〵な相反對した表情を帶びて居た、それは、ボストンの仲間とか、料理人のベツルウシヤの料理とか、ジナイダ・ヅミツリエヴナとの挨拶の交換とか、いふやうな何時も有る事がらとは全く反對な何か重大な事件が起るのだといふ一般の待ち設うけであつたのであつた。

餘まり緊然して居るので、彼に取つては不恰好であつた宮中の制服の裡へ早朝から身體を詰め込んで居たピエールも出席して居た。彼は、非常に昂奮した心持になつて居た、貴族ばかり

で無く、尙又商人階級の非常集會――立法會議、全階級會議――が、彼の心の裡に、民約篇や、佛蘭西革命に關する思想の集合全體を喚び起した――さういふ思想は、彼は最早長いこと抱か無くはなつて居たのだが、それでも、彼の心には深く銘刻されて居たのであつた。人民と熟議する爲めに都へ皇帝が來るのだと云つて居る宣言書の言辭が、ピエールの說を確めた。で、さういふ風に、彼が起されるのを見やうと長いこと待つて居た重大な改革が今試みられるのだと想像して、彼は歩き廻り、眺め、談話に耳を傾ぶけた、が、何處でも、彼の考へ込んで居た思想を言ひ出して居る人を、一人も見掛け無かつた。

皇帝の勅論が讀まれて、非常な熱心を喚び起した、で、それから、會集は幾つもの集團に分れて、事態を論じ始めた。ピエールは、人々が、一般的興味の事柄ばかりで無く、尙又、貴族の都督たちは、皇帝が來た時に、何處に立つて居れば宜いかとか、何時陛下の爲めに舞踏會を催さうかとか、地方々々で分けやうか、それとも、全縣を一つに取らうかとか、いふやうなことを、話して居るのを聞いた。が、戰爭が話題となるとか、貴族の集會の目的が云ひ出されるとか、するや否や、議論は直ぐ曖昧になり、勢が無くなるのであつた。誰も彼も、話すよりは聞いて居る方に、なるのであつた。

非常な氣取つた姿勢の、退職の海軍將校の制服を着た中背の男が或る部室で話して居て、その周圍に集團が造くられて居た。ピエールは、その間に加はつて、そして、聞き始めた。カザリン時代のヴォエヴォデの制服を着た伯爵イリヤ・アンドレエーチは、誰もに對して心持の好い挨拶を爲ながら、群集の裡を通つて來てから、又その集團へ近寄つた、そして、彼が何時も他人の談話を聞く時のやうに、人の好ささうな笑顏で、自分の感想が話者と一致することを表はさうと、首肯きながら、聞き始めた。

退職の海軍將校は、極く大膽に話して居た――さうであつたことは、聞いて居る人々の顏からも判斷し得られたし、又、極く從順で溫和しい性質だといふので善く知られて居たピエールの知人たちが、その海軍將校の傍を去るとか、で無くとも、彼が云つて居ることに不贊成であつたのでも、さうと知れたのであつた。ピエールは人を推　分けて、その集團の眞中へ行つた、そして、十分に見た上で、話者は、飽くまで自由な考想の人である――尤も、その自由な考想といふのも、ピエールの思つて居る自由主義とは餘程違つた意味のものではあるが――といふ結論に達した。その海軍の將校は、r を心持好く消し、子音を詰めて了まう、露西亞の貴族の特徵であるところの彼の特種な、響き渡る、單調の上低音――また、號令をかけるのにも適し

た聲――で話して居た。

『スモレエンスクの人民が、皇帝の爲めに民兵を募つたとして見給へ、吾々は、何うしても、スモレエンスク人の先例を遵奉せんければならんでせうかね？。莫斯科の貴族たる紳士諸君が必要だと思はれるのなら、もつと何か他の方法で、皇帝に對する忠心を示すことが能きるんです。吾々は千八百〇七年の民兵の徴募のことを忘れはしませんでせう、何うです？。寸許でも德を爲たのは、唯だ狡猾な僧の息子や、掠奪者ばかりではありませんか』

伯爵イリヤ・アンドレエーチは、微笑の影を以つて、贊成さうに、頭を首肯かせた。

『吾々の民兵が帝國に何か少しでも利益になつたことがあるでせうかね？。寸毫も無いです。彼等は唯だ吾々の農業を衰退させたばかりなんです。徴募の方が餘程宜しい――何故だといふと、民兵は、兵卒でも無く、百姓でも無い、唯だ墮落した、やくざ者になつて歸つて來るからなんです。貴族は自分の生命を惜みません、吾々は、全く喜んで、吾々自身戰場に出、又、新募兵を伴れても行きます、皇帝のお言葉さへあるなら、吾々は陛下の爲めに死にます』と、演說者は、昂奮して來て、云ひ添へた。

イリヤ・アンドレエーチは、さういふ感想を聞く滿足で、口の內の唾を呑み込んだ、そして、ピエールを突つ突いた、が、ピエールも亦何か云ひ度くつて堪まら無かつた。彼は、尙一層前方へ推し出た、彼は、自分が昂奮して居ることを感じた、が、彼は、何が自分をして何か云はせるやうにするだらうかといふことは、一向考想が無かつた、そして、未だ彼は、何を云はうとして居るのかといふことは、尙一層考想が無かつた。彼が今しも何か云ひ出さうと口を開けた途端に、最早齒の全然一本も無い、が、嚴かしさうな、悧口らしい顏の元老院議官が、不意にピエールを遮ぎつた。その元老院議官は、海軍の演說者の近くに立つて居たのであつた。何うも、討論を始めさせ、議論に負け無いことに慣れた樣子で、彼は、低いが併し聞こえる聲で、云ひ出した――

『私が想像しますのでは、貴下』と、元老院議官は云つた――言語は、彼の齒の無い口の爲めに、濁つた聲になつた――『私が想像しますのでは、吾々が此所に召集されたのは、現在の問題として、兵を募ることと、民兵を募ることと、何方が帝國に最も利益かといふことを決する爲めでは無く、吾々は、吾々の皇帝が恐れ多くも吾々に下だし給はつた勅諭に答へ奉つらんが爲めに、此所に招集されたのぢやと思ふのであります。で、徴募が宜いか、民兵が宜いか、何方が利益かといふ問題の決定は、吾々は宜しく陛下の最高の權威にお任せ……』

ピエールは、不意に、自分の昂奮の迸出口を見出した。彼は、貴族の任務をさういふ窮屈な狹いものと見做す意見を以つて居る元老院議官に對して、大に憤ほつた。ピエールは、一歩前方へ出て、元老院議官の言語を遮ぎつた。彼は、自分でも、何を云はうとして居るのか分からず無かつた、が、彼は、時々佛蘭西語の句になつたり、また、露西亞語の時は『書籍のやうな言語』で、云つたりして、眞赤になつて、云ひ始めた。

『甚だ失禮ですが、閣下』と、彼は始めた。ピエールはその元老院議官を善く知つて居た、が、今は、自分は、冷々とした儀式ばつた言語で、話しかけ無ければならぬやうに感じたのであつた。『私は、彼の紳士には同意し無いですが』――ピエールは躊躇した。彼は、最も尊敬すべき前說者と（佛蘭西語で）云ひ度かつたのだ――『私は、それが何誰だか知ることの光榮を有しません彼の紳士には同意しません、が、それでも、私は、貴族は唯だ同情や熱心を表はす爲めばかりに此處に喚び集められたのでは無くして、また同時に、吾々が祖國を助けることの能きるかも知れ無い方法を決する爲めに、此所に喚び集められたのだらうと、想像します。私は想像しますが』と、彼は尙一層勢付いて來て、云つて、『私は、想像しますが、若し、陛下が、吾吾が單に、肉――大砲の贄肉――として與へる百姓等の持主に過ぎ無いことを發見せられるのであつたら、皇帝は悲しまれるでありませう、が、吾々は寧ろ、助……助言者として……』

五六人は、元老院議官の蔑視た微笑や、ピエールが達して居た昂奮の具合を見て、その集團を離れた、唯だイリヤ・アンドレエーチのみは、彼が、海軍の軍人や、元老長議官の演說に對すると丁度同なじに、そして又、概則として、何時でも彼が一番最後に聞く者に對すると同なじやうに、ピエールの演說にも滿足したのであつた。

『私の想像する所では、吾々は、斯ういふ種々な問題を決する前に』と、ピエールは追つ掛けて云つて、『吾々は、皇帝に願ふべきなんだ、吾々が、何れほどの軍隊を持つて居るのか、又、それが何ういふ狀態にあるのか、さういふことに關する十分な判然した說明を與へられるやうに、謹んで皇帝に願うのが宜いんです、で、その上で……』

が、ピエールは、彼の言語を終はらしめられ無かつた、彼は一時に三方から攻擊されたのであつた。彼は、彼に對しては何時も好意を持つて居、そして、度々彼のポストンの仲間になつた、極く長い間の知人、ステバーン・ステバアノヴィイチ・アヅラクシンから、誰からよりも一番烈しく攻擊された。ステバーン・ステバアノヴィイチは制服を着て居た、で、ピエールをして、自分がこれ迄知つて居たのとは全然異つた人に反對されて居るやうに思はせたのは、この制服

であつたのか、或は、他に理由でもあつたのか、何方かであつた。ステパーン・ステパアノヴィチは、年寄りの憤怒で、不意に顏を眞赤にして、ピエールに向つて、怒號り付けた——

『第一に、君に承知させ度いのは、吾々はさういふやうな事を皇帝に伺ふべき權利が寸毫も無いといふことなんだ、それから、第二には、露西亞の貴族がさういふ權利を持つて居るにしたところで、それでも、皇帝は吾々に答へ給ふことが能き無からう。軍隊の行動は、敵の行動次第にいろ〳〵と變るんだ——軍隊は增減する……』

今一人の、中背の、ジプシイの家でピエールが前日見たことのある、恐しい骨牌の下手な男だと知つて居る、四十歲の男で、今は、他の人々と同なじやうに、制服を着て居るので態樣の全然違つたやうに見えて居るのが、アヅラクシンを遮ぎつた——『左樣です、まだ、その外、今は非難して居る時ぢやアありません』と、その貴族の聲が云つて、『が、吾々は實行に就か無ければなら無いんです。戰爭は露西亞の國內に入つて來て居ます。敵は、露西亞を滅ぼし、吾吾の祖先の墳墓を荒し、吾々の妻や子を捕虜にする爲めに、やつて來て居るんです』——その貴族はドンと音高く自分の胸を叩いた。——『吾々は皆な起たう、吾々は、吾々の父なる皇帝を擁護する爲めに、一人の人のやうに一致して、戰場に出やうではありませんか』と、彼は、血走つた眼を物狂はしくギヨロ〳〵させて、叫んだ。

五つ六つの贊成する聲々が、群集の裡で聞こえた。

『吾々露西亞人は、信敎や、皇室や、祖國を擁護する爲には、決して生命は惜ま無い。で吾々は、國の眞の兒であるならば、白晝の夢のやうな空想は捨てゝ了まは無ければなりませんぞ。吾々は、露西亞は何れ程善く露西亞を守ることが能きるか、歐羅巴ぢうに見せてやらうぢやありませんか』と、一人の貴族が叫んだ。

ピエールは返答を爲度かつた、が、一言も云ふことが能き無かつた。彼は、自分の聲の高ささへ——彼が云ひ度いと思つて居たことの意味はさて措き——その貴族の聲の高さには、聞こえるといふ點に於ては、到底匹敵無いことを承知して居た。

イリヤ・アンドレエーチは、集團の直ぐ後部の所に立つて、贊成さうに觀て居た、五六人が、話者が終つた時に喝采して、叫んだ——

『然。然』

ピエールは、自分は、金錢でも、百姓でも、何れ程までの犧牲でも何時でも拂う積りで居はするのだが、それでも、自分が助力し得る前に、事態が何うなつて居るのか知り度いのだとい

ふことを、何うかして、云ひ度かつた、が、一言も挾むことの能きぬことを見出した。多數の聲が一遍に何か云つたり、叫んだりするので、流石のイリヤ・アンドレエーチも、有らゆることに贊成して、頭を首肯すに遑が無かつた位であつた、で、集團は、大きくなるかと見るうちに、割れて了まひ、そして、また造られ、搖れ、混亂し、それから、大きい卓子の方へと、部室を横斷つて動いた。

ピエールは、何か云はうと爲るのを妨げられたばかりで無く、その上に、邪見に遮ぎられ、攻擊され、突き除けられ、そして、宛然衆皆に取つての共通の敵ででもあつたかのやうに取り扱はれた。これは、彼の物を云つてから此方實にさま〳〵なことが云はれたので、誰もピエールの云つたことなどを覺えては居無かつたのだから、さう爲つたのは、彼が口へ出した考想に對して衆皆が不滿であつたといふ理由からでは無かつた、が、群集の氣を立たせるには、何か形のある愛の目的物とか、何か形のある憎惡の目的物が、是非無ければならぬいからであつたのだ。ピエールは、自分を後者にして了まつたのであつた。多數の演說者が、その昂奮した紳士に續てい出た、そして、皆な同なじ調子で話した。雄辯に、且創見を以て、話した者も多かつた。顏が善く知れて居て、『記者だ、記者だ』といふ叫びで迎へられたルスキイ・ヴィエストニイクの主筆のグリンカは、地獄は地獄と戰は無ければならぬいといふことや、自分は、電光の閃めきや、雷の音に對して莞爾して居る小兒は見たことが無いのだが、吾々はさういふ小兒であつてはならぬといふことを、云つた。

『何うして、何うして。其樣ものであつて堪まるものかい』と、一番遠くの集團の裡で、贊成さうに云つて居るのが聞こえて來た。

群集が漂つて行つた卓子には、ピエールが、殆ど除外例無く、それ〳〵の家では、心持の好い境遇の下に居るのを見、倶樂部でも見、ボストンをやつてる所も見たことのある老人たち——年老つた、白髮の、禿げた、制服で、平條紐を着けた七十歲代の知名の連中が坐つて居た。群集はその卓子へと近寄つた、尙且叫聲の轟きや、談話は續いて居た。一人づゝ、また時には一遍に二人づゝ、相續いで、背の高い椅子へと推し掛けて行つて、演說者たちは、自分たちの考想を云つた。後部に立つて居る人々が、演說者が自分の云はうと爲て居ることを、まだ云ひ切る間隙の無いうちに、それを引き取つて云つて了まひ、略された部分を滿たして了まうのであつた、それは、何の演說者に對しても左樣であつた。また、他の者は、熱くつて、蒸せ苦しいにも構はず、何か新しい考想を思ひ付いて、それを云ひ出さうと、骨折りながら、頭腦を惱

まして居た。ピエールの友人の、年老つた知名連中は、坐つて居て、相互に時々顔を見合せて居た、そして、さういふ人々の顔の多數は、唯だ、甚どく熱いと云つて居るのみであつた。

けれども、ピエールは、烈しく昂奮した心持になつた、そして、自分も亦、人々が云ふ言語の意味よりは、その人々の聲の高さや、顔容の方で、もつと多く云ひ表はされるところのもので、直ぐ動かされ、刺戟されることは、他の人々と少しも違は無いのだといふことを、集まつて居る人々に承知させ度くつて堪まら無い心持に、彼は襲はれた。彼は、自分の確信を捨てる積りは寸毫も無かつた、が、何うしてだか、左に右、自分が間違つて居るかのやうな氣持がした、で、言ひ直さうと思つた。

『僕は唯だ、何ういふことが必要なのか、知ることが能きるのであつたら、犧牲が爲易からうと、云つたんだ』と、彼は、誰の聲よりも高く聞こえさせやうと骨折りながら、云ひ始めた。

彼の傍に立つて居た少さい老人が、彼を見た、が、直ぐ卓子の彼方側で揚がつた叫聲の方へ注意を引かれて了まつた。

『左樣だ、莫斯科を救は無ければならん。彼女は救助者になるべきだ』と、誰かゞ怒號つて居た。

『彼奴は人類の敵だ』と、今一人が叫んだ。

『いや、僕の考想では……』

『諸君、さう壓しては、私は壓し潰ぶされて了まう……』

（二十三）

その途端に、顎の笑き出した、眼の鋭い、伯爵ラストオプチンが、將官の制服で、廣い平條紐を肩から掛けて、部室へ入つて來た、そして、彼の前に途を開く貴族たちの群集の裡を大急ぎで通つて行つた。

『皇帝陛下が、直きに此所へお出になります』と、ラストオプチンが云つた。『私は、彼方から直ぐに參りましたのです。吾々が今居るやうな位地では、討論の餘地は殆ど無いと考へます。皇帝は畏くも吾々及び商人階級をお喚び集めくださつたのです』と、ラストオプチンが云つた。

『彼所に居る彼等は鉅萬の富を握つて居り』――彼は、商人たちが居る廣間へ指しゝて――『それから、吾々の義務はといふと、民兵を供給し、そして、吾等自身何をも惜ま無いのがそれなのです。それが、吾々の爲し得る最少なのです』

知名連中は、卓子の傍で身を動かしながら、相談を爲た。その相談は物靜かであつたとは何うしても云ひ兼ねるものであつた。彼の總ての騷擾と熱心の後で、これ等の年取つた聲々が、相續いて、『承知しました』とか、或は、他とは少し違へる爲めに、『御同說です』など、云つて居るのが聞こえた時には、陰氣な心持が起された位であつた。

集會の書記は、莫斯科人は、その貴族の集會に於て、スモレエンスクの例に遵つて、千每十人の全く武裝其他の準備を爲た新兵を出すといふ決議を滿場一致でした、といふことを書いた。

坐つて居た紳士たちは、重い仕事から釋放されでもしたかのやうに、立ち上がつて、騷がしく各自の椅子を後へ突き遣り、脚を伸ばすやうにと、廣室をば、大抵誰か知人の腕を擊り、種種なことを話し合ひながら、歩き廻つた。

『陛下。陛下』といふ叫聲が不意に廣室ぢうに叫ばれた、そして、群集全體が入口へと突進した。

貴族たちの壁の間の、廣い小路を通つて、皇帝は廣室へ入つた。總ての顏が、恭々しい畏伏された好奇心を表はして居た。ピエールは、少許距れた所に立つて居た、で、皇帝が、勅語の裡で云つたことを、十分には聞き取り得無かつた。

彼は、唯だ、聞いた事がらだけから、皇帝が、國に迫つて居る危險や、彼が莫斯科の貴族の上に置いた希望のことを話したことを、覺つたのであつた。誰かゞ皇帝の勅語に答辭を述べた、そして、唯だ、ホンの寸時前に大書された決議を確めたのみであつた。

『紳士諸君』と、皇帝の震えた聲が云つた、昂奮の漣波が群集の裡に走り亘つた、で、それから、再、死んだやうな沈靜が支配した、そして、此度は、ピエールは、眞底からの感情で動かされた皇帝の非常に心持の好い聲を、判然と聞いた、それは、斯ういふのであつた——

『予は、決して、露西亞の貴族の忠節を疑は無かつた。けれども、今日は全く予の期待を超えたのであります。予は、祖國の名に於いて、諸君に謝します。紳士諸君、吾々は直に活動しやう——時は貴い……』

皇帝は、話し終はつた、群集は彼の周圍に集まつた、そして、八方で、熱心な感嘆が聞こえた。

『左樣だ、全く貴いんぢや——皇帝の御言語』と、イリヤ・アンドレエーチは、歔欷しながら、云つた。彼は何にも聞か無かつた、が、何でもに自分自身の解釋を附けたのであつた。

皇帝は、貴族が居た廣室から、商人たちが居た所へと、行つた。彼は、其所に十分程居た。

ピエールと、他に五六人は、皇帝が、商人たちの廣室から眼に感情の涙を持つて歸つて來るのを見た。後で聞いたのでは、皇帝は、商人たちへの勅語を始めるか始め無いうちに、涙が彼の眼から流れ出た、そして、感情で震えた聲で勅語を了はつたといふのであつた。ピエールが彼を見た時には、彼は二人の商人を伴れて出て來る所であつた。一人はピエールの知人——肥つた火酒釀造家——で、今一人の方は、市長の、瘠せた黄色い顔で、尖つた顎髯のある男であつた。二人とも、涙を滚して居た。瘠せた男は泣いて居た、が、肥つた火酒釀造家は小兒のやうに獻欷あげながら、云ひ續けて居た——

『吾々の生命も、吾々の持つて居りまする總てのものをさし上げませう、陛下』

ピエールは、この刹那には、自分が何れ程何物をも惜んで居無いかといふことゝ、自分は喜んで何樣な犧牲でも爲るといふことを證明しやうと思ふ外、何の願望も感じ無かつた。彼は、自分の演説の立憲的傾向を持つて居たのに對して、自分を責めた、彼は、それが與へた印象を消すやうな方法を何か考へ付かうと骨折つた。伯爵マモオノフが一聯隊出したといふことを聞いて、ベズウホフは直ぐ、自分は千人とその仕度とを供給するといふことを、伯爵ラストオプチンに、通じた。

老ロストオフは、自分が爲た事からを妻に話した時には、涙を抑へることが能き無かつた、彼は、即坐に、ペエティヤの願意を許した、そして、彼はペエティヤの名が軍隊のなかへ書き込まれるやうにする爲めに、自分で出かけて行つた。

次の日、皇帝は、發つて去つた。集まつた貴族は皆な制服を脱いだ、再、家や、倶樂部での、何時もの生活をやりだした、そして、唸りながら、民兵の徵集に就て、各自の支配人に命令を與へた、そして、自分たちの爲たことに、我ながら驚いて居たのであつた。

第二章

（一）

ナポレオンは、彼がヴレスデンへ行かぬければならぬかつたが爲めに、光榮の過度から判斷力を失はせられたが爲めに、波蘭の軍服を着させられたが爲めに、六月の朝の刺戟の強い印象を感じさせられたが爲めに、最初はクラアキンの前で、その後はバラショオフの前で、憤激を制することが能き無かつたが爲めに、露西亞と戰爭を始めることになつたのであつた。

アレクサンドルは、自分が個人として直接に侮辱されたと感じたので、一切の平和的談判を聽き入れ無かつた。

バルクレエ・ド・トオリイは、自分が、自分の任務を果たし、そして、名將であるといふ名聲を得ることが能きるやうにと、最も巧みに、軍隊を統率しやうと骨折つた。

ロストオフは、廣野を横斷つて突進し度いといふ誘惑に抵抗することが能き無かつたが爲めに、佛蘭西人を攻擊した。

で、さういふ風に、それと全く同なじやうで、各自の性來の性格、習慣、氣性、目的に從がつて、この戰爭に加はつた總ての無數の人々が行動したのであつた。彼等は各自自分々々の恐怖を持ち、慢心を持ち、享樂を持ち、憤怒の發作を持つて居た、そして、彼等は誰彼無しに、總べて、自分等は自分等が何を爲て居るかを知つて居るのだと想像し、又、自分等の爲めにそれを爲て居るのだと想像して居た、が、彼等は實際は歷史といふもの、責任の無い道具であつたのだ、そして、彼等の持ち來した仕事は、彼等自身には何とも確認することが能きずに了まつたが、吾々が見ればそれは明白なことであるのだ。

さういふのが、人生に於て活動する總ての人々の避け難い運命なのだ、そして、彼等が社會上の階級に於いて高い所に居れば居る程、一層彼等は自由で無いのだ。今は、千八百十二年の事件に加はつた人々は、最早餘程前に、舞臺を去つて了まつた、彼等の個人としての利害は、何の痕跡も殘さずに、消えて了まつた、そして、唯だ當時の歷史的の結果が、吾々の前には、あるばかりだ。

今こゝで一度、歐羅巴の諸軍が、ナポレオンの統率の下に、露西亞の奧へ沈み込んで、其所で死なぬければならぬかつたのだといふことを認めることにして見やう、さうすると、この戰

爭に加はつた人々の、自家撞着の、馬鹿な、實に怪しからん行爲が、吾々には善くその理由が解かつて來るのだ。

神は、自分々々の目的を達しやうと骨折つて居たこれ等の總ての人々をば、何樣な人も——ナポレオンやアレクサンドルでさへ、參加者中の最も下らぬ人々と同なじやうに——最も微弱な豫想も持つて居無かつたやうな、一つの巨大なる結果を成し就る爲めに、一緒に働くやうに、餘儀無くしたのであつた。

千八百十二年に佛蘭西軍の滅亡を來した原因が何であつたかは、今は、吾々には明瞭である。ナポレオンの佛蘭西軍の滅亡の原因が、一方に於ては、季節が遲過ぎたに拘らず、何の設備も無しに、露西亞の奥へ深入りしたこと、他方に於ては、露西亞の諸都市の燒けた爲めに戰爭が或る性質を帶ぶるに至つたこと、及び、それが爲めに、敵に對して露西亞人の烈しい憎惡の念が起されたこと、とにあることは、誰も爭はうとする者は無い。

が、その當時にあつては、これまで世界に現はれた最良の軍で、名たたる名將たちに率ゐられた八十萬の軍が、その半分の大きさの、それ自身も無經驗なれば、又、それを率ゐる將官たちも無經驗である所の軍と衝突して、斯ういふ風に滅亡して了さはうなどゝは、誰も一向思ひ掛が無かつたばかりで無く、さういふやうなことは何人も更に思ひ掛が無かつたのみならず、尙その上に、露西亞人の總ての努力が、露西亞を救ひ得べき唯一の事柄を妨げる方へと一々整然と向けられて居り、佛蘭西人の總ての努力は、ナポレオンの經驗及び彼の所謂る軍事的天才に拘らず、夏の終期に莫斯科に達すること、即ち、言語を換へて云へば、彼の滅亡に當然爲るべき譯であつたその事柄の、方へと向けられたのであつた。

佛蘭西の文士たちは、千八百十二年のことを叙するに當つては、ナポレオンは、戰線を廣げることに於て冒す危險を感じて居たことや、彼が戰鬪を爲やうと求めたことや、彼の元帥たちがスモレエンスクで止まつて居ろと彼に忠告したことを、確言するのが好きである。そして、彼等は、その當時でさへ、露西亞の戰役の危險が先見されて居たのだといふことを證明しようと、如上の種類の他の議論を幾つも提出するのだ。

又、他方では、露西亞の文士たちは、戰役の極く最初に於いて既に、ナポレオンを——スシャン人のやり方のやうに——露西亞の奥へ誘き寄せる爲めの計策が思ひ付かれて居たのだと云ふのが尙一層好きであつて、或る者は、この計策をブフウルに歸し、他の者は、それを或る佛蘭西人に、又他の者は、それをトオルに、尙他の者はそれを皇帝アレクサンドル自身に歸し

て居る。自分等の證據としては、彼等は、幾等か左樣いふやうな方法に云ひ及んで居るところが有るやうな或る日記だの、意見だの、手紙だのを擧げて居るのだ。

が、佛蘭西人か、露西亞人かの爲た事は、打算の結果であつたことを暗示する總てさういふやうな暗示は、唯だ實際に起つた事柄が、その暗示に符合したといふ理由のみで、今日では、さう見えるやうにされて居るに過ぎ無いのである。

若し、さういふ事件が起ら無かつたのであつたら、さうしたらば、さういふ暗示は、それと全然反對の性質の意見や暗示の數千、數百萬が、その當時には甚ごく流行したものでありながら、的中し無いものだと判つて了まつたので、忘却の地獄へ送られて了まつたのと丁度同なじやうに、人に顧みられ無くなつたに違ひ無いのだ。

何ういふ事件でも、その結果は、何時も非常に多數の假想の裡へ捲き込まれるもので、その結果が何うならうとも、無數の假想の中で、全然間違つて了まつた他の假想が爲されたことは忘れて了まつて、『左樣なるだらうと、僕が云つたでは無いか』と云ふ人が誰か知ら出て來るものなのだ。

ナポレオンが、戰線を伸すことの危險を先見して居たとか、露西亞人は、自分等の國の奥へ佛蘭西人を誘き寄せやうと思つて居たとか、想像するのは、明白にこの種類に屬することなのだ、そして、歴史家たちが、ナポレオンには、さういふ洞察を、露西亞人には、さういふ計策を、歸することの能きるのは、甚く無理な推論を以てするより外は無い。

有らゆる事實が、さういふ假想には全然反對して居るのだ。

戰爭全體に亘つて、露西亞人には、國の奥へ佛蘭西人を誘き寄せやうといふ考想も、意志も更に無くつて、反つて、他方では、國境を超えての佛蘭西人の最初の進軍を妨げる爲めに、有らゆる努力がなされたのであつた、そして、ナポレオンはといふと、彼は、自分の戰線を伸ばすことを寸毫も恐れて居無かつたのみならず、反つて前進の行動が行はれる度毎に、熱中に終はるやうな喜悦を感じ、そして、彼は、彼の始めの時分の諸戰役に於いてのやうな、戰鬪を求めやうとする熱心を、一向示さ無かつた。

戰役の極く最初には、わが諸軍は、離れ離れになつて居た、そして、吾々が吾々の有らゆる精力を傾倒した吾々の唯一の目的は、さういふ諸軍を合一させやうといふのにあつた、而るに、若し、吾々が退却して、吾々の蹤を追つて來るやうに敵を誘き寄せやうといふのが、吾々の考想であつたとすれば、軍力を合することに、寸毫の利益も無かつたのだ。

皇帝は、露西亞の國を防いで、寸歩も讓ら無いやうに軍隊を勵ます爲めに、軍に親臨して居た。ヅリッサの廣大な、防禦工事を施した陣營が、ブフウルの設計に從がつて設けられた、そして、退却の考想などは更に無かつたのだ。皇帝は、有らゆる後退的行動に對して、總司令官を非難して居る。皇帝は、決して、莫斯科の燒けることゝか、スモレエンスクに敵が入ることなどは、夢みることさへする筈が無かつたのだ、そして、軍が合した時に、皇帝は、スモレエンスクが取られて、燒かれて了まつて、全軍的戰鬪がその市の城壁の下で行はれ無かつたので、憤然となつたのであつた。

斯ういふのが、皇帝の考想であつた、が、露西亞の將官たちや、露西亞の人民は、敵前を退却するなどは、唯だそれを一寸と云つただけでも、尙一層憤然となつたのであつた。

ナポレオンは、わが諸軍を分裂させてから、國の內部へと進んで行き、戰鬪を行う五六回の機會を逸しさせて居る。八月に、彼はスモレエンスクに居た、そして、彼の唯一の考想は、何うすれば露西亞の奧へ進めるかといふことであつた——この前進的行動は、吾々が今日見る通り、確に彼に取つては自滅的なものであつたに拘らず、諸種の事實が、ナポレオンは、莫斯科へと進入して行くことの危險を、先見したのでは無かつたこと、アレクサンドルや、露西亞の將官たちは、その當時には、ナポレオンを誘き寄せやうなどゝは思ひ掛けも無くして、全くその反對であつたことを、證明して居る。

ナポレオンの軍は、寸毫も何等かの方略に從つてでは無く——何故なれば、誰もさういふ方略の可能を見さへも爲無かつたからなのだ——然し、この戰爭に加はつて居た人々で、それが窮局は何うなるものだとか、それが、露西亞の唯一の救濟に終るとかいふことは、一向思ひも掛け無かつた人々のさまゞな陰謀や、願望や、野心の混み入つた働の結果として、國の奧へ誘き込まれたのであつた。

有らゆる事が最も意外な風に進行して居る。わが諸軍は、戰役の當初には、離れ離れである。吾々は、明白に、戰鬪を行つて、敵の侵入を防ぎ止める目的で、その諸軍を合しようと骨折る、が、この合同を成し就げようと骨折つて居ながら、わが軍隊は、敵が吾々より强いのであるから、戰鬪を避ける、そして、さういふ風に敵を無意識に避けようとして居るうちに、吾々は鋭角を造る、そして、スモレエンスクまで佛蘭西軍を引き寄せる。が、佛蘭西人は、吾々の二軍の間を行進して來るので、吾々は鋭角を爲して退くと云つただけでは足り無いのだ、角は尙一層鋭角になつて、吾々は、バグラアチオンが、不人望な獨逸人のバルクレエ・ド・トオリ

イを憎んで居るが爲めに、尙一層退却する。バルクレエよりも古參將校であり、又他の一軍の司令官であつたバグラアチオンは、バルクレエの配下に立た無いやうにと、合同を能きるだけ遲くしようと骨折るのだ。

バグラアチオンは二軍の合同を長いこと隙取らせる——尤も、これが、露西亞の將官たちの主な目的ではあるのだが——そして、彼は、この進軍を爲ることは、自分の軍隊を危くするのだと想像し、又、尙一層、左方へと退いて、南の方へと行き、そして、側面や後方から敵を惱ますと共に、ウークエレナで自分の軍を補充する方が、自分に取つては良いのだと想像するが爲めに、さう合同を隙取らせるのだ。

が、これは、單に辭柄に過ぎ無かつた。彼は、自分より職位の低い、その憎らしい獨逸人のバルクレエの配下に自分を置くのが厭で堪まら無かつたので、この方略を思ひ付いたのであつた。

皇帝は、軍を勵ます爲めに、軍と一緒に居たが、彼の居ること丶、彼の優柔不斷と、助言者や方略の非常に多かつたこと丶が、軍の精力を麻痺させて、そして、軍は退却を行つた。

その時の方略は、ヅリッサの陣營で踏み堪へようといふのであつた、が、不意に、總司令官にならうと覗つて居るバウルッチが、彼の手强さで、ブフウルの方略が悉く捨てられて、一切の爲事がバルクレエに全任されるに至つたほどの印象を、アレクサンドルに與へた。が、バルクレエは、人望を贏ち得る人で無かつたので、彼の力は限られたものであつた。

軍は別れて居た、少しも統一が無く、一人の首領も無かつた、バルクレエは不人望であつた、で、斯ういふ一切の混雜や、分裂や、獨逸人の總司令官の不人望が、不決定と、敵との會戰を避けること丶を、引き起したのである、然し、軍の合同が遂げられたのであつたら、そして、又バルクレエが總司令官に任ぜられ無かつたらば、敵との會戰は何うしても避け難かつたのだ、所が、一方では、さういふやうな事情が獨逸人に對する反感を絶えず助長させた、そして、ます〳〵愛國心を喚び起すのであつた。

到頭、皇帝が、自分は、人民を動かし、國民的防戰を爲るやうに、勵ます爲めに、是非莫斯科と彼得堡に行か無ければなら無いといふ唯一の一番道理な辭柄の下に、軍を去つた。で、皇帝が莫斯科へ行つて了まつたことが、露西亞の軍隊の力を三倍にした。

事實は、皇帝は、自分が總司令官の權力に干渉し無いやうに爲る爲めに軍を去つて、自分が去つた後で、もつと斷乎たる處置が施されるだらうといふ希望を持つて居たのであつた。が、軍

の長官の位地は、だん〳〵混亂して、手も足も出無いやうになつた。ベニグセンや、大公や、高級副官たちの一群全體が軍に未だ殘つて居て、それが、總司令官の行動を監視し、彼を刺戟して手強い行動に出させようとするのであつた、バルクレエは、これ等の種々な皇帝附檢査官たちの眼の下では前よりも尙一層自由を失なつて了まつたやうに感じて、少しでも斷乎とした行動を爲ようとすることは、ます〳〵控へ目にするやうになつて、成るべく戰鬪を避けるやうに氣を付けたのであつた。

バルクレエは、用心堅固に構へ込んだ。皇太子は、謀叛だといふやうなことを仄めかして、總攻擊の開始を求めた。リュウボミルスキイや、プラニッキイや、ヴロッキイや、尙それ等の人人と同なじ種類の徒輩が、この混雜を更に一層甚くしたので、バルクレエは、さういふ連中を遠ざける爲めに、皇帝への宜い加減の使ひ用を拵らへて、波蘭人の高級副官たちを皆な彼得堡へ遣つて了まつて、ベニグセンや、太公に對しては、遠慮無く爭論しだした。

到頭、バグラアチオンの思ひとは反對に、二軍の合同が、スモレエンスクで成し就げられて了まつた。

バグラアチオンは、バルクレエの本營へと、馬車を驅つた。バルクレエは、衿飾を着けて、彼を出迎へて、自分の上官として彼に敬禮した。バグラアチオンは、雅量に於ては敢て讓るまいと、自分の職位が上であるに拘らず、バルクレエの配下に身を置いた、が、彼は、さういふ風に第二位に立つたけれども、バルクレエに對しては前よりは尙一層反對であつた。バグラアチオンは、皇帝からの特命で、直接の報告を爲るのであつた。彼は、斯うアラクチエーフに書いた——

『予は、皇帝の御意のまゝにする、けれども、予は大臣（バルクレエのこと）と一緒に爲事は何うしても能き無い。何うか、君の宜いと思ふ何處へでも、予をやつて呉れ、一聯隊の長でも滿足する、が、予は此所には何うしても居られ無い。——總司令部は、獨逸人で一杯だ、それで、露西亞人は、此所では呼吸苦しくつて堪まらん、そして、何も彼も實にたわいが無いのだ。予は、皇帝と國の爲めに盡して居るのだと思ふて居たのだが、實際はバルクレエに仕へて居るのだ。これは、何うしても、予には能き無いことなのだ』

二人の關係を尙一層惡くさせて了まつた、で、聯合的行動は益々不可能になつた。

彼等は、スモレエンスクで佛蘭西軍を攻擊しやうと爲た。一人の將官が敵狀の視察に出され た。この將官は、バルクレエを憎んで居たので、命令には從はずに、自分の朋友の或る軍團 長の所へ行つて、終日其所に居た、そして、自分が見もし無い戰場を批評する積りで夜になつ て、バルクレエの許へ歸つて來た。

戰場に關する喧嘩や、陰謀が進行して居る間に、そして又、吾々は佛蘭西軍が何處に居るの か一向知ら無かつたので、佛蘭西軍を探し出さうとして居る間に、佛蘭西軍はネヴィエロオフ スキイ枝軍と會戰して、スモレエンスクの眞の城壁の下といふばかりの所へと近付いた。

わが軍の交通線を保護する爲めに、スモレエンスクで全く豫期して居無かつた戰鬪に應じ無 ければなら無かつた。戰鬪が起つた。兩方で何千もの人間が殺された。

皇帝や、人民の望に反して、スモレエンスクは捨てられた。が、知事に裏切られたスモレエ ンスクの住民は市に火を付け、そして、他の露西亞の諸市に對してこの先例を提供して置いて、 莫斯科に避難し、自分等の損害を悲み、敵に對する憎惡の火の手を强めたのであつた。

ナポレオンは進む、吾々は退く、で、その結果は、ナポレオンを破るに必要な、正にその方 法が自然に用ゐられたことであつた。

（二）

息子の發足した次の日、公爵ニコラアイ・アンドレエーチは、公爵嬢マリイヤを喚び付けた。

『さア、何うぢや、これで氣が濟んだかい？』と、彼は尋いた。『お前は、私と息子とを喧嘩 さしたでは無いか。何うだ、氣が濟んだか？。それが、お前の所望ぢやつたらうな。何うぢや、 氣が濟んだらう。これは、私には苦しかつた、實に苦しかつたわい。私は、年を取つて、弱く なつて居る、それぢやに、お前は、此樣なことを望んで居つたのぢや。さア、思ふさま喜べ、 思ふさま喜べ』

で、それからといふものは、公爵嬢マリイヤは、全一週間父親には一度も逢は無かつた。彼 は病氣で、居室を出無かつた。

公爵嬢に取つては實に意外にも、公爵嬢は、この病氣の間老公爵がマドモアゼル・ブウリア ンヌさへ傍へ寄せ付け無かつたことを見た。唯一人ティフォンばかりが入ることを許されたので あつた。

週の終末になると、老公爵は、出て來て、再往時の通りの生活をやりだして、建築物や、花園のことに非常に熱心にかゝりだし、マドモアゼル・ブウリアンヌとの往時の關係を悉皆止めて了まつた。公爵嬢マリイヤに對する彼の顏容や、情無い樣態が、公爵嬢に向つて、斯う云つて居るやうであつた——

『さア、何うぢや、お前は、私のことを虛僞を云つたらう、お前は、彼の佛蘭西女と私との關係に就いて、公爵アンドレエーに虛僞の云付け口をして、彼と私とを喧嘩さしたらう。けれども、何うぢや、見ろ、私は、お前も、佛蘭西女も居らんでも、結構暮らして行けるでは無いか』

半日は、公爵嬢マリイヤは、ニコルウシカの稽古に掛つて、ニコルウシカと一緒に暮した、公爵嬢は、彼に露西亞語と音樂を自分で敎へた、そして、デッサレと談話を爲た。その後の時間を、公爵嬢は、自分の讀書や、乳母に逢ふことや、時々竊然と裏階段から逢ひに來る『神の人人』に逢ふことで、送つた。

公爵嬢マリイヤは、戰爭に對しては、一般の女性が戰爭に對して持つて居るのと同なじ考想を持つて居た。公爵嬢は、それに出て居る兄のことを心配して、慄へた、公爵嬢は、戰爭の實際は寸毫も解から無かつたけれども、人間同士殺し合ふやうにさせる殘酷さに慄へあがつた。公爵嬢は、この戰爭に限つての意義を覺ることが能き無いで、この戰爭も、その前にあつた幾つもの戰爭と同なじやうに思つて居た。

公爵嬢は、始終一緒になつたデッサレが、熱烈な興味を以てその戰爭の經過に注意して居たにも拘らず、自分の所へ尋ねて來た『神の人々』が『基督の敵』の侵入に就ての世間の風說を齎して來たに拘らず、それから又、再この頃は消息を爲だした今は公爵夫人ヴルベエッコイとなつて居たジュリイが、莫斯科から愛國心に富んだ手紙をよこしたに拘らず、その戰爭の意義を覺ら無かつた。

『私は、露西亞語で——バ・ルスキイ——で手紙をあげるんですよ、私の親愛な友の貴女』と、ジュリイは書いて、『何故だといふと、それは、私は佛蘭西人が憎いと共に、その國語も憎いからなんですわ。私は、それが話されるのを聞くのさへ、堪まら無く厭なんですよ。莫斯科では、今私どもは吾々の崇拜する皇帝に對する私どもの熱心で我を忘れて居るんです』

『私の氣の毒な夫は、猶太人の宿舍で、飢餓と不自由とを堪へて居ます、けれども、私は、

彼から來る音信で尙一層昂奮するんです』

『貴女は、自分の二人の息子を抱擁して、「私は此の二人と共に死ぬるのだが、決して、一歩も退かぬぞ」と云つたラエーフスキイの勇敢な行動を、最早必定お聞きなんでせうね。で、實際、敵はわが軍よりも二倍の數だつたに拘らず、わが軍は一歩も退か無かつたんですよ』

『私どもは、能きるだけ良く吾々の時を費して居ます、戰爭中は、戰爭中のやうにし無ければなりませんわ。公爵夫人アリナとソフィイが、終日私と一緒に暮して居ます、生きて居る夫たちの私ども惑れな寡婦は、綿撒絲をほぐしながら、種々な談話を爲るんですよ、唯だ貴女が居らつしやら無いのが、殘念で堪まりませんのよ』――云々。

何故、公爵嬢マリイヤが、この戰爭の意義全體を覺ることが能き無かつたかといふ重な理由は、老公爵が、戰爭のことは決して一言も云はず、戰爭のあることさへ云はず、それから、食事の時には、戰爭のことを話しだして一生懸命になるデッサレを屢冷嘲して笑ふのであつたからであつた。公爵の調子が、如何にも落着いて、動じ無い風であつたので、公爵嬢マリイヤは、一も二も無く彼を信じて居た位であつた。

七月の月ぢう、ずつと、老公爵は非常に忙がしく活動した。彼は、新に一つの果樹園を拵へ、家内の僕隷たちの爲めの新建物を建てた。唯だ一つ公爵嬢マリイヤの心配であつたのは、彼が極く少ししか睡なかつたことや、彼が、自分の居間で睡る平常の習慣を緩めて、毎日自分の寢る部室を變へたことであつた。或る時は、廻廊に、彼の野營寢臺を置くやうに云ひ付け、その次には、客室の長椅子や、ヴォルテエル式安樂椅子で睡て見、衣服を着たまゝで、マドモアゼル・ブウリアンヌでは無く、少年のベツルウシャが、大きい聲で彼に書を讀んで聞かせて居るうちに、うつら〳〵睡て了まひ、それから、再、食堂で夜を過すことも度々であつた。

八月の初時分に、彼は、公爵アンドレエーからの二度目の手紙を受け受つた。軍に向つて出發した後間も無く來た最初の手紙では、公爵アンドレエーは、自分が父親に向つてツイ云つて了まつた事柄に對して父親の宥免を請ひ、自分を惡く思はずに居て呉れと、願つた。老公爵は、これには、愛情に富んだ返事を送つた、そして、それから間も無く、彼は佛蘭西女と親しくすることを止めて了まつた。

ヴィテブスクが佛蘭西人に陷いれられた後で、その附近からよこした公爵アンドレエーの第二の手紙には、戰爭の簡短な話に加へて、その略圖や、その最後の結果に就ての彼の考想が書

いてあつた。その同なじ手紙の裡で、公爵アンドレエーは、戰地にそれ程近く、丁度軍の進路に當つて居る場所に居るのは都合が惡からうといふことを父親に說いて、是非莫斯科へ行くやうにと勸めたのであつた。

その日、正餐の時に、佛蘭西人が最早ヴィテブスクまで來たといふ風說があるとデッサレがいふのを聞いてから後で、老公爵は公爵アンドレエーからの手紙のことを憶ひ出した。

『今日公爵アンドレエーから手紙が來た』と、彼は云つた。『お前はまだ讀まんかね？』

『いゝえ、父上樣』と、公爵嬢マリイヤは、オヅ〳〵と答へた。手紙が來たことさへ知ら無かつたのだから、何で、それを讀む氣遣があるものか。

『この戰爭のことを書いて來て居る』と、老公爵は、侮蔑したやうな微笑で、云つた、さういふ笑顏は、此頃では、彼の習慣になつて了まつて、その時進行して居た戰爭のことを云ふ時には、何時もそれが伴なうのであつた。

『嘸ぞ面白いでせうな』と、デッサレが云つた。『公爵のやうな何でも知ることの能きる位地では……』

『えゝ、大變面白いのよ』と、マドモアゼル・ブウリアンヌが、口を挾れた。

『行つて、取つて來てくださらんか』と、老公爵が、マドモアゼル・ブウリアンヌに云つた。

『少さい卓子の上、彼の文鎭の下にあるからね』

マドモアゼル・ブウリアンヌは、熱心な大急ぎで飛んで行つた。

『あゝ、いゝや』と、老公爵は、顏を顰めて、叫んだ、『君行つて呉れ、ミハアイル・イヴァニイチ』

ミハアイル・イヴァニイチは起つて、公爵の居室へ行つた。が、彼は直ぐにはそれを持つて歸つて來無かつたので、老公爵は、不安さうに四邊をキヨロ〳〵見廻して、口拭巾を投げ落し、そして、自分で出かけた。

『彼奴には探せんのぢやらう、何も彼も引つくり返して了まう』

彼が行つて居る間、公爵嬢マリイヤ、デッサレ、マドモアゼル・ブウリアンヌ、それからニコルシウカさへ、默つて、一寸々々眼を見合せた。老公爵は、ミハアイル・イヴァニイチを伴れて手紙と設計圖とを持つて、急いで歸つて來た、が、食事の間それを讀ませはせずに、彼は、それを自分の側へ置いた。

客室へ行つてから、彼は、手紙を公爵嬢マリイヤに渡した、そして、自分は、新しい建築物

の設計圖を廣げて、それを調べ始めた、が、それと同時に、手紙を聲高く讀めと公爵嬢マリイヤに命じた。公爵嬢は、それを讀んで了まつてから、何か尋くやうに父親を見た。彼は、如何にも考慮に沈んだらしい態で、設計圖を調べて居た。

『貴下これを何う思し召しますか、公爵？』と、デッサレは、思ひ切つて、尋いて見た。

『私……私かね？』と、公爵は、何か不愉快な實在にまで喚び覺されたかのやうに、が、それでも、未だ圖面から眼を離さずに、叫んだ。

『戰地が吾々の方へ近寄りつゝあるのは、確らしいんですが……』

『は、は、は。戰地かね』と、公爵は叫んだ。『戰地は、波蘭で、敵はニイエメンを越へ得る氣遣は決して無い、私はこれまで左樣云つて居つたが、今も尙且左樣云ひますわい』

デッサレは、敵が最早ドニエペル河に來て居るのに、ニイエメン河のことを云ふ公爵を、呆れた態で見た、が、公爵嬢マリイヤは、ニイエメン河の地理上の位地を忘れて了まつて居たので、父親の云つたことは本當だと想像したのであつた。

『雪が溶けだすや否や、奴等は、波蘭の沼の裡へ呑み込まれて了まうわい。唯だ奴等にはそれが見えんだけぢや』と、自分には、さう長い前のことゝは思へ無かつた千八百〇七年の戰役のことを思つて居たらしい態で、老公爵は、言葉を續けた。『ベニグセンは早く普魯西へ進軍すれば宜いんぢや、さうすれば、形勢は一變するのぢやつた……』

『けれども、公爵』と、デッサレは怖々仄めかせて、『ヴィテブスクのことがお手紙の裡には出て居ますが……』

『あゝ。手紙の中かね……うん、左樣ぢや……』と、公爵は我知らず叫んだ。『左樣……左樣』

―彼の顏は不意に苦い表情を帶びた。彼は、寸時止まつた。『左樣、彼は、佛蘭西人が破られた……何とかいふ河の附近で……と、書いて來たね……何といふ河ぢやつたね？』

デッサレは眼を下げた。『公爵は其樣なことは寸毫も書いておよこしになりませんよ』と、彼は、低い調子で云つた。

『ナニ、書いて來ん、ふうん。いや、私は確にさうは思は無かつたよ』

長い沈默が續いた。

『左樣……左樣……おい、ミハアイル・イヴァアニイチ』と、彼は、頭を擧げて、新建築物の圖面を指ざしながら、不意に叫んだ。『これを何う變へれば宜いと思ふのかね……』。ミハアイル・イヴァアニイチは、卓子へと寄つた、それから、公爵は、新建築物の設計を論じた後で、公

爵嬢マリイヤとデッサレに腹立たしさうな一瞥をくれて、部室を出て去つた。

公爵嬢は、デッサレが父親の顔を見守つたドギマギした、驚いた顔容を見とめ、彼の默つて居ることに氣が付いた、そして、父親が客室の卓子から息子の手紙を持つて行くことを忘れて了まつて居るのを見て、甚く吃驚して了まつた、が、其樣なことを口へ出すとか、デッサレに彼がドギマギして居る理由を尋くとかは、爲し得無かつた、公爵嬢は、それが何だらうかと考へることさへ爲得無かつた。

晩になると、客室に遺れてあつた息子の手紙を取りに、公爵からミハアイル・イヴァアニイチがよこされた。公爵嬢マリイヤは、彼にその手紙を渡した。で、辛いことであつたけれども、公爵嬢は、父親が何を爲て居るのか尋いて見た。

『何時も忙がしくつておいでです』と、ミハアイル・イヴァアニイチは、丁寧だが皮肉な笑顔で答へた、それが、公爵嬢マリイヤを蒼くさせた。『新建築物に太く氣を入れておいでです。少し書箱をお讀みでしたが、唯今は』と、ミハアイル・イヴァアニイチは、聲を低くして、續けて、『書物机に就いておいでです、「遺言書」をお書きなんでせうよ』

近頃は、公爵の氣に入つた爲事の一つは、自分の死後に遺すべき筈の書類を整理することであつた、彼は、それを自分の『遺言書』と呼んで居た。

『アルバアティイチをスモレエンスクへお遣りなさるでせうか？』と、公爵嬢マリイヤが尋いた。

『さうです、彼の男は、支度をして、待つて居ます』

（三）

ミハアイル・イヴァアニイチが公爵の居室へ歸るといふと、公爵は、眼鏡を掛け、眼をば光避で蓋つて、抽出を開けた書櫃に坐つて居た。彼は、蓋被をした蠟燭の光で、自分の死後皇帝の手許へ出すのだと云つて居た原稿――彼は、それを自分の意見書と云つて居た――を、眼からずつと離して持つて、嚴かしい顏容で、讀んで居た。

ミハアイル・イヴァアニイチが入つて來た時には、老公爵の眼が、彼が今讀んで居るものを書いた時分の追憶の爲めに起された涙で一杯になつて居た。彼は、ミハアイル・イヴァアニイチの手から手紙を引つたくつて、それを自分の衣嚢へ突つ込み、草稿をかた付け、そして、長く待つて居たアルバアティイチを呼び寄せた。

彼は、スモレエンスクで爲て貰ひ度いと思ふことを書き付けた一枚の紙を手に持つて居た、そして、戸口に立つて居るアルバアティイチの前を通つて、部室の裡を彼方此方と歩きながら、自分の命令を與へた。

『第一――宜いか――この見本のやうな、金縁の狀紙ぢや――この見本を携つて行けば、何うしても間違う氣遣は無い、――塗料、――封蠟……』と、ミハアイル・イヴァアニイチの覺書をたどりながら、云つた。

彼は、部室を彼方此方と歩いた、そして、買物の覺書を一寸々々見た。

『それから、屹度、處分に關するこの手紙を知事に手渡しするんぢやぞ』

それから、彼は、自分が發明した特別な型で無ければならぬ新建築物の戸締りの閂を得ることを、細々と云ひ付けた。それから、彼の『遺言書』の入る一つ折の紙挾が要るのであつた。

總ての用向をアルバアティイチに悉皆吩咐けるに二時間以上かゝつた、が、未だそれでも、公爵は、彼を離さ無かつた。公爵は坐つた、そして、眼を瞑ぶり、うと〳〵と眠た。アルバアティイチは不安さうに身動きをした。

『うん、去け。去け。他に用があれば、お前を喚びに遣るから』

アルバアティイチは部室を出た。公爵は再書 檯へ行つて、それを一瞥し、手で紙に觸り、再それを閉ぢ、それから、卓子へ行つて、知事への手紙を書き始めた。

手紙を封じて、起ちあがつた時は、最早更深かつた。彼は、寢床へ入らうと思つた、が、彼は、眠られ無いで、横になるや否や、非常に心細い考想に惱まされることを、知つて居た。彼は、鈴を鳴らして、ティフォンを喚んだ、そして、その晩寢臺を置く場所を選ばうと、ティフォンを伴れて、諸方の部室を見廻つた。彼は、有らゆる隅を測り廻つた。

氣に入つたらしい場所は一つも無かつた、が、何處でも彼の居間の何時もの長椅子の上よりはましであつた。その臥椅子は、それに臥るといふと、さま〳〵な苦しい考想が彼の心の裡を通るといふ理由からして、彼に取つて實に厭な物であつた。彼の氣に協つた場所は一つも無かつた、が、それでも、喫烟室の洋琴の後の隅が、なかで一番氣に入つた、彼は、これまで一度も、其所で睡たことは無かつたのだ。

ティフォンと、今一人の家僕が寢臺を持ち込んだ、そして、寢床を取り始めた。

『左樣ぢや無い。左樣ぢや無い』と、公爵は叫んだ、そして、手づから、隅から一二寸彼方へ寢臺を推し遣り、それから再、手前へと少し引いた。

『いや、到頭、これで何も彼も爲つて了まうた、さア眠よう』と、公爵は思つた、そして、衣服を脱がせるやうに、ティフォンに命じた。

土耳古下衣や、股袴を脱ぐのに要する骨折で苦しさうに顔を顰めながら、公爵は到頭衣服を脱いで了まつた、そして、ドシンと寢床の上へと身體を落した、で、それから、自分の黄色い、凋びた脚を、侮蔑したやうに見詰めながら、考慮に沈んで居るやうに見えた。が、考想は何も無かつた、彼は唯だ、その同なじ二本の脚を持ち上げて、寢床へそれを入れるのに、懶かつたばかりであつたのだ。『あゝあ、何たる苦みだらうな。あゝあ、何故最期が斯うなか〳〵來無いのかなア？。何故貴樣は俺を捨てゝ置いて呉れたのかい』と、彼は自分自身に向つて云つた。唇を結んで、彼は、二萬度目の努力をやつた、そして、其所で横になつた。が、彼が仰向になるや、ならぬかに、寢床全體が、それが深い呼吸をして、ごろ〳〵して居るかのやうに、徐かな、規則正しい動きで、前方へ後方へ不意に搖れ始めた。斯ういふことは、公爵には、殆ど毎晩であつた。彼は、今瞑ぶつたばかりの眼を開けた。

『少しも安眠めん。畜生』と、彼は、何物かに對して憤然となつて、叫んだ。『左樣、左樣、未だ何か寢床に入つてから考へようと思つて居た重要なこと、いや、極く重要なことが有つた筈ぢやが。閂かな？。いや、それは彼男に云つた。いや、何か客室で有つたことなんぢや。公爵嬢マリイヤが何か馬鹿なことを繰り返した。デッサレ――彼の痴愚奴――が、何か口を挾れた。俺の衣囊に何か有つたわい。何うも憶ひ出せん。ティシカ、吾々が食事の時に何を話して居たかなア？』

『公爵ミハアイルのことで……』

『默れ』

公爵は、卓子をドンと叩いた。『いや、分つた――公爵アンドレエーの手紙ぢや。公爵嬢マリイヤが、それを大きい聲で讀んだ。デッサレは、ヴィテブスクのことを何か云つたわい。さア、これから、彼を讀まう』

彼は、ティフォンに云ひ付けて、自分の衣囊から手紙を取つて來させた、そして、レモナアドと蠟燭を載せた少さい卓子を、寢臺の傍へ置かせて、それから、眼鏡を掛けて、讀み始めた。夜の沈静の裡で、綠色の蓋被の下での蠟燭の弱い光で、手紙を讀んで行くまゝに、其所で始めて、彼は、少時の間それの十分な意義を呑み込んだ。

『ヴィテブスクに佛蘭西人が居る、四日の進軍で彼等はスモレエンスクに達することが能き

る、或は最早其所へ來たかも知れん。ティシカ』。ティフォンは前へ跳び出た。『何でも無い。何でも無い。何でも無い』と、公爵は叫んだ。

彼は、蠟燭立の下へ手紙を推し込んだ、そして、眼を瞑つた。

と、彼の前には、ダニュウブ河――晴々した正午時――蘆――露西亞軍の陣營、それから、ボチ・オムブキンの花やかな色の天幕へ行きつゝある、顏に皺などは一つも無い、健康な、機嫌の好い、賑やかな、赤い顏色の若い將官の自分自身などが、見えて來た、そして、『お氣に入りの人』に對する憎惡の燃え立つ感情が、その當時の烈しさと同なじ度合で、彼の心の裡で動いた。彼は、ボチ・オムブキンとの最初の面會の時に云はれた有らゆる言語を憶ひ出した。それから、彼の想像は、再び、圓々とした背の低い、薄黃色い肥つた、顏の女――マアツウシカ・インペラツリイツァ――國母陛下――それから、その皇后が彼に初めて謁見を仰せ付けられた時の、皇后の笑顏や、お世辭を、彼の前へもたらし來たつた、又それから、彼は、葬龕に上で見えた皇后の顏や、ズウボフと、皇后の手に近寄る權利のことで、皇后の棺前で喧嘩した事などを憶ひ出すのであつた。

『あゝあ、彼樣いふ往昔が、歸つて呉れて、それから、現在が殘らず――直きに――直きに――終つて了まうて、俺が到頭安息を見出すことが能きるやうに、何うにかしてならんものか

なア』

（四）

荒涼丘――公爵ニコラアイ・アンドレエーチ・ボルコオンスキイの領地――は、スモレエンスクから大凡六十露里、莫斯科海道から三露里の所に在つた。

その晩、公爵がアルバアティイチに用を云ひ付けて居る間に、デッサレは、公爵嬢マリイヤに寸時話を爲度いからと云つて、そして、公爵嬢の父親の公爵が、何うも身體が好く無いのではあり、且、公爵アンドレエーの手紙で見れば、荒丘涼に居るのは危險の伴は無いといふ譯には行かぬことが明白であるのに、公爵は、自分たちの安全の爲めに處置を爲ることを承知し無いのだから、公爵嬢からスモレエンスク縣の知事に宛た手紙をアルバアティイチに持たせてやつて、事態の實際と、荒涼丘が何れ程の危險に迫つて居るかといふこととを、問ひ合はせたら何うかと、丁寧に公爵嬢に忠告した。

デッサレは、公爵嬢の爲めに、知事に宛た手紙を書いた、公爵嬢はそれに署名した、で、それが、知事に手渡ししろ、そして、若し危險が差し迫まつて居るのであつたら、能きるだけ早

く歸つて來い、といふ吳々もの吩咐で以つて、アルバアティイチの手に渡された。

種々な吩咐を殘らず受けて了まつてから、アルバアティイチは、白海狸の帽子――公爵からの下り物――を冠ぶり、公爵が携つのと全く同なじやうな太い杖を持つて、家ぢうの僕婢に送られて、肥つた葦毛の馬が三頭附いて居る皮屋根の圓蓋馬車へ乘りにと、行つた。

轅鈴が縛り附けられ、小さい馬具鈴は紙で詰められた。公爵は荒涼丘で鈴を使うことを許さ無かつたのだ。が、アルバアティイチは、長い旅行では、その音を聞くのが好であつた。彼の朋輩たち、村會の書記、家の書記、饅頭菓子師、食器所附の下女、二人の年取つた女、若い馬丁、馭者、それから、其他の家內の隷僕たちの幾人かが、アルバアティイチを送つて出た。

彼の娘が、坐の背へ物を詰め、その下へ、更紗の蓋のある蒲團を二三枚詰めた。彼の妻の妹の年取つた女は、竊然と小さい包を押し込んだ。馭者のうちの一人が、アルバアティイチに手を貸して、彼を馬車へ乘らせた。

『やれ、やれ、女の、大業な騷ぎやう。あゝ、女といふものは、女といふものは』と、彼は、ハア〳〵息を吐きながら、老公爵そつくりの短い速語で、叫んだ、で、彼は圓蓋馬車の內で坐を占めた。仕事に就ての最後の命令を村會の書記に與へてから、アルバアティイチは、禿頭から帽子を脫いで、三度十字を切つた――但し、この點は、彼は、確に、公爵の眞似を爲たのでは無かつたらう。

『若し、何かあつたら――お前さん――お前さん――急いで歸つて來てお吳れよ、ヤアコフ・アルバアティイチ、後生だから、何卒私たちのことを可愍さうだと思つてお吳れよ』と、彼の妻は、戰爭と敵の風說をば、それと無く言語の裡へ含ませて、叫んだ。

『あゝ、女ども、女ども。女の大業な騷ぎやう』と、アルバアティイチは獨語のやうに唸つた、そして、馬車を乘り出して、周圍の野をキヨロ〳〵見廻しながら行つた――その野の或る者は、黃色いライ麥で蓋はれ、他の者は、未だ靑い繁つた燕麥で蓋はれ、又他の場所では、人々が二度目の種播を丁度始めて居るのであつた。彼は、乘り進みながら、その年は非常に豐作であつた夏麥を賞でた、それから、彼は、刈人どもが最早爲事を始めだして居たライ麥の野を嬉しさうに見詰めた、そして、その次の種播や、收穫に就ての心の裡の見積を爲、又自分は公爵の云ひ付けを何か忘れはしまいかと、危ぶんだのであつた。

馬に飼料を遣る爲めに、途で二度止まつてから、アルバアティイチは、八月の四日に、市へ行き着いた。

途中で輜重馬車と兵士の一隊に逢つて、それを追ひ越した。スモレエンスクに近づくに從つて、彼は、遠方での銃砲の音を聞いた、が、さういふ音は彼を驚かさ無かつた。彼は、市の近邊で、天幕が、非常に好く穣つた燕麥の野の眞中に、張られ、その燕麥を、兵卒どもが、馬糧の爲めらしく、刈つて居るのを見て、何よりも一番驚かされたのであつた、この事がアルバアティイチを驚かした、が、それも、自分の用事にばかり氣を取られて居た彼の心から、直きに滑り去つて了まつた。

アルバアティイチの生涯の有らゆる利害は、三十年以上もの間、公爵の望を充たすことにばかり限られて居た、で、彼はこの狹い圈内から決して一歩も踏み出さ無かつた。公爵の指圖を實行することに關係の無いことは、何事でも、彼の利害の念を動かさ無かつた、で、さういふ事はアルバアティイチに取つては存在して居無いと云つて宜い位であつたのだ。

八月の四日の晩方に、スモレエンスクに達して、アルバアティイチは、ドニエペル河の彼方の、ガチエンスキイ郊外の、フェラポオントフといふ元門番であつた男のやつて居る旅宿に泊つた、それは、三十年以來彼の本營にする習慣になつて居た家であつた。フェラポオントフは、三十年前に、アルバアティイチの默許の下に、公爵の森を一つ買つて、商買を始め、そして、今は、自分の住宅と、旅宿と、穀物店とを持つて居た。フェラポオントフは、厚い唇の、厚い段鼻の、黑い皺んだ額に瘤の幾つかある、大きい腹部の、中年の、肥つた、陰色の顏色の、恰幅の好い農夫であつた。

フェラポオントフは、色更紗の襯衣と直衣のまゝで、店の表口に立つて居た。アルバアティイチの姿を見るといふと、彼は出迎へた。

『好くお出なすつた、ヤアコフ・アルバアティイチ。市から逃げ出す人が隨分あるのに、お前さんは市へ來なすつたね』と、亭主が叫んだ。

『そりやア一體何ういふことなんだい？。市から遁げ出す？』と、アルバアティイチが尋いた。

『今云つた通りさ。奴等は馬鹿さね。奴等は皆な佛蘭西人を怖がつてるんですせ』

『女の饒舌だ。女の饒舌だ』と、アルバアティイチは唸つた。

『私もさう思ふだよ、ヤアコフ・アルバアティイチ。私は、奴等に、奴を入れる勿といふ命令が出てるのだから、勿論奴の入つて來る氣遣は無えんだてつて、云つてきかせるだがね。でも、彼樣いふ農夫奴等ア、馬一匹と荷馬車で三留取りやアがるだよ。こりやア基督信徒の爲るこつちやア無えね』

ヤアコフ・アルバアティイチは、フェラポオントフの云つた事柄を碌に聞かぬ無かつた。彼は、沸茶器と、馬に食はす干草とを臭れと云ひ、そして、茶を啜つた後で、寢床へ入つた。

夜通し、軍隊が、街に沿ふて、旅宿の傍を足音高く通つた。次の朝、アルバアティイチは、彼が何時も市では着る短上衣を着て、用足しにと出かけた。朝は麗かであつた、そして、八時には最早暑かつた。『麥の刈込みには持つて來いといふ日だな』と、アルバアティイチは、一人で云つた。市の彼方には、銃砲の音が、早朝から聞こえて居た。八時頃には、猛烈な砲聲が、銃聲に加へて聞こえた。

街々は、右往左往と急ぐ人民で混み合つて居た、兵士の群集もあつた、が、何時もと寸毫も異らず、辻馬車は駈けて居、商人どもは、各自の店口に立つて居、朝勤行が教會堂で行はれて居た。

アルバアティイチは、商店や、縣の官衙や、郵便局や、知事の宅で、用足しを爲た。縣の官衙でも、商店でも、郵便局でも、何處でも、誰も彼も、戰爭のことと、今にも市へ攻め込んで來つつある敵の談話を爲て居た。誰も彼も、自分より他の誰も彼もに何うしたら宜からうかと尋いて居、誰も彼も、自分より他の誰も彼もを安心させやうと爲て居た。

知事の宅へ行くと、アルバアティイチは、人民の非常な群集や、哥薩克騎たちや、知事の旅行馬車を見た。入口の昇降段で、ヤアコフ・アルバアティイチは、地方の紳士二人に逢つたが、そのうちの一人は彼の知人であつた。彼が知つて居たその貴族――前にはイスプラアヴニイク、即ち、地方の警務長であつた男――は、餘程激して話を爲て居た。

『だが、君、眞個に冗談ぢやア無いせ』と、彼は云つて居た。『獨身の人は何でも無いさ、人は、獨身なら貧乏も辛抱能きるよ、けれども、家内十三人と來て、全財産が何うなるやら分からんとなつて見給へ――吾々を此樣な窮境になさせた當局の責任は一體何うなるんだい？。えい、彼樣いふ惡黨どもは絞殺し了まうのが宜いんだ……』

『まアさ、まアさ。左樣激しちやア不好』と、今一人の方が云つた。

『斯うなりやア、最早何うならうと、同なじだ、何が構うものか、聞くなら聞かしとくさ。おい、吾々は犬ぢやア無いよ』と、前警務長が云つた、そして、見廻すと、アルバアティイチを見付けた。『やア、ヤアコフ・アルバアティイチ、何の用で來たね？』

『閣下から知事へのお使で』と、アルバアティイチは、得意さうに頭を擧げ、上衣の胸へ手を置いて、答へた――それは、彼が、公爵のことを憶ひだす時には、何時でもやる癖であつた。『戰

爭の樣子を確める爲めのお使ですわい』と、彼は云つた。

『うん、では、確めるが宜い』と、地主は叫んだ。『荷馬車一輛も得られ無いんだ――何にも得られはせん。彼だ、聞き給へ』と、彼は、銃砲の音が聞こえる方角へと人々の注意を喚びながら、叫んだ。『彼が、奴等が吾々を落した窮境なんだ、吾々總てを破滅に陷いれたんだ――惡黨奴等』と、彼は再呟いた、そして、昇降段を下りて行つた。

アルバアティイチは、頭を振つた、そして、上つて行つた。應接室には、商人たちや、女どもや、屬官たちが居て、默つて一寸々々顏を見合はせて居た。知事の居室への戸が開いた、衆皆起ち上つて、前へと推し掛けた。部室の裡からは、一人の屬官が、急いで出て來て、一人の商人と二言三言交はし、頸へ勳章を吊けて居る肥つた屬官を手招きして、自分の後へ隨かせ、そして自分を見送る多くの眼や、種々な問を避けやうとするらしい態で、再戸の彼方へ入つて行つて了まつた。

アルバアティイチは、人を推し分けて進んだ。その屬官が再出て來た時に、彼は自分の上衣の胸の所へ手を置いて、二通の手紙を、その屬官に渡した。

『男爵アッシへ、元帥公爵ボルコオンスキイから』と、彼は、その屬官が、振り向いて、手紙を受け取つた位、それほど重々しく、意味强く云つた。寸時經つてから、知事はアルバアティイチを喚び出した、そして、忙がしさうに、彼に斯う云つた――

『公爵と公爵嬢に、我輩は、斯ういふことに就ては、何も知らんのだと、傳へて呉れ。我輩は上官からの命令通りにやつて居つたのだ。――これを』

彼は、アルバアティイチに、一枚の書付を渡した。

『だが、公爵はご病氣ださうだから、我輩は、莫斯科へ行かれることをお勸めする。我輩自身も行くのだ――直ぐ。さう申しあげて呉れ』

が、知事は、言語を云ひ切り終へ無かつた、汗みづくになつて、息を切らせた一人の將校が駈け込んで來て、佛蘭西語で忙はしく二言三言云つた。恐怖の表情が知事の顏を横斷つた。

『行け』と、彼は、アルバアティイチに向つて、顏を首肯かせて、云つた、それから、將校に種種尋き始めた。惑れ氣な、恐れた、爲ん方無げの眼付が、アルバアティイチが、知事の居室を出て來た時に、彼を目送つた。今は、だん〳〵近く、だん〳〵烈しくなるばかりであつた砲擊に我知らず聞き入りながら、アルバアティイチは、旅宿へ歸らうと急いだ。

知事が呉れた書類は次のやうなものであつた――

『本官は保證するが、スモレエンスクは寸毫も危險で無い、で、それが何等の危險に露さるゝことは全然有る氣遣は無いのだ。本官は、一方に於て、公爵バグラアチオンは、他方に於て、スモレエンスクの前面で合同する筈だ、それは本月二十二日に能きるのだ、で、この二軍が、力を合せて、貴官の治下にある同胞の爲めに防戰し、祖國の敵が追ひ拂はるゝか、若くは、吾軍の勇士が悉く死に盡くすまで、力戰する。貴官は、これに依つて、スモレエンスクの住民を落ち着かせるべき十分の權利が貴官にあることが、お解りであらう、何となれば、斯の如き勇敢なる二軍に依つて防禦せらるゝ者は、何人と雖ども、勝利がその二軍に歸すことを信じて安心して居られ得るから』。（バルクレエ・ド・トォリイから、スモレエンスクの民政長官男爵アッシへの軍略通牒――千八百十二年）

住民は、街々を、心配さうに、さまよひ廻つて居た。

家具、椅子、簞笥、其他有らゆる種類の道具を滾れるほど積んだ荷馬車が、家々の庭門から出て、街を進んで居た。フェラポオントフの家の隣の家の前には、荷馬車が幾つか立つて居た、そして、女たちが、相互に暇乞を爲合ひ、別れのお饒舌をやつて居た。飼犬が馬の頭の近邊を、吠えながら、跳び廻つて居た。

アルバアティイチは、平常よりはもつと素速い歩き振りで、庭へ出て、彼の馬車と馬が入れてあつた小舍へと直に行つた。馭者は眠て居た、アルバアティイチはそれを起こし、馬車に馬を附けるやうに云ひ付け、そして、家へ入つて行つた。亭主の部室では、小兒の泣聲や、女の切々の啜り泣きや、フェラポオントフの非常な權幕らしい慳貪聲が聞こえた。物怖をした雌鷄のやうな、酒場部室を跳び廻つて居た女料理女は、アルバアティイチを見るや否や、叫んだ、『打ち殺すとこなんですよ――内儀さんを打つてるんですよ。内儀さんを打つて、引き摺り廻してるとこなんですよ』

『何うして其樣なことを爲だしたんだい？』

『内儀さんは、逃げやうと云つたんです、女だから當り前でさアね。「私たちを伴れて何處かへ逃げてください」と、内儀さんが云つたんです、「私や、小兒たちを敵に殺させ無いやうに爲てくださいよ、誰も彼も逃げるんです、私たちだつて逃げずに居られるもんですかよ」と、云つたんです。だもんで、旦那は打ちだしたんですよ。今、さんざ打つて、引き摺り廻したとこなんですよ』

アルバアティイチは、贊成したかのやうに、頭を頷づかせた、そして、その先は何も聞かうとは

爲無いで、自分の買ひ物が置いてあつた部室へ行つた。それは、亭主の居室の眞向であつた。

『惡黨、惡漢』と、その途端に、孩兒を抱いた、頭へ裂けた頭布を載せた、瘠せた、蒼い顏の女が、その部室から跳び出して來て、叫んで、庭へと昇降段を跳ぶやうに降りて去つた。

フェラポオントフは、女の後から出て來た、そして、アルバアティイチを見るといふと、彼は直衣を引き下げ、髪を撫で付け、欠伸をし、そして、アルバアティイチの後に隨いて部室へ入つた。

『では、これで最早お歸りなさるんですかい？』と、彼は尋いた

この問には少も構ひ付けず、亭主を見も爲無いで、アルバアティイチは、買物を一包に纏めてから、宿賃を何程拂へば宜いのか尋いた。

『それは今直にお話しませう。だが、知事の所では何んな模樣でしたい？』と、フェラポオントフは尋いた。『何樣な物語だつたんですい？』

アルバアティイチは、知事は別に決定的なことは何にも云は無かつたと答へた。

『何うして、荷物なんぞ持つて立ち退けるこつちやア無い。いや、何うして、ドロゴブウズへ行くのに七留だと云やアがるんだからねえ。ねえ、全く奴等にやア慈悲も情も無えんだね』と、彼は、云つた。『セリヴァーノフの野郎、木曜日に旨くやりやアがつた、野郎一袋九留で粉を大部軍隊へ賣つたでがすよ。何うです、お茶をあがりますかね？』と、彼は云ひ添へた。

馬が附けられて居る間、アルバアティイチとフェラポオントフは、茶を啜つて、麥の價格や、收納額や、刈り込みに持つて來いの好天氣などのことを話し合つた。

『やア、少許靜まつて來たらしいな』と、フェラポオントフは、三杯目の茶の後で起ちあがりながら、云つた。『吾が軍が勝ちだしたに違え無えね。敵の奴等を何うしたつて入れ無えといふ話だつたですよ。勿論、吾々はなか〳〵強いんだ。マッヴエー・イヴァーノヴィイチ・ブラアトフは、この間奴等を一萬八千マリイナ河へ追ひ込んで、殘らず溺れさせちやつたてえ話なんですせ』

アルバアティイチは、自分の買物を取り上げて、入つて來た馭者に渡した、それから、亭主に勘定を拂つた。車輪の音が戶外でし、通る荷馬車の馬の足音や、鈴の音が聞こえて來た。最早午後大部遲くなつて居た。街の片側は蔭になつて居たが、今一つの側は、日に明るく照されて居た。アルバアティイチは、窓から外を一瞥し、そして、戶口へと行つた。不意に、遠くのヒュウヒユウいふ異樣な響と、鈍いドサリといふ音が聞こえたと思ふと、直ぐ續いて、窓を鳴らすやうな、砲の長く反響する音がした。

アルバアティイチは、街へ出た、二人の人が橋の方へと駈けて居た。諸方で、圓彈の唸りや、物

に中る音や、市へ落ちる爆彈の破裂が聞こえた。が、斯ういふ音は、市の外で聞こえた砲擊の音に比らべては、市人の注意を少しも引か無かつたと云つても宜かつた。それは、ナポレオンが、五時に、百十三門の砲から開くことを命じた砲擊であつた。人民は、最初のうちは、この砲擊の意義を覺ら無かつた。

落ちる爆彈と砲丸の音が、最初は唯だ人民の好奇心を高めたのみであつた。その時までは小舍の裡で泣き喚いて居たフェラポオントフの妻は、泣き止んだ、そして、孩兒を抱いて門へ出て來て、默つて人民を見、音に聞き入つて居た。

料理女と番頭も門へ出て來た。彼等は、誰も彼も、自分たちの頭上を飛んで行く砲彈を、熱心な好奇心で、一寸とでも見やうとして居た。五六人が、一生懸命に談話を爲ながら、角を曲つてやつて來た。

『恐ろしい力だな』と、一人が云つて居た、『屋根も天井も粉微塵になつちまうんだぜ』

『地面を掘る豚のやうに、入つちまやアがる』と、今一人の方が云つた。

『上等ぢやア無いか？。眼が覺めらア』と、その男は笑ひながら、云つた。

『逃げ出して宜かつたぜ、さも無きやア、ビシヤンコに叩き潰されるとこだつたんだ』

他の者がこの連中と一緒になつた。彼等は立ち止まつて、自分たちの家の直ぐ傍へ砲彈の落ちた狀況を話した。その間も、他の砲彈――或は、速い、厭な恐しいヒユウ〳〵いふ砲彈、或は、心持の好い唸り聲の爆彈――が間斷無く人民の頭上を飛んで居た、が、一つも落ち無かつた、悉皆飛び越して行つたのだ。アルバアティイチは彼の二輪馬車に乘つた。フェラポオントフは、門に立つて居た

『餘まり出過ぎるぜ』と、彼は、赤い袴で、袖をたくし上げ、露裸の腕をぶら〳〵させながら、人々の談話を聞きにと角へ歩いて行つた料理女に叫んだ。

『まア大變だわねえ』と、料理女は云つて居た、が、主人の聲を聞いて、たくし上げた袴を下して歸りだした。

再何物かがシユウ〳〵云つた、が、此度は、極く近くで、舞ひさがる鳥のやうであつた、街の眞中で火がパツとし、彈の音がした、そして、街が烟で一杯になつた。

『畜生、何うしたんだい？』と、フェラポオントフは叫んで、料理女の傍に駈け付けた。

その途端に、女どもから、惑れ氣な泣聲が起つた、孩兒は甚だく怖えた泣聲を揚げた、そして、人々は蒼い顏で料理女の周圍に群がつた。總てさういふ人々の上に、群集の裡から、料理

女の呻きと叫びが立ち登つた。

『あゝあ、善い親切な方たち、情深い朋友、何卒私が死な無いやうにしてください、善い親切な方たち……』

五分後には、誰一人街には居無かつた。破裂した爆彈の爲めに脚を折られた料理女は、厨房へ擔ぎ込まれて居た。アルバアティイチと、彼の馭者と、フェラポオントフの妻や小兒たちと、門番とは、穴倉に坐つて、外の模樣を聞いて居た。砲の轟、彈の唸、それから、有らゆる音よりも高かつた料理女の愍れ氣な呻きなどが、寸時の間も止ま無かつた。フェラポオントフの妻は、孩兒を愛撫したり、落ち着かせたりするのと、穴倉へ來る誰を捉まへても、街に殘つて居た良人が何處に居るか聞くのとを、交り番こに續けて居た。

番頭は、主人は、人々が、奇驗なスモレエンスクの聖像を擔ぎ出さうと爲て居る伽藍へと、群集と一緒に行つたことを話した。

薄暮頃には、砲擊が靜まりだした。アルバアティイチは、穴倉から出て來て、戸口に立つた。晴れた夕空が烟で全然曇つて居た。そして、新月が、その烟の裡で大空高く輝いて居るのが、異樣な態に見えた。砲の恐しい轟が止んだ後では、沈靜が市の上に懸つて、唯だそれを破るものは、市ぢうのやうに思はれた足音と、呻唸や遠方の叫聲の響と、火の爆る音のみであつた。料理女の呻きは最早止んで居た。二つの方角で、火事からの烟の黑い雲が立ち上つて、漂ひ去つて居た。種々な制服の兵士が、隊伍無く、攪き廻された蟻塚から出た蟻のやうに、街を四方八方へと、歩いたり、駈け廻つたりして居た。彼等の數人が、アルバアティイチの目前で、フェラポオントフの庭へ駈け込んだ。彼は、門へ出て行つた。密集して、急いで、歸つて來る聯隊が、街を全然塞いで居た。

『市は降服した、逃げろ、逃げろ』と、アルバアティイチの姿を見附けて、一人の將校が云つた、そして、直ぐ兵卒へ振り向いて、彼は叫んだ、『庭を駈け拔けると承知せんぞ』

アルバアティイチは、家へ戻つた、そして、馭者を喚んで、出發しろと云ひ附けた。アルバアティイチと馭者に續いて、フェラポオントフの家內ぢうが出た。烟や、最早薄暮の裡で見えだした、燒けて居る家々の焰さへ見えだすといふと、それまでは默つて居た女どもは、火事を見詰めながら、不意にワッと泣きだした。それに、調子を合せるかのやうに、同なじやうな泣き聲が、街の他の部分で起つた。アルバアティイチと馭者は、振える手で、小舍の下に居た馬の糾れた手綱や引綱を直した。

アルバアティイチは、門から馬車を驅り出して居る時に、十二人程の兵卒がフェラポオントフの開いた店で聲高に話し合つて居るのを見た。彼等は、自分たちの袋や背嚢へ、小麥粉や太陽花種を詰め込んで居た。その途端に、フェラポオントフは歸つて來て、店へ入つて行つた。兵卒等を見るといふと、彼は怒號り付けやうと爲た、が、不意に彼は止めた、そして、自分の髮を攫んで、泣き笑をしだした。

『悉皆持つてけ、若者たち。殘しといて惡魔に取らせて呉れる勿い』と、彼は叫んで、自分も袋を取りあげて、街へ擲りだした。兵卒のなかの幾人かは吃驚して逃げだした、その他の者は尙且自分たちの袋へ詰め込んで居た。アルバアティイチを見ると、フェラポオントフは、振り向いた。

『露西亞は最早萬事休だ』と、彼は叫んだ。『アルバアティイチ。最早何うにも爲やうが無え。自分で火を放けるぞ。最早爲やうが無え……』。フェラポオントフは、家へ駈け込んだ。

兵士の途斷無い流が街全體を塞いで居た、で、アルバアティイチは通ることが能き無いで、待た無ければなら無かつた。フェラポオントフの妻や小兒たちも、荷馬車の裡に坐つて、發つことが能きさうになるのを待つて居た。

最早この時は全く暗かつた。空には星があつた、そして、時々新月が、烟の覆巾越しに輝いた。アルバアティイチと、彼の宿の內儀さんの馬車は、兵士や他の車の列の裡を徐々と動いて行つた、そして、ドニエペル河へ下りる坂で、全然止まらせられて了まつた。何も彼も立ち往生になつて了まつた十字街から遠く無い橫街で、幾軒かの店と一軒の家が燒けて居た。火は最早鎭まりかけて居た。烟は燃え盡きて、黑烟の裡へ消えて了まつた、が、又不意に、パッと燃え上つて、十字街の人々の顏を、異樣な態に瞭然と照らし出した。人々の黑い形が、火の前をチラチラ跳び廻つて居た、そして、話し聲や、叫聲が、烟の間斷無しの爆る音より高く聞こえた。アルバアティイチは、彼の二輪馬車が前へ出得るまでには大分時がかゝると見て取つたので、下りて、火事を見にと、橫街へ、引返した。兵士が、火の前を彼方此方と急ぎ足で歩いて居た、アルバアティイチは、二人の兵卒が毛立織の上衣の男と一緒に、近くの家へと、街を橫斷つて、火の裡から燃えて居る材木を引き摺つて居ると、他の者等が、干草を幾抱も持つて來て居るのを見た。

アルバアティイチは、今燃え盛つて居る高い穀倉の前に立つて居る人民の群集に加はつた。壁は總て燃えて居た、後壁は最早落ちて居た。板屋根は落ちかゝつて居、梁材は赤く燃えて居た。群集は屋根が落ちる時を見やうと待ち受けて居るらしかつた。アルバアティイチも、それを見や

うと待つて居た。

『アルバアティイチ』――老人は、不意に、自分を喚びかける聞き慣れた聲を聞いた。

『やア、これは、閣下』と、直ぐ自分の若主人を見とめて、アルバアティイチが答へた。

公爵アンドレエーは、肩套を着、黑馬に乘つて、群集の裡に居て、アルバアティイチを見て居た。

『何うして、此所へ來たんだ？』と、彼は尋いた。

『閣……閣下』と、アルバアティイチは艱然云つた、そして、泣きだした……『閣、閣……眞個の所、最早爲やうが無いので御座いますか？。旦那……』

『何うして、此所へ來たんだ？』と、公爵アンドレエーは繰り返した。焰がその途端に燃えあがつた、そして、アルバアティイチは、クワッと明るくなつた火光の裡で、若主人の蒼いやつれた顏を見た。アルバアティイチは、市へ使ひによこされた理由や、歸ることのなか〳〵能き無い次第を、公爵に話した。

『如何でせう、閣下、最早眞個萬事休なんでせうか？』と、彼は再尋いた。

公爵アンドレエーは、返事を爲すに、自分の手帳を取り出した、そして、膝を揚げて、彼が裂き取つた一枚の紙へ鉛筆で何か書き附けた。彼は妹に宛て、書いた――

『スモレエンスクは降服した』と、彼は書いた。『荒涼丘は一週間內に敵に占領せられる。直ぐ莫斯科へ出發せよ。出發したら直ぐ私に知らして呉れ、使はウスヴィヤアズへよこせ』

斯ういふ言語を急いで書き附けて、その紙をアルバアティイチに渡してから、公爵アンドレエーは、老公爵と、公爵嬢と、自分の息子と家庭敎師を避難させることや、彼等が家を出ると直ぐに、何ういふ風にして、何處へ宛て、自分に知らせろといふことに就いての、その上の指圖をアルバアティイチに爲た。彼が、さういふ指圖を與へ切つて了まはぬうちに、部下を伴れた一人の參謀將校が、彼の所へ駈け付けて來た。

『聯隊長殿』と、參謀は、獨逸訛りの、公爵アンドレエーには聞き覺えのある聲で叫んだ。『家屋が貴官の目前で放火されて居る、而るに、貴官は唯だ傍觀しておいでなさる。何ういふ理由ですか？。貴官の責任になりますぞ』と、ベルグが叫んだ、彼は今は第一軍の步兵の左翼の司令官の參謀副長の參謀長の副官であつた――極く心持の好い高い位地だと、彼は云つて居た。

公爵アンドレエーは、彼を見詰めた、そして、何の返答も爲ずに、アルバアティイチに話し續けた――

『私は十日まで返事を待つて居る、が、十日になつても衆皆が發つたといふ何の通知も無ければ、私は、萬事を擲つて、自身荒涼丘へ行か無いでは居られんことになるから、衆皆にさう云つて呉れよ』

『公爵』と、ベルグは、公爵アンドレエーなのを認めて、云つて、『私は、命令通りを傳へるのが私の職務ですから、唯ださう申したんです。私は何時でも、全く命令通りにする……失禮はご免ください』と、ベルグが詫びた。

火の裡では、ドサリと物の崩れた音がした。焔は寸時靜まつた、黑烟が屋根の下で渦まいた。今一度恐しい崩れた音と、何か非常な重い物の落ちた音がした。

『うゝ、わアー』と、穀倉の天井が落ちて、燒いた餅の香が、燃えて居る麥から立つた時に、群集が喚いた。焔が再燃え上がつて、周圍の群集の、嬉しがつた、心配やつれのした顏を照らした。

毛立織の上衣の男は、空で腕を振り廻しながら、叫んで居た——

『一等、一等。さア、此奴は行つちやつたぞ。一等だ、若者たち……』

『彼は持主なんだぜ』と、聲々が呟いた。

『では、私が云つた通りを殘らず衆皆に云つて呉れ』と、公爵アンドレエーは、アルバアティイチに向つて、云つた。で、彼の傍に口を噤んで立つて居たベルグには一語もかけずに、彼は、馬に拍車を入れて、横街を彼方へ乘つて去つた。

（五）

スモレエンスクから、軍は退却し續けた。敵はその後を追つた。八月の十日には、公爵アンドレエーが率ゐて居た聯隊は、荒涼丘に達する大路を通つて居る往還を進軍して居た。

暑熱と、旱が、最早三週間の餘續いて居た。毎日捲き雲が、空を通つたが、太陽を隱すことは極く稀であつた、が、夕方になると、空が再晴れ渡つて、太陽が燃え立つやうな赤い靄の裡へ沈んだ。が、太い露が夜地面を快よく霑はした、野に殘された小麥は燒けて了まつて、穗が落ちた。沼は涸て了まつた。牛は、日に燒かれた牧場では何も喰う物が無いので、飢餓で鳴いた。唯だ、夜森の裡では、露が續く限りは、涼しかつた。

が、路では、軍が行進して居た往還では、夜でさへ、路が森の裡を通じて居た所でさへ、寸毫も涼しく無かつた。路の一尺の餘も深い砂埃の上では、露は全然無いも同然であつた。

日が出るや否や、兵士は動き始めるのであつた。輜重や、砲は車軸まで埋まつて、音無く動いた、歩兵は、夜でさへ少しも冷くなら無い和かな、蒸し暑い、燃えるやうな埃の中へ脚目まで沈んだ。砂埃は、彼等の脚や、車輪へ附着き、彼等の頭上へ雲のやうに舞ひあがり、路を進んで行く人や獸の眼や、髪や、鼻孔や、肺へ入つた。日が高くなるに從つて、埃の雲はますます高く揚つて、細かい、燃えるやうな埃を通して、雲の無い空の太陽が、人が眩しく無く見詰め得られる紫の球のやうに見えた。

風は寸毫も無かつた、で、人々は、蒸せ苦しい空氣の裡で、喘いで居た。彼等は、口と鼻の上へ手巾を結んで、進軍した。村へ着く度毎に、衆皆先を爭つて、井戸へと飛んで行つた。彼等は我先さに水を得やうと相戰かひ、そして、泥の所へまで飲み盡した。

公爵アンドレエーは、聯隊を率ゐて居た、で、聯隊の管理や、部下の安全や、命令を受けたり、出したりする必要が、彼の心を占領して居た。スモレエンスクの燒けたことゝ、それを捨てたことゝが、公爵アンドレエーの生涯に一時代を劃した。敵に對する烈しい憎惡が、彼に自分自身の哀愁を忘れさせた。彼は、心底から自分の聯隊の利害に身を委ねた、彼は、自分の兵卒や、將校たちの安寧に非常に注意した、そして、彼等に對する擧作は優しかつた。彼等は、聯隊内では、彼のことを『吾々の公爵』と呼び、彼の居ることを誇とし、彼を愛した。

が、彼は、自分の部下や、ティモオフィンや、彼のやうな他の者たち、彼に取つては全然新しい、異つた世界に屬して居る人たち、彼の過去を一向知ら無い人たちに對してのみ、親切で優しかつた。彼の往時の知人や、司令部附の誰にでも打つかるや否や、彼は、直ぐ再茨を出した、そして、怒りつぽく、皮肉で、侮蔑的になつた。過去と記憶の上で連關することは何も彼も彼には厭でなら無かつた、で、その往時の世界との關係に於ては、彼は、自分の義務だけのことを爲、そして、不公平で無いやうに爲ることだけに、自分の爲る事を限つて了まつた。

公爵アンドレエーは、實際、最も暗憺な風で有ゆる物を見た、彼の考想では、防ぐことが能きる筈で、且防ぐべき筈であつたスモレエンスクが、八月の六日に開け渡されて、彼の病氣の父が——彼の想像した所では——莫斯科へと遁れざるを得無くなつて、荒凉丘や、彼が彼れ程愛して居た家、彼が設計して彼の農夫たちと一緒に住まつた家を、敵の掠奪に委せて了まつた後では、殊にその悲觀の度が強かつた。が、それにも拘らず、彼の位地の庇陰で、公爵アンドレエーは、總ての全般的の問題から全く離れた今一つの問題を持つて居た——それは彼の聯隊

八月の十日に、彼の聯隊がその一部を成して居た縱隊が、荒涼丘へ曲る岐路の所へ達した。二日前に、公爵アンドレエーは、父親と、自分の子息と、妹が莫斯科へ行つて了まつたといふ通知を受け取つたのだ。で、公爵アンドレエーに取つては最早荒涼丘には何の用も無かつたに拘らず、彼は、自分の傷心をわざ〳〵增さうといふ特質の願望で、荒涼丘へ行かなければならぬと決定した。

彼は、自分の馬に鞍を置くことを命じた、そして、彼が生れ、且小兒の時を送つた自分の父親の家の方へと、進軍の本線から曲つた。

何時もは、二十人程の百姓女が、饒舌りながら、彼等の亞麻布を濯いだり、洗濯桙でそれを叩いたりして居た池の傍を乘り過ぎながら、公爵アンドレエーは、池の傍には誰も居無いこと、そして、彼等が何時も立つて居た臺が壞れて、池の眞中に横になつて半分沈んで浮いて居るのを見付けた。公爵アンドレエーは、門番の家へ乘り附けた。石の門の所には誰も見え無かつた、そして、戸が開いて居た。庭園のなかの路は最早雜草が繁つて居て、牛や馬が『英國式の庭園』の裡をさまよひ廻つて居た。公爵アンドレエーは、溫室へ乘り附けた、窓硝子は碎け、鉢の樹の或者は折れ、他の者は枯れて居た。

彼は、園丁のタラスを呼んだ。誰も答へ無かつた。築臺の上を通つて溫室を廻つて見ると、隔垣が悉皆壞れて、杏の樹の枝が實の附いたまゝで、折つてあつた。公爵アンドレエーが小兒の時分、門に居るのを何時も見た年寄つた農夫が、緣色の庭腰架に坐つて、シナの樹靴を編んで居た。

彼は、聾であつたので、公爵アンドレエーが近寄つたのが聞こえ無かつた。彼は、老公爵の好んで坐つた腰架に坐つて居た、そして、シナの木が、折れて枯れた玉蘭樹の枝から垂下つて居た。

公爵アンドレエーは、家へと乘つて行つた。古い庭園の五六本のシナの樹は切り倒されて居た、斑の牝馬と仔馬が家の眞前の薔薇の樹の中に居た。家の窓扉は、階下の一つの開いた窓の外、殘らず閉つて居た。一人の僮僕が公爵アンドレエーを見付けて、家へ駈け込んだ。

アルパアティイチは、家内ぢうを送り出して、自分一人荒涼丘に殘つて居た。彼は、家に引込んで、『聖僧傳』を讀んで居た。公爵アンドレエーが來たことを聞くといふと、彼は、鼻へ眼鏡を乘せて、上衣の扣鈕を掛け〳〵、公爵の前へ惶急しく出て來た、そして、一語も云はずに、公爵の膝に接吻しながら、泣き出した。

それから、彼は自分の弱いことに腹を立てゝ、顔を背けた、そして、事の狀態の報告を爲始めた。大切な、高價な品は何も彼もボグチヤアロヴァへ移された。百チエトヴェルッの穎の穀類は運ばれた、が、草と小麥――その年は例年に無い豐作であつたと、アルバアティイチは云つたが――は、青いうちに、軍隊に刈られて、持つて行かれて了まつた。農夫は食へ無くなつた、彼等のうちの或者は、尙且、ボクチヤアロヴァへ行つて了まつた、少數のみが居殘つて居る。

公爵アンドレエーは、アルバアティイチの云ふ事は碌に聞かずに、『父上樣や妹は、何時去つたかね？』と、何時、彼等が莫斯科へ去つたのかといふ意味で、尋いた。アルバアティイチは、公爵がボグチヤアロヴァへ移つたことを尋いて居るのだと取つて、彼等が七日に發つたことを答へた、それから、再收穫に就いて詳細に話し始めて、公爵の指圖を仰いだ。

『將校たちから受領書を取つて、燕麥を渡して宜うございますでせうか？』と、アルバアティイチは尋いた。『未だ六百チエルヴェルッ殘つて居りますのですが』

『この男に何う云つたら宜いだらうかなア』と、公爵アンドレエーは、日に輝つて居る老人の禿頭を見、彼の顏の裡で、彼は自分でもさういふ問の時を得ぬものであることを知つては居るのだが、自分自身の悲痛を抑へる爲めにそれを尋いたのだといふ知覺を讀んで、思ひ迷つた。

『うん、渡して了まへ』と、彼は云つた。

『閣下は、お庭園が甚く爲つて居るのにお氣が付きましたでせうが』と、アルバアティイチは云つて、『何うにも制しやうがございませんでした、三個聯隊が此所へ參りまして、一晩泊りましたのですからな。龍騎兵が一番不可でございました、訴を起します爲めにと、司令將校の名と職位を書き留めて置きましてございます』

『うん、で、お前は何うする積りかね？。敵が此所を占領しても、居るかね？』と、公爵アンドレエーは、アルバアティイチに尋いた。

アルバアティイチは、公爵アンドレエーの方に顏を振り向けて、彼を見た、それから、全く唐突に、嚴肅な身振りで、手を上の方へ擧げた、『神樣がお護りくださいます。何事も神樣の御意にお委せ致しまする』と、彼は云つた。

農夫や家內の僕隷の群が、牧場を橫斷つてやつて來て、公爵アンドレエーに近づくと、脫帽した。

『では、左樣なら』と、公爵アンドレエーは、アルバアティイチの上へおつ被さるやうに爲て云つた。『お前もお逃げ、持つて行ける物は悉皆持つて行くが宜い、それから、農夫たちに、リ

ヤザンの領地か、莫斯科附近の領地へ行くやうに、云つて呉れ』

アルバアティイチは、公爵アンドレエーの膝を抱いて、泣きだした。公爵アンドレエーは、靜に彼を傍へ動かした、そして、馬に拍車を入れて、庭園の歩道を駈け降つた。

築臺の上では、老人が、誰か愛する人の死顏の上に止まつた蠅のやうに無心な風で、シナの木の靴の底を叩きながら、未だ坐つて居た。と、二人の娘が、杏を袴に一杯入れて、溫室の杏の樹の間から駈け出て來た。彼等は、殆ど公爵アンドレエーに突き當りさうに駈けて來た、そして、自分たちの若主人を見るといふと、年長の方のが、慌てふためいた顏で、若い同伴者の手を攫んだ、そして、自分たちが落ことした青い杏を止まつて拾ひ上げやうとは爲ずに、一緒に秦皮の樹の蔭へ隱れた。

公爵アンドレエーは、自分が彼等を見たことを彼等に氣が付かせぬやうに爲やうと思つて、いら〳〵と急いで、彼等と反對の方へ顏を背けた。彼は、その可愛らしい小兒を怖ぢさせたのが氣の毒であつた。彼は、その兒の方を見るのを恐れた、が、それでも、彼は、さう爲度い抵抗し難い心持を感じた。新な、心持の好い、心を慰さめる感がフト起つて來た、その小さい娘たちを見詰めて居るうちに、彼は、自分とは全くかけ離れた、然し、自分の利害と同なじやうに正當な、他の人間的利害の存在して居ることを覺つたのだ。それ等の小さい娘たちは、明白に、捕まること無くして、それ等の青い杏を取つて行つて、食つて了まひ度いといふ一つの熱烈な願望に魅せられて居るらしかつた、そして、公爵アンドレエーは、彼等の企畫に彼等が成功することを希つた。彼は、今一度彼等を一寸と見ることを制し得無かつた。

娘たちは最早大丈夫だと思つたらしく、隱れて居た場所から跳び出し、黃色い小さい聲で何か叫びながら、袴を挂げて、日に焦けた小さい足で、草の間を、笑聲を揚げて、非常な速度さで、駈けて去つた。

公爵アンドレエーは、軍隊が行進して居た海道の塵埃の領分を離れた所を乘つたので、幾何か心持が好くなつた。が、彼は、荒涼丘から餘り離れて居無い本海道へ乘り歸り、そして、小さい池の堤の近邊の休憩點で、自分の聯隊に追ひ付いた。

それは、午後の二時であつた。塵埃の裡で赤い球のやうに見える太陽が、彼の黑い上衣の背に、堪え難い程、焦がすやうに照り付けた。塵埃は、ワア〳〵云つて居る、休憩中の軍隊の上に、何時までも動かずに立つて居た。風の一息も無かつた。公爵アンドレエーは、堤の方へと乘つて行くうちに、池の新鮮な、泥臭い臭氣を嗅いだ。彼は、それが何れ程泥水であらうとも、

その水を浴びやうと思つた。彼は、叫聲や笑聲が聞こえて來た池の方を見廻した。綠色の水草でびつしり蓋はれて居る小さい池は、確に一嗎半程高くなつて、堤に溢れて居た、それは、煉瓦のやうに赤い手や、頭や、頸の白い人間の身體が一杯跳び込んでぼちや〳〵やつて居たからであつたのだ。總てさういふ白い人間の肉體は、網の裡で蹠く鯉のやうに、泥水を、叫聲や笑聲で、潑ねかして居た、その水音には、如何にも快活な所があつた、が、それを變に悲しいものに爲たのも、丁度其所であつた。

脚の後腿に革紐を結んだ第三中隊の――公爵アンドレエーの知つて居た――亞麻色の髪の若い兵卒が、善く駈けられるやうにと後へ退つて、十字を切つて水へ跳び込んだ。今一人の赤黑い、甚く髪のくちや〳〵になつた軍曹は、腰まで水に入つて、彼の恰幅の好い、筋肉の發達した身體を曲げて、黑い兩手で頭から水を注けながら、面白さうに、鼻嵐をさせて居た。兵卒たちが相互に水の注つこをする音や、叫聲や、怒號り聲が聞こえて居た。

岸の上にも、堤の上にも、池の裡にも、何處にも彼處にも、白い、健康な、筋肉の發達した肉體があつた。赤い鼻の將校、ティモすフィンは、堤の上で、手拭で身體を擦つて居た。そして、公爵アンドレエーを見ると耻ぢた、が、彼に話し掛けやうと決心した。

『好い氣持ですせ、實に、閣下、貴下も是非おやりなさい』と、彼は云つた。

『汚い』と、公爵アンドレエーは、顏を顰めて云つた。

『直ぐ開けさせます』。で、裸體のまゝで、ティモすフィンは、場所を開けさしにと駈け出した。

『公爵がおいでなさり度いと仰しやるんだ』

『何の公爵だ？。吾々の公爵かね？』と、聲々が叫んだ、そして、誰も彼も、公爵アンドレエーが制する隙の無いやうに慌てふためいた態で、彼の爲めに場所を開けた。公爵アンドレエーは、納屋で水を浴びる方が宜いだらうと思つた。

『肉、食肉、砲の餌食だ』と、彼も、又自分の裸の體を見て、ぞつとしながら、思つた、が、それは、寒さからといふよりは寧ろ、泥水の裡で蹠いて居る裸體のその非常な數に面して彼が感じた――彼自身にも何だか分ら無かつた――厭惡と戰慄とからであつたのだ。

八月の七日に、公爵バグラアチオンは、スモレエンスク海道のミハアロヴカの駐軍地で、アラクチエーフへ宛てゝ手紙を書いた。その手紙はアラクチエーフへ宛てたものであつたけれども、公爵バグラアチオンは、それが皇帝に讀み聞かされることを知つて居た、で、彼は、自分

に能き得る限り、一語々々十分に注意して書いた。

『親愛なる伯爵アレキセエ・アンドレエーヴィチ――敵にスモレエンスクを渡したことに就ては、陸軍卿が既に報告せられこと丶思ふ。それは、悲しいことである、それは、惑然なことである、そして、全軍が、その最も重要な地點が、輕佻に敵の手へ捨てられたことに就ては、全く絶望的になつて居る。予としては、最も熱心に、個人的に、卿にその地點を捨て無いやうに懇願し、尙、遂に、手紙でまで賴んだ、が、何物も彼の決心を飜へさせることが能き無かつた。予は、貴下に對して、予の名譽に懸けて誓ふが、ナポレオンは、未だ嘗て無い困厄の位地に立つて居たのだ、で、彼は、彼の軍の半數を失ふことはあつても、スモレエンスクは、取ることが能き無い筈であつたのだ。吾が軍隊は、未曾有の奮鬪を爲し、今も尙さういふ奮鬪を續けて居る。一萬五千の兵で、予は、三十五時間の間敵を喰ひ留め、遂に、彼等を破つた、けれども、陸軍卿は、十四時間も踏み堪へ無かつた。これは、吾が軍の耻辱であり、汚點である、で、予一個の考慮から云へば、彼は、生きて居るべき筈で無からうと思ふのだ。若し、彼が、吾が軍の損失が大きいと報告したのであつたら、それは虛僞だ、多分四千には過ぎまい、決してそれ以上では無い、が、それは、何でも無いことだ、若し、それが一萬であつたとしたところで、それが何だ、戰爭では無いか。が、これに反して、敵の損害は非常であつた。

二日位踏み堪へて居ることが、彼に取つて何程のことであつたらうか？。左に右、敵は彼方から自然に退いて了まうに違ひ無かつたのだ。何となれば、彼等は、兵及び馬に與へる水が無かつたからなのだ。卿は、何しても退却しはせぬと、予に誓つた、が、全く唐突に、夜に乘じて退却中だといふ通牒をして來た。吾々は、斯樣な風で戰ふことは能き無い、この儘で行けば、吾々は、直きに、莫斯科まで敵を伴れ込むことになりさうである……。

貴下がたに、媾和の考慮があるといふ風說がある。媾和、飛でも無いことだ。これまでの有らゆる犧牲の後で、斯樣な烈しい退却の後で――媾和するなど丶は、貴下がたは、露西亞ぢうを貴下がたの敵にするし、吾々の方は、誰も彼も、軍服を着るのを耻辱と思ふに至るだらう。さうなつて來たら、吾々は、露西亞の國力が續く限り、立つて居る人間が殘つて居る限り、戰は無ければならぬ……。

軍の司令官は一人で無ければならぬ、二人では不好い。貴下の卿は、多分內閣では傑い人であらう、が、將帥としては、彼は、唯だ無用の人であるばかりで無く、侮蔑すべき人だ、而も、

この人の手に、吾々の祖國の全運命が托されて居るのだ……。

予は、實際、憤恚で眼が眩んで居る、斯樣なに罵詈的に書くことを宥恕してください。媾和しろと勸めたり、卿を軍の總司令官に任命することを勸めたりした人は、皇帝を愛さ無い人で、吾々總ての破滅することを希う人であることは明瞭である。だから、予は貴下に向つて明白に書く、民兵を募り給へ。何故なれば、卿は、最も巧妙な方法で、吾々の客人等を都へ伴れ込みつゝあるからなのだ。

全軍に取つての、主な嫌疑の的は、上級副官のウォルツォーゲンである。彼は、吾々の味方といふよりも寧ろ、ナポレオンの味方だといふ風説だ、而るに、卿が爲ることは、何でも彼でも、ウォルツォーゲンの獻策なのだ。

予は、彼に向つて鄭重に擧作うのみならず、尙又、予の方が故參なるに拘らず、伍長の如く彼に服從して居る。甚だ辛いことだ、けれども、吾が皇帝であり、且恩人である陛下を愛しまつるが故に、予は服從して居るのだ。が、予は、皇帝が、彼の勇敢なる軍を、斯の如き男の手に委ねられたるを、皇帝の爲めに悲しむのだ。吾々の退却に於て、疲勞の爲めと、病院の裡へ殘されたのとで、一萬五十人餘を失つたことを考へて呉れ給へ、若し、吾々が敵を攻擊したのであつたら、左樣いふことは無かつたに違ひ無いのだ。露西亞――吾々の母なる――が、吾々が斯の如き怯懦を示したことを、何と云ふだらうか、何卒、予に知らして呉れ給へ、何故吾々が吾々の善き勇敢なる國を捨てて、愚衆の手に委ねて、徒らに、有らゆる露西亞人の憎惡と慚愧を喚び起して居るのかその理由を、何卒、予に知らせて呉れ給へ。何故吾々は狼狽して居るのか？。何を吾々は恐れて居るのか？。卿が逡巡し、臆病で、沒分曉で、緩慢であつて、その上に、有らゆる惡癖を持つて居るのは、予の咎では無い。軍全體が、それを悲み、口を極めて彼を罵しつて居る……』

（六）

人生の諸現象を分類することの能き得る無數の種別の中で、人はさういふ諸現象の總てをば、物質によつて支配さるゝものと、形式に依つて支配さるゝものとの二種に分類し得るのだ。田舍の、地方の、縣の、若くは莫斯科の生活とさへ、全く違つて居る彼得堡の生活、特に、其所の客室の生活は、後者の中に、加へられるべきものだ。客室のその生活は不變なのだ。

千八百〇五年から千八百十二年に至る間に、吾々は、ボナパルトと媾和し、再彼と喧嘩した、

吾々は新な憲法を造り、再それを廢した、が、アンナ・パアヴロヴナや、エレンの客室は、前——前者は七年前、後者は五年前——と寸毫も違は無かつた。アンナ・パアヴロヴナの連中は、未だにボナパルトの成功を不審らしい驚愕で話して居た、そして、彼等は、彼の成功や、歐羅巴の諸君主の屈服的態度を見て、それは、アンナ・パアヴロヴナが代表して居る宮中の一團に憂悶と心配をさせることを唯一の目的とする陰謀なのだと、思つて居たのであつた。

エレン——ルミャアンツェフその人が、度々訪問して來て、非常に賢明な女だと見込んで居たエレン——の周圍に集つた連中は、千八百十二年に於ても、『大國民』『偉人』に對して、千八百〇八年と全く同なじ熱中で話して居て、佛蘭西との開戰を殘念がり、戰爭は直きに平和になるに違ひ無いと信じて居た。

此の頃になつて、皇帝が軍から歸つて來てからは、昂奮の幾何か增した樣子が、これ等の反對の兩客室の間に見えだした、そして、彼等は、相互に敵對の示威運動らしいものをやりだした、が、兩團のそれ〴〵の基礎には何の影響をも及ぼさ無かつた。

アンナ・パアヴロヴナの連中は、最も批難の無い王黨の外は、何樣な佛蘭西人も入れることを拒んだ、そして、その客室では、佛蘭西劇場へ行つてはならぬとか、佛蘭西では、一個中隊を維持するのに露西亞の一個軍團を維持するだけの金錢がかゝるのだとか、いふやうな愛國的な意見が表はれたのであつた。戰爭の經過は、熱心に注目された、そして、吾が軍の利益に非常になるさま〴〵な風說がそれからそれへと傳へられた。

エレンや、ルミャアンツェフの連中——佛蘭西連中——では、敵の殘酷なことや、戰爭の野蠻な方法の報告は、虛報だとせられた、そして、ナポレオンの方での和睦的の盡力の有らゆる種類が論ぜられた。この連中は、宮中と、皇太后の保護の下にあつた女學校とを、カザンへ移す準備をしたら宜からうと建言した人々の意見をば、全く早過ぎるものとして斥ぞけた。この戰爭は、實際、エレンの客室では、最早直きに平和に終るべき唯の形式的の示威運動の連續に過ぎ無いものと見られて居た、そして、今は彼得堡に居て、才人は誰でも必らずさうであつた如く、エレンの家で何時も見られたビリイビンが云つた意見、即ち、戰爭は火藥の爲めには終らせられずして、それを發明した人々の爲めに終らせられるのだといふ意見が、流行つたのであつた。

その報知が皇帝と共に彼得堡へ來た莫斯科の愛國的熱心は、エレンの客室では、皮肉な、極く滑稽な——但し用意周到な——冷嘲の的であつた。

これに反して、アンナ・パアヴロヴナの連中では、さういふ愛國心の表示は、最も大きい熱心

を喚び起し、プルタアクが往昔の羅馬人を讃めたやうに、讃められたのであつた。

未だ尙且前と同なじ重要な地位に居た公爵ヴァシイリは、その二つの連中の間の連鎖を爲して居た。

彼は、『吾が善き信友のアンナ・バアヴロヴナ』を度々訪問するのであつたと同時に、又『私の娘の外交的客室』でも見られたのであつた、そして、彼は、一方から他へ度々移る爲めに、飛んだ錯誤をやつて、一方の客室で云ふ積りで取つて置いたことを、今一方の客室で云つて了まつたことが度々であつた。

皇帝が歸り着いてから直き後で、公爵ヴァシイリは、アンナ・バアヴロヴナの家での戰爭の經過の談話の中で、バルクレエー・ド・トオリイを酷しく非難した、そして、誰が總司令官に任命されるのか斷定し兼ねるといふことを云つた。

何時も『非常な才能家』と云はれて居た客のうちの一人が、彼得堡民兵の新任司令官のクツウゾフが、上等裁判所で民兵の入營を管理して居た樣子を詳しく話した、そして、クツウゾフが、有らゆる資格に協ふべき人であらうと、不用意にも、云つた。

アンナ・バアヴロヴナは、悲しさうに微笑んで、クツウゾフは、皇帝を煩悶させるばかりで爲方が無いのだと云つた。

『私は、貴族の集會で、そのことは幾度も繰り返して云つたのです』と、公爵ヴァシイリは口を挾れて、『けれども、彼等は私のいふことを聽きませんでした。私は、彼の男を民兵の司令官に選むのは、陛下の御意に召さぬことだと云ひました。彼等はそれも聽かんのでした。皆な政府に反對し度いといふ今時流行の偏狂から來るのですからな』と、彼は續けた。『で、何樣な公衆を彼等は相手にして居る積りなのか、私は知り度いと思ふですよ。それは、皆な、吾々が莫斯科の愚劣な熱心を眞似やうとして居るからですわい』と、公爵ヴァシイリは、寸時、その熱心が嘲弄されるのは、エレンの家でであつて、アンナ・バアヴロヴナの方では、それを讃め無ければならないのであるのを、忘れて了まつて、云つた。が、彼は、急いで自分の過誤を直した。

『露西亞での最古參の將軍たるクツウゾフが、法庭の長となるのが適當であるでせうか？。彼は、最早それだけで宜い筈なのですわい。馬に乘れ無いやうな、會議中に眠て了まうやうな——それから、品行の極く惡い——人を總司令官に爲るといふやうな怪しからんことを、誰か聞いたことがあるでせうかね？。まことに結構な評判を彼の男はブハレストで得たではありませんか。將軍としての彼の男の技倆のことは何も云はんにしても、吾々は、今日のやうな時

に、老耄した、盲目の――左樣、全く盲目の――男を任命するなどゝいふことが能きませうか？面白い考慮ですな――盲目の將軍とは。彼の男には何も見えんのです。目隱しの鬼事を爲る――彼の男に適するのはそれなのです』

誰もその說に反對するものは無かつた。

七月の二十四日には、その說は全く妥當なものとして受け取られた。が、二十九日に、クツウゾフは公爵の稱號を授けられた。この稱號の授與は、彼を退隱させやうといふ考慮を示すものとも取られ得るのであつた、で、公爵ヴァシイリの言語は未だ尙且妥當であつた、尤も、最早彼はその說をさう急いで主張しはし無かつたのだが。けれども、八月の八日になると、元帥サルティイコフと、アラクアチエーフと、ヴィヤズミティノフと、ロプウヒンと、コチュウベエーとから成つて居る委員會が、戰爭の經過を調べる爲めに開かれた。この委員會は、不幸は、權能の分れて居ることから生ずるのだと、決定した、で、委員は、誰も皇帝がクツウゾフを嫌つて居るのを知つて居たのではあつたが、熟議の末に、クツウゾフを總司令官に任命することを建議した。そして、同日、クツウゾフは、軍の總司令官に任せられ、且、軍隊が占領して居る地方全體に對して無制限の權能を附與された。

八月の九日に、公爵ヴァシイリは、アンナ・バアヴロヴナの家で、再『非常な才能家』に逢つた。その後の紳士は、アンナ・バアヴロヴナの勢力に縋つて、女子の敎育機關の一つの內へ任命され度い希望で、アンナ・バアヴロヴナの家では、甚くお世辭好くして居たのであつた。公爵ヴァシイリは、勝ち誇つた將軍か、自分の願望の目的を達することに成功した男かといふ態で、揚々として、大股で部室へ入つて來た。

『もし、諸君、非常なことを知つておいでかね。公爵クツウゾフが元帥になりましたぞ。異論は最早これで悉皆終結だ。私は非常に喜ばしい、非常に嬉しいですよ』と、公爵ヴァシイリは云つた。『到頭適任者を得ましたなァ』と、一坐を、嚴かしさうな、意味あり氣な顏で見渡して云つた。

自分が熱望して居る地位を是非得度いと思つて居たに拘らず、『非常な才能家』は、ホンの數日前に公爵ヴァシイリが云つた說のことを公爵ヴァシイリに注意し無いでは居られ無かつた。（これは、アンナ・バアヴロヴナの客室では、公爵ヴァシイリに對して禮儀を失ふことであると同時に、同なじ度合の熱心を以つて、その報知を受け取つたアンナ・バアヴロヴナにも無禮なことに當るのであつた、が、彼は自分を抑へることが能き無かつたのだ）。

『けれども、彼の人は盲目だといふのぢやアありませんか、公爵』と、彼は、公爵ヴァシイリに彼自身の言語を憶ひ出させるやうにと、云つた。

『いや、何うして、善く見えます』と、公爵ヴァシイリは、速語な濁聲と咳拂ひとで、云つた――彼は、何でも困つた時には、何時もさうしてはぐらかすのであつた。『いや、善く見えます』と、彼は、繰り返した。『私が特に喜ばしく思ふのは』と、言語を續け、『陛下が全軍隊を支配する、全地方を支配する無制限の權能、何の總司令官も未だ嘗て持つたことの無い權能を、彼の人にお授けなされたことです。又一人獨裁君主が出來た譯だ』と、彼は、如何にも得意さうな笑顔で、言語を結んだ。

『何うか、神樣のお惠みで、さう有り度いものでございます』と、アンナ・パアヴロヴナが云つた。

宮中の交際社會には未だ新入者であつた『非常な才能家』は、事態に對するこの新な說に反對して、アンナ・パアヴロヴナの前の說を主張することで以つて、アンナ・パアヴロヴナに媚びやうと思つた。彼は斯う云つた――

『陛下は、クツウゾフに權能をお授けになるのはお厭だつたといふことです。陛下は、「君主と國家が爾にこの名譽を與へる」と、彼の人に仰せられた時には、ジ・コンドを讀んで聞かされた少娘のやうに眞赤におなりなすつたさうですよ』

『お心はさうでは無かつたでせう』と、アンナ・パアヴロヴナが云つた。

『いや、決してさうでは無い』と、公爵ヴァシイリは、熱心に主張した。今は、彼は、クツウゾフを何人の下にも置くことを肯じ無かつた。今の公爵ヴァシイリのいふ通りならば、クツウゾフは彼自身善い人であるばかりで無く、その上に、誰からも崇拜されて居たのだ。『いゝや、其樣なことのある筈は無い、陛下は、彼の人の長所を何時もお認めになつて居たのだから』と、彼は云ひ添へた。

『神樣のお惠みで、公爵クツウゾフが、ご自分の手で、有らゆる事をご支配なさるやうになり度いものでございますね』と、アンナ・パアヴロヴナは云つて、『そして、誰にも邪魔をさせ無いやうに爲度いものでございますね』

公爵ヴァシイリは、それが誰を指したのか、直ぐ覺つた。彼は呟いた――

『私は、クツウゾフが、皇太子が軍務には一切關係し無いといふことを特に條件として、就任したといふことを、確な筋から知りましたよ。彼の人が、陛下に何と申し上げたかご存じか

ね？』で、公爵ヴァシイリは、クツウゾフが皇帝に云つたといふ言語を繰り返した、『それは「若し、殿下が失策をなされても、私は罰することは能きませんし、又、功がおありでも、私から賞をさし上げる譯にも參りませんから」といふのでした。えゝ、彼の男は拔からぬ男ですよ、公爵クツウゾフは、私は、往時から、彼の男のさういふ所を知つて居ります』

『風説では』と、宮中官の駈け引を未だ心得て居無かつた『非常な才能家』は、口を挾れて、『クツウゾフ閣下は、陛下ご自身が軍にお臨みにならぬことを、特に條件としたといふことではありませんか』

彼が、さういふ言語を出すや否や、アンナ・パアヴロヴナと公爵ヴァシイリは、二人とも一遍に彼に背中を向けた、そして、彼の無遠慮に對する嘆息を以つて、情なささうに相互に顏を見合はせた。

（七）

斯ういふことが彼得堡で起つて居るうちに、佛蘭西軍はスモレエンスクを通り越して、莫斯科へとだん〳〵近づいて來るのであつた。

ナポレオンの傳者チエールは、その他のナポレオンの傳者等と同樣に、ナポレオンは、心ならずも、莫斯科の城壁へと引き付けられたのだといふ説を把持して、自分の主人公の行動を辯護しやうと骨折つて居る。チエールの論は、歷史上の事件の説明を一人の人の意志の裡に求めやうとする歷史家の孰もの論と同樣、間違つて居る、そして又、さういふ論は、ナポレオンは、露西亞の將軍たちの巧妙な軍略の爲めに、莫斯科へ誘き寄せられたのだと主張する露西亞の歷史家たちの説と同樣に、間違つて居るのだ。この事件に就ては、總ての過去をその後に起つた事實の準備であるやうに見えさすところの『回顧』の方則以外に、種々の事實が相互に影響し合ふことの原素が入つて來て、問題全體を混雜させて了まつたのだ。上手な將棋指しでも、手合せに負けるといふと、自分の失敗は自分の失策に基くのだと、信じて了まう、そして、彼は、初のうちの手に何か失策があつたのだらうと探す、けれども、彼は、勝負全體の間の一手毎に同樣な失策があり、一駒も能きるだけ完全に動かされたのは無いのだといふことを忘れて居るのだ。彼が自分の注意をそれに向つて集中する失策が彼の注意を引き付けるのは、唯だ、その失策が、敵手から付け込まれたものであるからに過ぎ無い。所で、戰爭といふ勝負に至つては、或る限られた時の間にやら無ければならぬものであり、其所では、將棋のやう

に一つの意志が生命の無い玩具を動かすのでは無くして、全體がさま〳〵な幾つもの個人の意志の無數の衝撞であるのだから、將棋に比べては、何れほど更に複雜なものだか知れ無いのだ。

スモレエンスクの後で、ナポレオンは、ドロゴブウズ附近でも、ヴィヤズマでも、それからツアレヴォ・ザアイミシチエーでも、戰鬪を挑んだ。が、露西亞人は、莫斯科から百十二露里離れて居るボロディノオに來るまでは、さま〳〵なる事情の無數の結合の爲めに、戰鬪を開く譯に行かぬかつたのだ。ヴィヤズマから、ナポレオンは、莫斯科へ直進する命令を出した。

『この大帝國の亞細亞的の都府、アレクサンドルの臣民の聖市なる莫斯科、支那の塔の形の無數の寺院のある莫斯科』

この莫斯科がナポレオンの想像を何時も靜ならしめ無かつた。ヴィヤズマからツアレヴォ・ザアイミシチエーへの進軍中、ナポレオンは、自分の護衛兵や、哨兵や、扈從たちや、副官たちに護られて、彼の月毛の英吉利馬に乘つて居た。幕僚長のベルチエーは、騎兵が捕へた露西亞人の捕虜を訊問する爲めに、一歩後に殘つて居た。通譯官のルロルム・ディドヴィルを從へて、彼は、ナポレオンの後から駈け付けて、面白さうな顏容で馬を引き止めた。

『え、？』と、ナポレオンが云つた。

『ブラアトフ枝隊の哥薩克騎の申す所では、ブラアトフは、本軍と連絡しやうとして居りますし、クツウゾフが總司令官に任命されたさうであります。その哥薩克騎はなか〳〵狡猾な、饒舌な奴でございます』

ナポレオンは微笑んだ、そして、その哥薩克騎に馬を遣つて、自分の前へ伴れて來いと命じた。彼は自分で、その哥薩克騎に話を爲やうと思つたのだ。五六人の副官が駈けて行つた、そして一時間經ぬうちに、主人のデニイソフがロストオフの許へ置いて行つたデニイソフの隷僕のラヴルウシカが、從卒の短い短上衣を着て、佛蘭西騎兵の鞍に跨つて、狡猾さうな、醉拂つた、如何にも陽氣な顏容で、ナポレオンの傍へ乘り付けた。ナポレオンは、彼に自分の傍を乘らせた、そして、彼を訊問し始めた。

『お前は哥薩克騎かね？』

『へい、哥薩克騎でがす、旦那』

『その哥薩克騎は、ナポレオンの質素な樣子が、東洋人の想像に向つては、君主の前だとい ふことを少しも暗示するやうな所が無かつたものだから、自分に談話を爲るのは誰であるか知らずに、戰爭中の事件を如何にも心安さうな口吻で話した』と、チエールは、この少事件のこ

とを、云つて居る。

實際は、前の晩醉拂つて、主人に正餐を與へずに置いたラヴルウシカは、その爲めに笞うたれて、家禽を徵發する爲めに村へ遣られたのであつたが、彼は其所で掠奪を爲度くなつて、それをやつて居るうちに、到頭佛蘭西人に捕虜にされたのであつた。

ラヴルウシカは、人生を十分に見來つて、狡猾なことや、詐略無しには何事も爲無いことを義務と見做し、自分たちの主人の爲めには何時でも何樣な用でも足す氣で居て、自分たちの長官の惡い衝動、特に、虛榮や卑劣な側の衝動を嗅ぎ付けるのが非常に鋭いといふやうなさういふ卑俗な、厚顏な從僕の一人であつた。

ナポレオンの前へ來るといふと、彼は、それが誰であるのか容易に且平氣で知つたけれども、ラヴルウシカは、寸毫も顫動し無かつた、そして、自分に取つてのこの新な主人の心に取り入らうと、全力を盡すのみであつた。

彼は、これがナポレオンであつたことは、善く承知して居た、が、ナポレオンの前だといふことは、ロストオフの前、若くは、手に笞を持つた給養係の前に居るのと別に異つた印象をラヴルウシカに與へ無かつた、何故だといふと、彼は、給養係にも、ナポレオンにも取り去られるやうな物を何にも持つて居無かつたからであつたのだ。

彼は、將校たちの從者等の間で話された有らゆる噂話を繰り返した。そのうち大抵は眞實であつた。が、ナポレオンが、露西亞人はボナパルトを征服する積りで居るのか、何うかと、彼に尋いた時には、ラヴルウシカは、眼を見張つて、寸時考へた。

ラヴルウシカは、その問のうちに、彼のやうな狡猾な奴が何時も何事に附けてもやるやうに狡猾の鋭い働が籠つて居るのを見た。彼は、顏を顰めて、寸時默つて居た。

『えゝ、若し、戰爭になると云ふんですと』と、彼は、考へ込んだ態で云つて、『そして、それが直きだとすると、それなら、貴下の方が勝ちます。それは、確です。が、若し、今ならば、三日です、そして、その後戰があるとすれば、えゝ、さうすれば、その同なじ戰が隨分長い爲事になりませうよ』

これがナポレオンに通譯された。『若し、戰が三日以內に爲されゝば、佛蘭西人が勝つだらうが、若し、それより後になるのであつたら、その結果は何うなるか全く分ら無い』と、ルロルム・ディドヴィルは、微笑みながら、譯した。ナポレオンは、確に上機嫌らしかつたに拘らず、微笑ま無かつた、そして、彼にその言語を繰り返さした。

ラヴルウシカは、それに目を付けた、そして、ナポレオンを尙一層面白がらせやうと思つて、彼が誰であるか知ら無いやうな顏をして、斯う云つた——

『私どもは、貴下がたの方にボナパルトが居るのを知つて居まさア、彼の人は、世界ぢうの誰にも勝つてえぢやアありませんかね、だが、吾々の方は左樣は行かが無えだらう……』彼は、何うして、何故、此樣な大袈裟な愛國心が滑り出たのか、自分にも分から無かつた。通譯官は末尾の方は略して、その言語を譯した、すると、ナポレオンは微笑んだ。『若い哥薩克騎は、彼の尊貴なる同行者の唇へ微笑を持ち來たした』と、チエールは、云つて居る。

默つて、五六步行つてから、ナポレオンはベルチエーに振り向いた、そして、今自分と話して居る人は皇帝その人、即ち、ピラミッドの面に彼の不朽の勇名を刻んだその皇帝であるといふことを知る結果を、『そのドンの兒に』試みて見度いと、云つた。

その事實がラヴルウシカに知らされた。

ラヴルウシカは——これが自分を試めす爲めに爲されたことであるのと、ナポレオンは、彼が吃驚して狼狽することを豫期して居ること、を、覺つたので——全く仰天して、口がきけ無くなつて了まつたやうな態を直ぐ裝つて、その新主人を滿足させやうと爲た、彼は、眼を眞圓くし、彼が笞うたれに伴れ去られる時に何時もするやうな顏を爲た。

『ナポレオンの通譯官が話すや否や、哥薩克騎は、仰天して、一言も云へ無くなつた、彼は、その後は、一言も云は無かつた、そして、その人の名聲が東洋の曠野を越えて彼の耳にまで達したその大征服者の上に絕えず眼を見据ゑて、步いた。彼の饒舌は乍ちにして消え去つて、心からの、沈默した畏怖に變つて了まつた。ナポレオンは、哥薩克騎に物を贈つた、そして、「人が鳥をその生れた野へ歸す」やうに、彼を釋放することを命じた』と、チエールは云つて居る。

ナポレオンが、彼の想像の裡に滿て居た莫斯科のことを夢みながら、乘り進んで居る間に、生れた野へ歸つて行く鳥は、自分の仲間に話すべき物語を拵へながら、自分の軍の前哨へと駈け戻つて居た。實際有つた事柄は、唯だ話すが物は無いといふ理由のみで、彼はそれを話さうと思は無かつたのだ。彼は、哥薩克騎隊へ乘り返つて、今は、ブラアトフ枝軍の一部を爲して居た自分の聯隊が何處に居るか尋ねた、そして、晩方になつて、ヤンコヴァに陣して居る自分の主人、ニコラアイ・ロストオフを見出した。ロストオフは、イリインを伴れて、附近の村落を乘り廻らうと、丁度馬に乘らうとして居るところであつた。彼は、ラヴルウシカに新しい馬

を與へて、自分等と一緒に彼を伴れて行つた。

（八）

公爵嬢マリイヤは、公爵アンドレエーが想像したやうに、莫斯科へ行つて居て、危險を脱して居るのでは無かつた。

アルバアティイチが、スモレエンスクから歸つてから、老公爵は、不意に眠から覺めたかのやうに見えた。彼は、民兵に、村々から集まつて、武裝するやうに命じた、そして、自分は、何時までも荒涼丘を去らずに、最後まで防戰する積りであるが、最も故參の露西亞の將官の一人が、捕虜になるか、死ぬるか、孰かである荒涼丘をば防禦する爲めの處置を執つて呉れやうとも、呉れまいとも、それは先方の判斷に委せると書いた手紙を、總司令官の許へ出した。老公爵は何時までも荒涼丘に居るといふことを、家内ぢうに告げ知らせた。

が、自分は去らぬと云つたけれども、公爵は、公爵嬢をば、デッサレと少さい公爵と共に、ボグチャアロヴァへ遣り、其所から、莫斯科へと遣るやうな取り計らひを爲た。前の無關心に續いて、父親が急に熱中した、夜も寢無いやうな勢力を出すやうになつたのに驚いて、公爵嬢マリイヤは何うしても父親一人を置いて行く氣になれ無かつた、で、自分のこれまでの生涯に初めて、思ひ切つて、父親の命令に從は無かつた。公爵嬢は去ることを拒んだ、そして、憤怒の恐ろしい暴風雨が公爵嬢の上に爆發した。公爵は、公爵嬢に對する無情の前の有らゆる實例を公爵嬢に憶ひ出させるやうなことを爲た。公爵嬢を罵しる辭柄を見付けやうと爲て、公爵は、公爵嬢が自分を苦しめる爲めに有らゆることを爲たのだと云ひ、公爵嬢は息子と自分の仲の違うやうに爲たのだと云ひ、公爵嬢は、自分に對して最も卑しい猜疑を持つたのだと云ひ、公爵嬢は、公爵の生涯を厭なものにするのをその生涯の目的にして居たのだと云つた。彼は、公爵嬢が去か無くつても、一向構は無いといふことを、公爵嬢に云つて、公爵嬢を自分の書齋から追ひ出した。

彼は、自分は公爵嬢の生きて居ることを聞か無くつても宜いのだから、又と自分の前へ出て來ぬやうに、屹度云ひ聞かせて置くのだと、公爵嬢に云つた。公爵嬢マリイヤは、自分が恐れて居たやうに、公爵が、無理やりに荒涼丘から自分を外へ移すことを命じ無いで、唯だ、彼の前へ出て來る勿と命じたのであつたので、安心した。公爵嬢は、これは、公爵が、心の奥では、公爵嬢が家を出無いで居るのを喜んで居ることを、表はして居るのを知つた。

ニコルウシカが去つて了まつた次の日、老公爵は、午前のうちに、將官の正裝を爲た、そして、總司令官を訪問する支度を爲た。馬車が、支度が出來て、立つて居た。公爵嬢マリイヤは、公爵が、有りつたけ勳章を胸へ掛けた制服の姿で、家から歩み出て、武裝した農夫や、家内の隷僕たちを、檢閲する爲めに、庭園を降りて行くのを見た。公爵嬢マリイヤは、庭園から響いて來る彼の聲を聞きながら、窓の所に坐つて居た。不意に、五六人の人が、忙てふためいた顔で、大路を駈けて來た。

公爵嬢マリイヤは、昇降段へ駈け出、花壇の路へ出、それから、大路へ出た。民兵や、家僕たちの多數の群集が、その路を公爵嬢の方へとやつて來つゝあつた、そして、その群集の眞中に、五六人が、制服と勳章を着けた小さい老人を抱き上げて、引摺つて來るのであつた。

公爵嬢マリイヤは、その老人の方へ駈けた、そして、菩提樹の大路の蔭に漉された光線の躍つて居る、小さい幾つもの圈の裡では、彼の顔の變つたことの判然とした印象を少しも造ることが能き無かつた。公爵嬢が見ることが能きたのは、彼の顔の嚴めしい、決心した表情が、臆病と服從の顔容に變つて居たことだけであつた。自分の娘を見るといふと、彼は、力の無くなつた唇を動かさうと爲た、そして、嗄れた音を出した。何を云つた積りなのか、解ら無かつた。

彼は、抱き上げられて、書齋へ運ばれた、そして、彼に取つては此の頃非常に恐い物であつた臥椅子の上へ置かれた。

その同じ晩喚ばれた醫者は、彼の血を取つた、そして、公爵は、彼の右側を不隨にした卒中に襲はれたのだと云つた。

荒涼丘に居ることがます〳〵危險になつて來た、で、次の日、人々は、公爵をボグチヤアロヴァへ移した。醫者も人々と共に旅した。

人々がボグチヤアロヴァへ達した時には、デッサレは最早小さい公爵を伴れて莫斯科へと出發して了まつて居た。

三週間の間、老公爵は、公爵アンドレエーが自分の設計でボグチヤアロヴァに建てた新しい家で、半身不隨になつたまゝで、快くも惡くもならずに臥て居た。老公爵は人事不省であつた、彼は不具になつた屍のやうに臥て居た。彼は、眉や唇をピリ〳〵振はせて、絶えず、何か呟いた、が、彼に、自分の周圍が解かつたのだか、何うだか、それは分から無かつた。唯一つだけは確であつた、それは、彼が苦しがつて、何か云ひ度がつて居たことであつた。が、それは何であつたのか、誰にも分から無かつた、それが何か病的な半狂氣な氣まぐれなのか、それが公

事か又は家事に關するものなのか、一向分から無かつた。

醫者は、この不安の狀態は何でも無いことで、その原因は肉體上のものだと云つた。が、公爵嬢マリイヤは、(實際自分が傍へ行くと、一層悶が烈しくなるやうなので)、彼が自分に何か話し度がつて居るのは確だと、信じたのであつた。

彼は、明かに肉體上にも精神上にも苦しんで居た。回復の望は全く無かつた。彼を他所へ移すことも不可能であつた。途中で死んだら、何うすることが能きるだらう?

『終末になつて了まつた方が、全く終末になつて了まつた方が、宜くは無いか知ら?』と、公爵嬢は時々は思ふのであつた。

夜も晝も、殆ど睡ずに、公爵嬢は老公爵を看病した、そして、恐しいことには、快い方へ變る徵候を見出す望に於てでは無く、屢最後の近付いて來る徵候を見やうといふ望に於て、看病したのであつた。

自分でそれを承知しては餘程不思議で堪まら無かつたけれども、公爵嬢は斯ういふ感を心の底に持つて居た。その上に、公爵嬢マリイヤに取つて尙一層恐しかつたことは、父親の病氣以來(漠然とした何物かに對する期待で、父親の許に何時までも居やうと決心した時分からでは無いにしても)公爵嬢の心の裡に睡つて居たさま〴〵な希望や欲望が覺醒したことであつた。

此所何年もの間公爵嬢の頭腦へは入つて來無かつたさま〴〵な考想——父親を恐れることの無くなつた生活、いやそれ所では無く、戀愛や、幸福な結婚生活の、能きるかも知れぬといふことの、さま〴〵な夢想が、惡魔の誘惑のやうに公爵嬢の想像を惱ました。

その考想を追ひ拂つて了まはうとしても無効であつた、この後では、自分の生活を何ういふ風にしようかといふ問題が、絶えず公爵嬢の心の裡に在つた。それは惡魔の誘惑であつた、そして、公爵嬢マリイヤはそれを知つて居た。公爵嬢は惡魔に對して効力のある唯一の武器は祈禱であることを知つて居た、で、公爵嬢は祈らうと骨折つた。公爵嬢は、祈禱の姿勢に自分の身體を爲て、聖晝を見詰め、祈禱の言語を繰り返した、が、それでも、祈ることが能き無かつた。公爵嬢は、自分が拘束の狀態に於て保たれて居て、其所での唯一の慰籍は祈禱であつたところの精神上の雰圍氣とは全然反對な眞の人生の、勞作の、そして、自由な活動の、新しい世界へ自分が自然に持つて行かれるのを感じたのであつた。公爵嬢は、祈れ無かつた、泣け無かつた、そして、實際的な配慮のみが心を領したのであつた。

ボグチヤアロヴァに居ることはます〴〵危險になつて居た。佛蘭西人が餘程近い所まで來て

居るといふ風說が八方から聞えて來た、そして、ボグチャアロヴァから十五露里の或る村では、一軒の家が佛蘭西の刼掠者どもに掠奪されたといふのであつた。

醫者は、老公爵を他所へ移す必要を主張した、縣の都督は、官吏を使として、能きるだけ速く避難するやうにと、公爵嬢マリイヤに勸めた。警務長は、同なじことを勸める爲めにボグチャアロヴァを訪ふて、佛蘭西人が最早僅に四十露里の所まで來て居ることや、佛蘭西の布告が村々に流布して居ることや、そして、若し公爵嬢が十五日以前に父親を他所へ移さ無かつた場合には、その結果に就ては責任を負うことが能き無いといふことを、公爵嬢に話した。

公爵嬢は十五日に發たうと極めた。いろ〳〵な準備や、必要な指圖を爲ることだのが――誰も彼も公爵嬢の指圖を仰ぎに來るので――その前の日ぢう公爵嬢を忙殺した。十四日の夜は、例の通り、衣服を脱がずに、老公爵が臥て居る部室の直ぐ次の室で、送つた。老公爵の呻唸聲や吱きや、寢臺の軋る音や、老公爵を動かすティフォンと醫者の足音を聞いて、幾度も眼を覺ました。幾度も公爵嬢は戸口へ行つて聞いた、と、彼は何時もよりは一層聲高く獨語を云ひ、一層苦しさうに身體を動かして居るやうに、公爵嬢には思はれた。公爵嬢は睡られ無かつた、で、幾度も戸口へ行つて、聞いて、入り度かつたが、さうするやうに決心することが能き無かつた。老公爵は物を云ふことが能き無かつたけれども、公爵嬢マリイヤは、彼が彼に對して心配さうな顏容を他人が爲るのが甚く嫌であることを、見て、知つた。公爵嬢は、時々我知らず老公爵を凝乎と見据ゑて居ることのある公爵嬢の眼から、老公爵が腹立たしさうに顏を背むけて了まうことに、氣が付いて居た。公爵嬢は、何時もと異つた時ならぬ時分に、夜、その部室へ自分が入つて行くことは、父親の氣に觸るであらうといふことを知つて居た。

が、この時程父親を氣の毒に思つたことは無かつた、この時ほど父親を失うことを恐しく感じたことは無かつた。公爵嬢は、自分のこれ迄の生涯に於ける父親との關係を憶ひ廻らした、と、何樣な言語にも、何樣な行爲にも、父親が自分を愛して居ることが表はれて居るのを見とめた。折々さういふ追憶が惡魔の誘惑の爲めに途斷らせられた、父親が死んだ後では何うなるとか、自分の新な獨立的な生活を何ういふ風に整へたものであらうとかいふやうなさま〳〵な夢想が、自分の想像の裡へ返つて來るのであつた。が、公爵嬢は、慄然として、さういふ考想を追ひ拂つた。朝近くなると、父親は少し靜になつた、で、公爵嬢は睡入つて了まつた。

公爵嬢は遲く起きた。寢起きの刹那には屢く伴ふ全くの信實な心持が、父親の病氣の裡で公爵嬢に取つて一番注意を引くものは何であつたかを、過り無く公爵嬢に示した。公爵嬢は眼覺

めた、戸越しに内部の狀態を聞いた、そして、父親の呟きの聲を聞いて、何の變化も無かつたのだとホッと嘆息して、自分を安心させた。

『が、何う爲たんだらう？。私は何を希つて居たんだらう？。私は父上樣の亡くなることを希つて居たんだわ』と、公爵嬢は、心の裡で自分で自分に呆れ果てゝ、叫んだ。

公爵嬢は顔を洗ひ、衣服を着換へ、祈禱を唱へ、それから、家の昇降段へ出て行つた。入口に、人々の荷物を積み込んだ馬車が幾臺か立つて居た。

朝は暖かで、薄曇つて居た。公爵嬢マリイヤは、尙自分の精神上の墮劣さに慄然として、父親に逢ひに行く前に、自分のさま〳〵な考想を何とか取り纒めやうと試みながら、昇降段の上で遲々して居た。

醫者は階下へ降りて、公爵嬢の居る所へと出て來た。

『今日は少許お宜しいやうです』と、醫者が云つた。『私は貴女を探して居ました。仰つしやる事が少許は人に解かるやうになりました。お頭が大部明瞭になつて來ました。おいでなさい。貴女に逢ひ度いと云つておいでです……』

公爵嬢マリイヤの心臟は、公爵嬢が、この報知で、蒼くなつて、倒れ無いやうに爲る爲めに戸へ凭りかゝつた程、それほど烈しく鼓動した。さま〳〵な恐しい罪の深い想像で自分の全心が滿たされた今、父親を見、彼に話を爲、彼の眼の前に出るといふのは、公爵嬢に取つては、苦しい喜悅と恐怖とに滿ちた事柄であつた。

『さア參りませう』と、醫者は云つた。

公爵嬢マリイヤは、父親の所へ入つて行つた、そして、彼の寢床の傍へ行つた。彼は、背後を高く擧げられて臥て居た、節だつた紫の血管で被はれた彼の小さい骨立つた手が、蒲團の上に置かれて居た、左の眼は前を眞直に見詰めて居ると、右の眼の方は、變に引つ攣つた形になつて居、唇と眉は少しも動か無かつた。彼は、非常に瘠せて、非常に小さく、そして、愍然に見えた。彼の顔は、凋び切つて了まつたか、溶け去つて了まつたかのやうに見えた、彼の顔付は何も彼もずつと少さくなつて了まつたやうに見えた。公爵嬢マリイヤは傍へ行つて、彼の手に接吻した。彼の左の手が、彼が公爵嬢に長く逢ひ度がつて居たことを示すやうな風に、公爵嬢の手を握つた。彼は公爵嬢の手をギユウ〳〵引いた、そして、彼の眉と唇が腹立たしさうに振えた。

公爵嬢は、父親が何うして呉れといふのか察し度いと思つて、オド〳〵と彼を見た。彼の左

の眼が公爵嬢を見ることが能きるやうに公爵嬢が位置を變るといふと、彼は滿足した樣子であつた、そして、五六秒の間、彼の眼が公爵嬢を見据ゑて居た。それから、彼の唇と舌がピクピク動いた、音が出た、そして、彼は、明かに、公爵嬢が彼の云ふことを解さ無いのを恐れて居る樣子で、懇願するやうなオド〳〵した態で公爵嬢を見ながら、何か云はうと爲た。

公爵嬢マリイヤは、父親を見詰めながら、注意の有らゆる能力を張り詰めた。彼が自分の舌を働かせやうと努める滑稽な骨折は、公爵嬢マリイヤをして眼を下げさした、そして、公爵嬢は、自分の咽喉に上つて來る咽び泣きを抑へるのに非常に骨が折れた。彼は、何か云つて居て、幾度も言語を繰り返した。公爵嬢マリイヤはそれが何だか解から無かつた。公爵嬢は、彼が云つて居ることを推量しやうとして、彼が云つて居るのだらうと想像した言語を尋くやうに繰り返した。

『お……お……え、……え、……』と、彼は、幾度か繰り返した。さういふ音を解釋することは到底能き無かつた。醫者は、それを解し得たと思つた、で、尋いた——

『公爵嬢は恐れて居る？』

彼は、頭を振つて、そして、同なじ音を繰り返した。

『心、心が苦しいんですね』と、公爵嬢マリイヤは察した。彼は、肯定的に鼻を鳴らして、公爵嬢の手を摯り、それに對する正當の場所を探して居るかのやうに、彼の胸のいろ〳〵な部分へそれを押し付け始めた。

『何時も思つて居たよ。——お前のことを……思つて居た……』と、彼は、自分の云はうと爲て居たことが先方に分かるといふのに安心したので、前よりも夐然解かり好く、やう〳〵云つた。公爵嬢は、自分の頭を彼の腕へ押し付けて、泣き聲と涙を隱くさうとした。

彼は、公爵嬢の髪を撫でた。

『夜中お前を喚んで居た……』と、彼は何うにか斯うにか云つた。

『知つて居さへしましたら……』と、公爵嬢は、涙の間から云つた。『入つては惡いと思つたもんですから』

彼は、公爵嬢の手をギュッと握つた。

『睡て居たのでは無いかね？』

『い、え、睡られませんでしたの』と、公爵嬢は頭を振つて、云つた。

知らず〳〵父親と同なじになつて、公爵嬢は、自分も亦物を云ふのが困難であつたかのやう

に、大抵手眞似で話さうとした。

『愛子よ』……と云つたのか……『愛する者よ』……と云つたのか、公爵嬢マリイヤは父親の言語を判然とは聞き取り兼ねた、が、彼の眼の表情から、その云つたことは、彼がこれ迄公爵嬢に對して一度も用ゐたことの無い可愛がる愛しみの言語であることは、寸毫も疑は無かつた。『何故來無かつた?』

『それだのに、私は希つて居た、父上樣の亡くなることを希つて居たんだもの』と、公爵嬢マリイヤは思つた。

老公爵は止まつた。

『有りがたう……お前……小兒、可愛い丶者、何も彼も、何も彼も……宥して呉れ……有りがたう……宥して呉れ……有りがたう……』で、涙が彼の眼から流れた。『アンヅルウシヤを喚べ』と、彼は不意に云つた、そして、小兒のやうな、赦を請ふやうな恐怖の態が、その問と共に彼の顏へ出て來た。彼は、自分でも、自分の問が何の意味も無いものであることを覺つて居るやうに見えた。右に左、公爵嬢マリイヤにはさう見えたのであつた。

『私は兄樣から手紙を頂きました』と、公爵嬢マリイヤは答へた。

老公爵はオド〳〵した驚愕の樣子で公爵嬢を見た。

『何處に居る?』

『軍に入つて、スモレエンスクにおいでですよ、父上樣』

彼は、眼を瞑つて、長い間默つて居た。それから、自分の疑に答へ、今自分は何も彼も理解して、記憶へて居ることを見せやうとするかのやうに、彼は、頭を首肯かせて、眼を開けた。

『左樣ぢや』と、彼は、聲低く、判然と云つた。『露西亞は滅びた。彼等は露西亞を滅した』で、再、彼は泣き出した。そして、涙が彼の眼から流れた。公爵嬢マリイヤは最早堪へ切れ無かつた、そして、彼の顏を見ながら、又泣いた。

彼は、再眼を瞑つた。彼の啜泣は止んだ。彼は、自分の眼に指ざしした、と、ティフォンが、老公爵の心持を知つて、涙を拭き除つた。

それから、老公爵は眼を開けた、そして、何か云つた、が、それは、長い間、誰にも解からぬ無かつた、到頭ティフォンには解かつて、彼はそれを說明した。

公爵嬢マリイヤは、公爵の言語の意味を、彼がその少し前に云つて居たことの方角に索めた

のであつた。公爵嬢は、彼は、露西亞のことを云ひ、それから、公爵アンドレエーのこと、公爵嬢自身のこと、孫のこと、それから、老公爵自身の死のこと、を云つて居るのだと想像した。で、さうであつたが爲めに、老公爵の云つたことが分から無かつたのであつた。

『お前の白い衣服を着ろよ。私は彼が好きぢや』と、老公爵は云つて居たのであつた。

さういふ言語が解かるといふと、公爵嬢マリイヤは尙一層聲高く歔欷て泣いた、で、醫者は公爵嬢を引張つて、部室から築臺の上へと伴れ出して、自分自身を落ち着かせて、旅行の準備にかゝり切るやうにと、說き勸めた。公爵嬢マリイヤが公爵の傍を去つてから後、彼は、再、息子のこと、戰爭のこと、皇帝のことを話しだし、眉を腹立たしさうにピク〳〵させ、嗄れた聲を高くし始め、で、到頭、二度目で、最後の發作に襲はれた。

公爵嬢マリイヤは、築臺の上に止まつて居た。日は、きら〳〵と麗かに、晴やかに、暖になつた。公爵嬢は、何も確乎と思ひ定めることが能きず、何も考へることが能きず、そして、その刹那まで氣が付か無いで居たやうな氣の爲た父親に對する熱烈な愛情の外何にも感ずることが能き無かつた。公爵嬢は庭園へと駈け出した、そして、公爵アンドレエーが菩提樹を植ゑて置いた步路について、池の方へ、啜り泣きしながら、駈けて行つた。

『左樣……私……私……私は父上樣の亡くなることを希つてたんだわ。左樣だわ、私はそれが直ぐ結局になれば宜いと思つたんだわ……私は樂になり度いと思つたんだわ……。で、私は何うなるんだらう?。父上樣がお亡くなりなされば、樂になつたつて、それが私に何になるだらう?』と、公爵嬢マリイヤは聲高く獨語を云つて、身體を慄はす啜り泣きで波を打つ胸へ手を押し付けて、庭園を速步で步いて行つた。

庭園をぐるつと一周したので、自然に家の所へ返つて來た公爵嬢は、マドモアゼル・ブウリアンヌ（逃げ無いで居ると云つて、ボグチャアロヴァに居る筈であつた）と、誰だか分から無い紳士とが、自分の方へ來るのを見た。それは、地方の都督で、卽刻出發する必要を勸める爲めに、公爵嬢を訪問したのであつた。

公爵嬢マリイヤは、彼の云ふことを聞いては居たが、何を云つたのか一向解し得無かつた。公爵嬢は、家へ彼を案內した、中食を羞め、彼と一緖に坐つた。それから、失禮だが許して呉れと云つて、公爵嬢は老公爵の部室の戶口へと行つた。醫者が、顚動した顏で出て來て、入つては不好いと云つた。

『彼方へいらつしやい、公爵嬢、彼方へいらつしやい』

公爵嬢マリイヤは、再庭園へと出て行つた、そして、丘の麓の池の傍の、誰にも自分の居るのが見え無いやうな所の、草の上に坐つた。其所に何れ程の間居たのか公爵嬢には分から無かつた。路を駈けて來る女の足音が公爵嬢を見返らせた。公爵嬢は起ち上がつた、そして、公爵嬢附の女中のヅウニヤシヤが、確に公爵嬢を探して居るらしい樣子で駈けて來ながら、女主人を見ると、吃驚したかのやうに、ピタリと立ち止まつた。

『いらしつてくださいまし、何卒、公爵嬢……公爵が……』と、ヅウニヤシヤは、振え聲で云つた。

『直ぐに、直ぐに』と、公爵嬢は、ヅウニヤシヤが云はうとして居たことを云ふ間隙を與へずに、急いで叫んだ、で、ヅウニヤシヤを見無いやうにしながら、家へ駈け込んだ。

『公爵嬢、神の御意です。貴女は、一番不幸なことに出逢ふお覺悟をなさら無ければなりませんぞ』と、家へ入る戸口で公爵嬢を迎へて、都督が云つた。

『いゝえ、虚僞ですよ』と、公爵嬢は、彼に向つて、腹立たしげに叫んだ。

醫者は公爵嬢を止めやうと爲た。公爵嬢はそれを突き退けて、戸口へ駈け寄つた。『何だつて此樣な怖がつたやうな顏の人々が私を引き留めるんだらう？。私は此樣な人々なんぞに居て貰ひ度くは寸毫も無いわ。何の用があつて此處に居るんだらう？』と、公爵嬢は思つた。

公爵嬢は戸を開けた、と、これ迄は何時も暗くされて居た部室へ、晴やかな晝の光がさし込んで居るのに、ギヨツとさせられた。公爵嬢の年取つた乳母や、その他の女たちが部室に居た。誰も彼も、寢臺の傍から引き退つて、公爵嬢の通り路を開けた。公爵は、前と同なじに未だ寢床に臥て居た、が、彼の靜な顏の嚴格な樣子が、公爵嬢マリイヤを戸口に止まらせた。

『いゝえ、亡くなつたんぢやア無いわ。左樣なことがあるものか』と、公爵嬢マリイヤは、心の裡で云つた。公爵嬢は老公爵の傍へ行つた、そして、襲つて來た恐怖をおし靜めおし靜めしながら、彼の頰部へ自分の唇を推し付けた。公爵嬢は、ハツとして直ぐ彼から身を引いた。これ迄彼に向つて感じて居た總ての愛情が、乍にして、一度に消え去つた、そして、直ぐ、自分の前に横たはつて居る物に對する恐怖の感に續かれた。

『いゝえ、いゝえ、父上樣は最早居らつしやら無いんだわ。父上樣は最早居らつしやら無い、父上樣の居らしつた所には、何だが分から無い、不吉な、恐ろしい、慄然とするやうな、厭な秘密が居るんだわ』

で、兩手で顏を隱して、公爵嬢マリイヤは、自分を支へて居て呉れる醫者の腕へと沈んだ。

ティフォンと醫者の前で、女たちは、嘗て公爵であつた所の物を洗つて、口が固く開き切りになつて了まはぬやうにと頭を手巾で縛へ、手脚も他の手巾で縛へた。それから、勳章の附いた制服が着せられた、そして、小さい干こちばつた身體が卓子の上に置かれた。何時、誰が、總てさういふことを爲やうと思つたのか分から無かつた、それは悉皆自然にさう爲つたやうに見えた。

夜になつて來ると、蠟燭が棺の周圍に點けられ、葬布がその上に置かれ、杜松が床に撒かれ、印刷した祈禱が死んだ凋びた頭の、下に置かれ、そして、補祭が隅に坐つて、百五十信章を聲高に讀んで居た。

（九）

公爵アンドレエーが、ボグチヤアロヴァに一時住ふやうになるまでは、その領地には持主が一度も住まつたことが無かつた、で、ボグチヤアロヴァの農夫は、荒涼丘の農夫とは全く性質を異にして居た。彼等は、言葉も異へば、衣服も、風俗も異つて居た。彼等は廣野から來たのだと云ふのであつた。老公爵は、彼等が收納の爲めや、池とか堀とかを掘る爲めに、荒涼丘へ來た時に、彼等の勤勉を褒めた、が、彼は、彼等の風俗が荒々しかつた爲めに、彼等を好ま無かつた。

公爵アンドレエーがボグチヤアロヴァに定住したこと、、彼の改良――彼の病院や、學校や、彼等の小作料を下げたこと――は、彼等の風習を和げはせずに、反つて、老公爵が彼等の蠻氣と呼んで居た特質を强めたのであつた。

取り留めの無い風説が何時も彼等の間に行はれて居た、或る時は、彼等は皆な哥薩克騎に爲る爲めに何處かへ伴れて行かれるといふ信仰、その次には、彼等は何か新しい宗教に改宗させられるのだといふ信仰、その又次には、皇帝の何かの布告があるといふ想像に基づく噂、千七百九十七年に於ける皇帝ペエトル・ペエツロヴィイチに對する誓約（それは、農夫に自由を與へたのであつたが、後になつて紳士階級の爲めに廢されて了まつたといふのであつた）の噂、それから又、七年目度に死から蘇生つて、全くの自由を持ち來たし、現在の狀態を改めて了まうといふのであつた皇常ペエトル・フェドロヴィイチが兼ねて待ち望まれて居た通りに歸つて來るといふ噂などが、行はれて居た。

戰爭だの、ボナパルトだの、その攻入だのゝ風説が、彼等の心の裡では、『基督の敵』や、世

界の終焉や、完全な自由に就ての彼等の考想と結び付けられたのであつた。

ボグチヤアロヴァの附近には、皇室附の農夫や、土地に居無い地主に小作料を納める農夫の住まつて居る大きい村々があつた。近邊には、定住の地主は極々少かつた、で、家内の隷農卽ち讀み書きの能きる農夫が極く少かつた。それで、田舍のその部分の農夫の間では、露西亞の農夫の生活の裡の――同時代の人々には何うしても分から無いものであつた――その不思議な暗潮が、何處よりも一番瞭乎と強く表はれて居たのであつた。

二十年前には、その地方の農夫の間に、想像された或る暖な河へ移住しやうといふ運動があつた。何百とも知れぬ農夫が――その中にボグチヤアロヴァの者どもが加はつて――不意に各自の牛羊を賣つて、一家を擧つて、南西の方へと動き始めた。太洋を越えて、知られ無い土地へ飛んで行く鳥のやうに、小兒等や妻を伴れた此等の人々は、自分たちのうち誰一人行つたことの無い南西の方へと向つた。彼等は幾つもの旅隊を爲して出立し、一人々々相次いで各自の自由を買ひ戻し、暖い泉の方へと、走り、馬を驅り、或は步いた。罰せられた者が少く無かつた、或者は西伯利亞へ流された、途中で寒氣と饑餓の爲めに死んだものも多く、自分から元の土地へ歸つて來たものも多かつた、で、この運動は、それが始まつた時と同なじやうに、別に何といふ明かな原因も無しに、無くなつて了まつた。が、暗流は、尙人民の間に流れて居た、で、不思議に、不意に、そして同時に、單純に、自然に、力强く表れて來べき筈になつて居た何か新たな勃發を起すべき力を貯へつゝあつたのであつた。

千八百十二年には、農夫たちと密接な關係を持つて生活して居る人は誰でも、表面の下に烈しい沸騰が起りつゝあつて、何等かの勃發が近づいて居ることを、認めることが能きたであらう。

老公爵の亡くなる一寸前にボグチヤアロヴァへ來たアルバアティイチは、農夫たちの間に何かしら動搖のあるのに氣が付いた、それから又、荒凉丘近邊では、四方六十露里内の農夫等は悉く、各自の村を哥薩克騎の荒すに委せて、何處へか避難して了まつたのに反し、ボグチヤアロヴァに居る曠野の農夫等は、佛蘭西人と交涉を始めて、各自の家に殘つて居るのだといふ風說があるのみならず、彼等の間には何か不思議な書類が廻つて居ることに、氣が付いたのであつた。

アルバアティイチは、自分に信服して居た隷農たちの口から、村で非常な勢力を持つて居るカルプといふ農夫が、二三日前に政府の輸送隊に隨いて行つて、哥薩克騎は人の逃げた後の村を破

壞して居るけれども、佛蘭西人はそれを少しも犯さ無いといふ情報を持つて歸つて來たといふことを知つた。

アルバアティイチは、今一人の農夫が、佛蘭西人が陣して居たヴィスルウホヴァの村から、住民に對しては何の害をも加へ無い、そして、彼等が逃げ無いで居れば、彼等から取る物に對しては何樣な物に對してもその價を拂ふといふ、佛蘭西の將官からの布告を持つて來たことさへ、知つた。その農夫は、佛蘭西人の言葉は信實だといふ證據として、干草に對して前金に渡された百ルウヴル紙幣（彼はそれが贋紙幣なのを知ら無かつた）をヴィスルウホヴァから持つて歸つたのであつた。

それから、最後に、最も重要なこととしては、アルバアティイチは、彼がボグチヤアロヴァから公爵嬢の荷物を移す爲めの荷馬車を集めろといふ命令を村長に與へたその日に、村には集會があつて、其所で、動かずに、待たうといふ決議が纏まつたことを、知つた。そのうちに、時はます〳〵切迫しつゝあつた。

公爵の亡くなつた日、卽ち八月十五日には、都督は、事態が甚だ危險であるから、是非その日他所へ移れと、公爵嬢マリイヤに勸めた。彼は、十六日以後に何が起らうとも、それに對して責任は負へ無いことを云つた。彼は、その晩、翌朝葬式には來ると約束して、歸つて了ふつた。が、次の日、彼は來ることが能き無かつた、彼は、佛蘭西人が進軍するだらうといふ情報に接して、艱然のことで、自分の家族と財產を自分の領地から他所へ移すのが間に合つたのだ。

殆ど三十年近くの間、ボグチヤアロヴァは、老公爵からはヴロンヌウシカと呼ばれたヴロンといふ村長の支配下にあつた。

ヴロンは、成人になるや否や濃い鬚が生へて、六十歳になつても、三十歳の時と同なじやうに、身體が眞直で强健で、白髮一本無く、齒一枚無くならずに、六七十歳まで殆ど寸毫も變らずに居るといふやうな、さういふ肉體上、精神上共に强健な農夫の一人であつた。

暖な河への移住――ヴロンも尙且それに加はつたのだ――の企てられた後間も無く、ヴロンはボグチヤアロヴァの村長兼支配人にされて、その位地を二十三年間缺點無く勤め來つた。農夫等は、自分たちの主人よりもヴロンを恐れて居た。老公爵も、若公爵も、執事も、彼に敬意を拂つた、そして、戲談に彼を『大臣』と呼んで居た。ヴロンは、村長を命ぜられて以來、一度も醉拂つたこと無く、病氣になつたことも無かつた、彼は、幾晩も眠無かつた後でも、非常に勞働した後でも、決して一寸でも疲れた氣色を表さ無かつた、そして、彼は讀み書きが能

き無かつたけれども、自分が賣つた大きい馬車積の粉の斤數の勘定や、それに向つて拂はれた金高を決して忘れ無いし、又、ボグチヤアロヴァの野の一エーカア毎の麥の一束をも決して見遺さ無かつた。

アルバアティイチが、劫掠された荒涼丘の領地から來るや否や、喚び出したのは、この農夫のヴロンであつた。彼はヴロンに、公爵嬢の馬車に對して十二匹の馬と、ボグチヤアロヴァから動く爲めの十八輛の馬車の取り揃へを命じた。其所の農夫等は隷農として働いて居るのでは無く小作料を納めて居るのではあつたが、ボグチヤアロヴァには二百三十の相當な家族があり、農夫等は皆な相應な生活であつたので、この命令を實行することに就て、彼等の方で不承知があらうとは思ひも掛け無かつた。

が、ヴロンは、その命令を受けるといふと、眼を下げて、何の返答も爲無かつた。アルバアティイチは、幾人かの農夫の名を擧げて、それから荷馬車を貸りろと、ヴロンに命じた。

ヴロンは、さういふ農夫等の馬は皆な他へ雇はれて行つて居ると答へた。アルバアティイチは、他の農夫等の名を擧げた。が、彼等も又、ヴロンの云ふところでは、よこすことの能きる馬を持つて居無かつた、或る馬は、政府の輸送に雇はれ、他のものは跛になり、尙他のものは飼料の少いが爲めに死ん　了まつたといふのであつた。ヴロンの說では、荷物の輸送はさて措き、公爵嬢の馬車に足る　けの馬を得る望が更に無いといふのであつた。

アルバアティイチは、ヴロンを疑乎と見詰めて、顏を顰めた。ヴロンは、模範的村長であつた、が、アルバアティイチは、唯だ徒らに公爵の領地を二十年間管理して居たのでは無かつた、彼も亦模範的執事であつた。彼は、自分の相手方になる農夫等の必要と本能を洞察する能力を最高度に於て持つて居た、だから、彼は、非常な良執事であつたのだ。ヴロンを一瞥して、彼は、直ぐに、ヴロンの返答は、ヴロン自身の考慮を云ひ表はしたものでは無くして、村長も最早その方へ引き入れられて了まつて居たボグチヤアロヴァ村に於ける意見の一般的の傾向を云ひ表はしたものであるのを、見た。それと同時に、アルバアティイチは、大部金錢を貯め込んで居て、村人からは嫌はれて居たヴロンは、兩陣——主人の方と、農夫等の方——の間に逡巡して居るに違ひ無いことを知つて居た。彼は、ヴロンの眼の裡でその逡巡の態を見て取つた、で、顏を顰めて、ヴロンの傍へずつと寄つて行つた。

『おい、ヴロヌウシカ』と、彼は云つて、『お前善く俺の云ふことを聞けよ。俺に左樣な篦棒なことを云つたつて無効だぞ。閣下、公爵アンドレエー・ニコラアエヴィイチご自身が人々を他

所へ移して、敵の手へ殘さぬやうにしろと俺にお命じになつたし、又、皇帝も、さうし無ければならんといふ勅命をお下しになつたんだぞ。誰でも止まる奴は、皇帝に刄向ふ謀反人なんだぞ。おい、お前宜いか、解かつたか？』

『へい、聞いて居ります』と、眼を擧げずに、ヅロンは答へた。

アルバアティイチは、ヅロンのその返答では滿足し無かつた。

『おい、ヅロン、困ることにならうぜ』と、アルバアティイチは頭を振つて、云つた。

『貴下は命令者でおいでなさるんだから』と、ヅロンは、悄げこんで云つた。

『おい、ヅロン、其樣なことは止せよ』と、云つて、アルバアティイチは、上衣の胸から手を離して、ヅロンの脚下の地面を嚴肅な手付で指さした。『俺はお前の腹の底まで見透すことが、能きるんだぞ。いや、そればかりぢやア無い、俺は、お前の脚下の地面の三碼なかまで見透すことが能きるんだぞ』と、アルバアティイチは、ヅロンの足の下の地面を見ながら、云つた。

ヅロンはアタフタした、彼は、アルバアティイチを竊然と見て、再眼を下げた。

『お前、馬鹿げたことは止せよ、衆皆になら、家の物を纏めて、家を捨てゝ莫斯科へ逃げる支度を爲るやうに云ひ付けろよ、それから、明日の朝は、公爵嬢のお荷物を運ぶ荷馬車を揃へて置くやうに、さう云へよ、お前、村の奴等の集會へ行つちやア不好ぞ。おい、宜いか？』

不意に、ヅロンは、アルバアティイチの脚下に身體を投げ倒した。

『ヤアコフ・アルバアティイチ、私を免職してください。私から鍵をお取りなすつて、私を免職してください、後生一生のお願ですから』

『左樣なことを云ふのは止せ』と、アルバアティイチは、荒々しく云つた。『俺は、お前の身體を見透し、地面の三碼の下まで見ることが能きるんだぞ』、彼は、彼の蜜蜂を飼ふことの熟練や、燕麥を播くべき丁度の日を知つて居ることや、二十年間も老公爵の機嫌を旨く取り得て居たことが、最早餘程前から魔法使ひだといふ評判を彼に與へたこと、そして、人の脚下の地面を三碼下まで見透す力は、魔法使ひの持つて居るものだとなつて居ることを知つて居たので、斯う云つた。

ヅロンは、起ちあがつて、何か云はうと爲た、が、アルバアティイチは、彼を遮つた。

『お前、一體何を考へ付いたんだい？えゝ？……何をお前考へてるんだい？。えゝ？』

『私に奴等を何うすることが能きるものですか？』と、ヅロンは云つた。『奴等は今騷ぎ立つてる最中です。私は奴等に云ひます……』

『うん、是非さうしろ』と、アルバアティイチは云つた。『奴等は飲んでるのか？』と、彼は簡短に尋いた。

『奴等は騷ぎ立つてる最中です、ヤアコフ・アルバアティイチ、奴等は、今もう一酒槽手に入れたところです』

『では、なア、俺の云ふことを熟く聞けよ、宜いか。俺は、警務長のところへ行く、お前は、奴等にそれを云ふんだぞ、そして、今やつて居るやうなことはパッタリ止して了まつて、荷馬車を揃へるやうに、奴等に云ひ付けろよ』

『畏まりました』と、ヅロンは答へた。

ヤアコフ・アルバアティイチは、その上には云ひ張ら無かつた。彼は、農夫どもを扱かうことに多くの經驗を持つて居た、そして、彼は、服從を確に得る主な手段は、彼等が服從し無いかも知れぬといふ疑念を寸毫も見せ無いことであるのを、知つて居た。で、ヤアコフ・アルバアティイチは、荷馬車は、軍事當局の干渉が無い以上は、得られ無いのでは無からうかといふ疑念は十分持つて居た――いや、彼は、得られぬといふ確信を持つて居た――に拘はらず、ヅロンから、その從順な『畏まりました』といふ言語を捻り取つて、唯だ、それだけで滿足して居たのであつた。

で、晩になつても、實際、荷馬車は持つて來られ無かつた。酒舗で再村の集會が有つた、その集會で、森へ馬を驅り込んで置いて、運送車は供給し無いと、決議して了まつた。さういふことに就ては公爵嬢には一語も云はずに、アルバアティイチは、荒涼丘から來た荷馬車から自分の荷物を下ろして、その荷馬車の馬を公爵嬢の馬車へ附けるやうに云ひ附けて置いて、自分は警察官の處へと馬で行つた。

（十）

父親の葬式が濟んでからは、公爵嬢マリイヤは、自分の部室へ閉ぢ籠もつて、誰をも近づかせ無かつた。女中が、旅行に就ての公爵嬢の考慮を聞きにアルバアティイチが來て居るといふことを、云ひに戸口まで來た。（これはアルバアティイチがヅロンと談判を爲たより前のことであつたのだ）。公爵嬢マリイヤは、その時まで横になつて居た長椅子から起きた、そして、閉め切つた戸越しに、自分は何うしても何處へも行か無いのだから、自分のことには一切構はずに、捨て置いて呉れるやうにと、答へた。

公爵嬢マリイヤが臥て居た部室の窓は西方へ向つて居た。公爵嬢は、壁へ顔を向けて、長椅子の上に臥て居て、柔皮の枕の扣鈕を手弄りながら、その枕の外何にも見ず、有らゆる考想が悉皆一つの問題の上に漠然と集中して居た。公爵嬢は、死が物の最終であること、父親の病氣の時にそれが現はれて來るまでは、其樣なであらうとは思ひも掛け無かつた自分の精神上の陋惡であること、を、考へて居たのであつた。公爵嬢は祈らうと思つた、が、それを爲得無かつた、自分がその時居たやうな心靈狀態では、神に訴へることを爲し得無かつたのだ。長い間、公爵嬢はその位地で横になつて居た。

日の入であつた、斜にさし込む日光が、開いて居た窓から入つて部室を明るくして、公爵嬢マリイヤが見詰めて居たモロッコ皮のクッションの一部を赤く照らした。公爵嬢の考想の流が不意に止められた。公爵嬢は、我知らず起きて、髪を撫で付け、立ち上がり、窓へ歩いて行つて、晴れ渡つて風のある夕方の、心持の好い涼しさの深い息を、我知らず吸ひ込んだ。

『左樣、今お前は樂々と落陽を賞することが能きる。彼の人は最早此所には居無い、誰もお前を妨たげるものは無い』と、公爵嬢は自分自身に向つて云つた、そして、椅子へぐたりと掛けて、頭を窓敷居の上に落した。

誰か、園庭から和かな優しい聲で、公爵嬢の名を呼んで、頭に接吻した。公爵嬢は見上げた。それは、黑い衣服に喪章を附けたマドモアゼル・ブウリアンヌであつた。ブウリアンヌは徐かに公爵嬢マリイヤに近寄つて、嘆息を爲て、直ぐに涙を滾しだした。公爵嬢は振り返つてブウリアンヌを見た。自分がブウリアンヌと爲た有らゆる往時の喧嘩、ブウリアンヌに對する自分の嫉妬、さういふものが公爵嬢マリイヤの心へ再歸つて來た。公爵嬢は又、父親は近頃はマドモアゼル・ブウリアンヌに對して餘程變つて居て、ブウリアンヌを見るのさへ嫌がつて居たことを憶ひだした、で、自分が心の裡でマドモアゼル・ブウリアンヌを責めて居たのは、非常に間違つたことであつたのだといふことを憶ひだした。『左樣なんだわ、それだのに、父上樣がお亡くなりになれば宜いと思つたことのあるこの私が、誰にしろ、他の人を責めることが何うして能きよう』と、公爵嬢は思つた。

公爵嬢マリイヤは、自分に縋ら無ければならぬ無いのに、自分とは仲違になつて、知ら無い人人の間に暮らして居るマドモアゼル・ブウリアンヌの位地を現然と自分の心に描いた。で、公爵嬢はブウリアンヌを甚く氣の毒に思つた。公爵嬢は、優しい尋く顏容でブウリアンヌを見て、手をさしだした。マドモアゼル・ブウリアンヌは、直ぐに、涙ながらに、その手に接吻し、自分

も共に悲みを分つて居る一人だと云つて、公爵嬢の悲痛のことを話し始めた。ブウリアンヌは、自分の悲愁に對する唯一の慰籍は、公爵嬢が、自分が公爵嬢と悲愁を共にすることを許して呉れることだと云つた。それから、二人の間のこれ迄の有らゆる誤解は、二人のこの大きい悲愁の前では全く忘れられて了まは無ければならぬといふことや、自分は誰に對しても罪は無いと思つて居ることや、老公爵は天から自分の愛情と感謝を見て呉れるといふことを、云つた。

公爵嬢は、時々ブウリアンヌの顔を見て、その聲を聞いて居たのではあつたが、その言語は一向耳へ入ら無かつた。

『貴女の位地は二重に恐しいものなんですわ』と、マドモアゼル・ブウリアンヌは云つた。『貴女は貴女がご自分のことを思ふどころで無いことは、私善く知つてますけれども、私は貴女に對する愛の爲めに、貴女のことを考へ無い譯には行か無いんです……。アルバアティイチは貴女の所へ參りましたか？。彼の人は、他所へ移ることで何か貴女にお話を爲たんですか？』と、ブウリアンヌは尋いた。

公爵嬢マリイヤは返答を爲無かつた。公爵嬢には誰が移るといふことなのか、何處へ移るといふことなのか、解から無かつた。『今何か爲ようとする事なんぞが、何事か考へることなんぞが、能きるのだらうか？。最早何うなつても構は無いのでは無いか』と、公爵嬢は思ひ迷つた。で、何とも返答し無かつた。

『ねえ、親愛なマリイ』と、マドモアゼル・ブウリアンヌは云つた。『吾々は危い位地に居るんですよ、吾々は佛蘭西人に取り圍れて居るでせう、ですから、今動くのは危いんですよ。若し動けば、吾々は必然捕虜になつて了まひます、さうなると、何樣なことになるのやら……』

公爵嬢マリイヤは、ブウリアンヌが何を云つて居るのか寸毫も解らずに、その朋友の顔を見た。

『あら、私は最早何うならうが寸毫も構は無いのにねえ』と、公爵嬢は云つた。『勿論、私は父上樣の側を何うしたつて離れやしませんよ……アルバアティイチは他所へ行けとか何とか云つて居ました……貴女彼に云つてください……私は何にも爲ることが能き無いし、又爲る氣も無いんです……』

『私彼の人と談を爲ました。明日は何うにか發てるやうになるだらうといふ見込なんださうです、けども、私は、最早斯うなつては此所に居る方が宜いと思ふんですよ』と、マドモアゼル・ブウリアンヌが云つた。『若しか、途中で兵卒どもか、亂暴な農夫どもにでも捉まつたら、

ねえ、親愛なマリイ、それこそ大變ぢやアありませんか』

マドモアゼル・ブウリアンヌは、自分の手提袋から、普通の露西亞の紙では無い一枚の書類を取り出した。それは、各自の家を捨てずに居る住民には殘らず佛蘭西の司令官たちから保護を與へるといふことを告げた將軍ラモオーの告示であつた。ブウリアンヌは、それを公爵嬢に渡した。

『この將軍に訴へるのが一番宜からうと思ふんですよ』と、マドモアゼル・ブウリアンヌは云つた。『貴女に對しては必然相當な尊敬が表されるでせう』

公爵嬢は書面を讀んだ、と、顏は涙の無い啜り泣で動いた。

『誰の手からこれが貴女の所へ來たんですか?』と、公爵嬢は尋いた。

『多分私の名で私が佛蘭西人であることを知つたんでせう』と、マドモアゼル・ブウリアンヌは、顏を赤らめて、云つた。

その告示を手に持つて、公爵嬢マリイヤは、窓の所から起ちあがつて、蒼い顏で、部室を出て、公爵アンドレエーの前の書齋へと行つた。

『ヴウニヤシヤ。アルバアティイチをよこしてお呉れ、ヴロヌウシカでも、誰でも』と、公爵嬢マリイヤは云つた。『それから、マアリヤ・カアルロヴナに私の所へ來無いやうに云つてお呉れ』と、公爵嬢は、マドモアゼル・ブウリアンヌの聲を聞いて、云ひ添へた。『直ぐに發つ。能きるだけ早く』と、公爵嬢マリイヤは、佛蘭西人の捕虜になつて了まうといふ考想に慄然として、云つた。

『公爵アンドレエーが、公爵嬢マリイヤが佛蘭西人に捉まつて了まつたと聞いたら、その驚愕は何樣なであらう。公爵ニコラアイ・アンドレエーチ・ボルコオンスキイの娘たる公爵嬢が、將軍ラモオーの保護を請ふまで、身を屈し、彼の親切に縋がるに至るなどゝは』

さういふ考思は、公爵嬢を慄然とさせ、震えさせ、眞赤にならせた。公爵嬢は、これ迄嘗て何樣なものだか思ひ得もし無かつた復讐的の憤怒と自尊心との急に胸へ突つかけて來るのを感じた。自分の位地の厭なことの全體、尙それよりも厭な屈辱の狀態が、公爵嬢の想像の裡へ現然と見えて來た。

『彼等、佛蘭西人は、この家を宿舍にするだらう、將軍ラモオーは、公爵アンドレエーの書齋を居間にして、彼の手紙や書類を面白づくに讀み散らすだらう、マドモアゼル・ブウリアンヌが居た爲めにボグチヤアロヴァが非常に善い場所になるだらう、私には恩惠的に一室を呉れる

だらう、兵卒どもは、父上樣の新墓を暴いて、幾つもの勳章を奪るだらう。彼等は、露西亞人に對する彼等の勝利を私に話し、私の悲愁に對しては僞善的な同情を裝うだらう……』、公爵嬢マリイヤは、自分に取つて自然な考想を考へずに、自分の父親や兄が考へたらうと思ふやうに考へるのを、自分の義務だと感じて、さういふ風に思つた。

公爵嬢自身に取つては、何處に自分が止まつて居ようと、何が自分の身に起つて來ようと、一向構は無いと思つて居たのだが、それと同時に、自分は亡くなつた父親と公爵アンドレエーの代表者であるのだと感じたのであつた。我知らず、公爵嬢は、彼等の考想を考へ、彼等の感を感じた。彼等が云ふだらうと思はれること、彼等が今爲るだらうと思はれること、それを爲るのが自分の義務だと、公爵嬢は感じたのだ。公爵嬢は、公爵アンドレエーの書齋へ行つて、彼の考想へ全く入り込んで了まはうと力めながら、自分の位地を思ひ廻らした。

父親の死以來、何うでも構は無いことだと思ふやうになつて居た人生の危急が、前には思ひも掛けなかつたやうな力で、公爵嬢マリイヤの周圍に不意に迫つて來て、公爵嬢を推し流した。

赤くなつて、昂奮して、公爵嬢は部室を歩き廻つて、最初はアルバアティイチを、それから、ミハアイル・イヴァアニイチを、それから、ティフォンを、それから、ヅロンを喚びに遣つた。ヅウニヤシャや、年老つた乳母、女中たちは、マドモアゼル・ブウリアンヌの云つたことが何れほど迄實際のことなのか、公爵嬢に話すことが能き無かつた。アルバアティイチは家に居無かつた、彼は、警察官の所へ行つて居たのであつた。建築技師のミハアイル・イヴァアニイチは、喚ばれたので眠い眼をしてやつて來た、が、公爵嬢に何にも話し得無かつた。彼が、十五年の間、一度も厭な顏をせずに公爵の言語を迎へ來つたその同なじ從順の笑顏で以つて、彼は今公爵嬢の問に對した、で、彼からは何等確な返答を得やうが無かつた。

そのやつれた、肉の落ちた顏が慰める方の無い哀愁の印を表はして居た年取つた從僕のティフォンは、公爵嬢が何を尋いても、『へい、左樣でございます、公爵嬢』と答へるばかりで、公爵嬢を見るといふと、啜り泣を制し得無かつたのであつた。

最後に、村長のヅロンが部室へ入つて來た、そして、公爵嬢に向つて、低く叩頭を爲て、戸口の近くに立つた。

公爵嬢マリイヤは、部室を彼方此方と歩いて、ヅロンに面して、立ち止まつた。

『ヅロヌウシカ』、公爵嬢は、毎年ヴィアズマの市場から、公爵嬢には彼の附物だと思はれるやうになつて居た何時も同なじ生姜餅を買つて來て、同なじ笑顏で公爵嬢にそれを捧げたそのヅ

ロンは、無論公爵嬢の爲めには忠實な味方だと思つて、斯う云つて、『ヴロヌウシカ、今、吾々の不幸の後……』と、公爵嬢は云ひ始めた、が、進むことが能き無くなつて、止まつた。

『吾々は皆神の御手のうちにあるのでございます』と、ヴロンは、嘆息して、云つた。

二人とも默つて居た。

『ヴロヌウシカ、アルバアティイチは何處かへ行つて居る、私は誰も相談する者が無いのだよ。私は去つて了まうことが能き無いといふのが、衆皆の云ふ通り、眞實なのかい？』

『貴女が去つてお了まひになれんと申すことがございませうかい、閣下。貴女はお發ちになれます』と、ヴロンは云つた。

『敵からの危險があるといふのだがね。私の善い友のお前、私は何にも爲ることが能き無いの、私はさういふことは何にも知ら無いの、私は賴みになるものを誰も持つて居無いの。今夜なり、明日の朝早くなり、必然發たうと思つて居るのだがね』

ヴロンは、何とも云は無かつた。彼は自分の眉の下から公爵嬢マリイヤを見あげた。

『馬が一匹も無いのでございます』と、彼は云つた。『私はアルバアティイチに最早左樣申したのでございます』

『それは一體何うしたことなの？』と、公爵嬢は云つた。

『皆神樣の御意でございます』と、ヴロンは云つた。『或る馬は軍隊用に持つて行かれて了まひますし、或るものは死にましてございます、何うも惡い年でございましてな。吾々が饑へて死にさへ致しませねば宜しいと申すので、馬の飼料どころではございません。今日でこれ三日と申すもの、皆麵麭の一片も無いのでございます。何一つ無いのでございます、奴等は最後の片まで掠奪されて了まつたのでございますわい』

公爵嬢マリイヤは、ヴロンが自分に云つたことを非常に注意深く聞いて居た。

『農夫どもが掠奪されたとお云ひのかい？。麵包が寸毫も無いのかい？』と、公爵嬢は尋いた。

『奴等は饑へて死にかゝつて居ります』と、ヴロンは云つた、『馬や荷馬車のことを申したとて、無効でございます』

『けども、何故お前それを私に云つて來無かつたのかい、ヴロヌウシカ？。助けてやることが能き無いのかい？。私に能きることなら何でも爲るわ……』

公爵嬢マリイヤに取つては、自分の心がそれ程の哀愁で溢れて居る其樣な時に、金持と貧乏

人とがあるなどゝいふことや、金持が貧乏人を助けることが能き無いなどゝいふことがあるのを、考へるとゝ、不思議で堪ら無かつた。公爵嬢は、漠然とながら、『領主の穀物』の貯積があることゝ、それが、時には農夫たちに與へられたことを、知つて居た。公爵嬢は又、父親にしても兄にしても、困つて居る農夫等に物を與へることを否みは爲無いだらうといふことを知つて居た、公爵嬢は唯だそれを配分することの命令の言語に何か間違を爲はしまいかと虞れたのみであつた。公爵嬢は、心配無く、自分の哀愁を忘れることの能きるやうな何事かを爲る辭柄を得たのを喜んだ。で、農夫等の窮乏の程度や、ボグチヤアロヴァに『領主の穀物』があるか何うかといふことを、ヅロヌウシカに尋き始めた。

『兄様の小麥の貯藏があるだらうと思ふのだがね？』と、公爵嬢は尋いた。

『小麥はそつくり致してござります』と、ヅロンは得意氣に云ひ切つた。『公爵から賣れといふご命令が出ませんでござりましたから』

『農夫たちにそれをお遣り、衆皆が要るだけ悉皆遣つてお了まい、私兄様に代つてお前に許すのだからね』と、公爵嬢マリイヤは云つた。

ヅロンは深い溜息を吐いたのみで、何とも返答し無かつた。

『お前、彼で足りるのならば、衆皆に穀物を分けてお遣り。殘らず分けてお遣り。私兄様に代つてお前に言ひ付けるわ、それで、吾々の物は衆皆の物なのだと、衆皆に云つて聞かしておく呉れ。私どもは、衆皆の爲めには、何様な物だつて惜みはし無いのだよ。衆皆にさう云つておく呉れ』

ヅロンは、公爵嬢がさう云つて居る間、初から終まで、凝乎と公爵嬢の顏を見詰めて居た。

『私を免職なすつてくださりまし、お嬢様、何卒お願ひでござります、私から鍵を取り上げるやうに、人々にお言ひ付けくださりまし』と、彼は云つた。『私は二十三年勤めまして、何一つ失策も致しませぬでござります、私を免職なすつてくださりまし、何卒お願ひでござりまする』

公爵嬢マリイヤは、ヅロンが何うして貰ひ度いといふ積りなのか、何故彼が免職して呉れといふのか、一向解ら無かつた。公爵嬢は、自分は決してヅロンの忠實を疑は無いことゝ、彼に對しても、農夫等に對しても、能きるだけのことは餘まさずする氣で居るといふことを、答へた。

（十二）

一時間經つてから、ヅウニャシャが、ヅロンが來、そして、總ての農夫等が、公爵嬢の命令で穀倉に集まつて、彼等の女主人と談話を爲度いと云つて居るといふことを知らせる爲めに、公爵嬢の部室へ入つて來た。

『でも、私衆皆を喚びに遣りは爲無いのだが』と、公爵嬢マリイヤは云つた。『私は唯だ穀物を衆皆にお遣りとヅロンに云ひつけただけなのよ』

『何卒、閣下、是非歸すやうにお云ひつけなさいまし、衆皆にお逢ひになつては不好ませんよ。皆な策略なんですわ』と、ヅウニャシャは云つて、『そのうちに、ヤアコフ・アルバアティイチが歸つて參ります、さうすれば、吾々は發てるんですから…　ですから、何卒……』

『何うして策略なの？』と、公爵嬢マリイヤは驚いて尋いた。

『えゝ、私には悉皆解つてるんでございますよ、是非私の申し上げるやうになさいましよ、何卒、お願ですから。乳母にもお尋きなすつてご覽なさいまし。貴女のご命令で他所へ行くといふことを、衆皆は承知し無いといふのでございます』

『お前何か聞き間違へたんだらう。いえね、私は、何處へも行けと衆皆に命令したんぢやア無いよ……』と、公爵嬢マリイヤは云つた。『ヅロヌウシカを喚んでお呉れ』

ヅロンは、入つて來て、ヅウニャシャの言語が眞實だと確言した、農夫等は公爵嬢の命令で來たといふのであつた。

『でも、私は決して衆皆を喚びに遣りはし無かつたわ』と、公爵嬢は云つた。『お前私の言語を間違つて傳へたに違ひ無いのだよ。私は唯だ穀物を衆皆にお遣りとお前に云つただけぢやア無いか』

ヅロンは返答は爲無いで溜息した。

『若し、ご命令でござりますなら、奴等は歸りますでござりませう』と、彼は云つた。

『いゝえ、いゝえ、私行つて逢ひますよ』と、公爵嬢マリイヤは云つた。

ヅウニャシャや、年取つた乳母が止めようと爲たに拘らず、公爵嬢マリイヤは昇降段へ出て行つた。ヅロヌウシカや、ヅウニャシャや、年取つた乳母や、ミハアイル・イヴァアニイチが、公爵嬢の後に隨いて出た。

『衆皆は多分、私が衆皆を此所へ止めて置いて、佛蘭西人の慈悲に衆皆を委ねて了まつて置い

て、私自身は逃げて了まう爲めに、穀物を遣らうといふのだとでも想像して居るのだらう』と公爵嬢マリイヤは思つた。『私は、莫斯科の領地で毎月の食料もやれば、家も與へてやるわ。アンドレーだつたらば、衆皆に向つてもつと十分なことを必然爲るだらうと思ふわ』と、公爵嬢は、穀倉の近傍の牧場で待つて居る群集の方へと、黄昏の裡へ出て行きながら、思つたのであつた。

群集は、動揺し、ごちや〳〵と塊まつて、急いで帽子を脱つた。公爵嬢マリイヤは、眼を下げ、足は長上衣の裾を踏みながら、彼等の傍へずつと寄つた。年取つたのや、若いのや、實に多數の種々な眼が自分の上に見据られ、實に多數の種々な顔があつたので、公爵嬢マリイヤには、その一つをも見ることが能き無かつた程であつた、そして、衆皆に一遍に話しかけ無ければならぬと思つたので、何うやりだして宜いのか、分から無かつた。が、再、自分は父親と兄の代表者なのだといふ感が、公爵嬢に力を與へた、で、公爵嬢は大膽に談話を始めた。

『お前がたが來てくだすつたのを、私は大變嬉しく思ひます』と、公爵嬢は、眼を擧げずに、そして、自分の心臓の急な烈しい鼓動を感じながら、始めた。『ヴロウシカの話では、お前たちは戰爭の爲めに破産したといふのです。それは吾々の共通な困難です、それで、私は、お前たちを助ける爲めには何様な物でも惜みはしません。私自身、此所を去らうとして居ます、何故だと云へば、此所は危險だから……敵が近いんだから　何故だといへば……私は、お前がたに、有らゆる物をあげます、で、お前がたは、有らゆる物を取つてお呉れ、お前たちが缺乏に苦ま無いやうに、私どもの穀物を悉皆取つてお呉れ。けれども、私がお前たちを此所に居殘らせる爲めに穀物をお前たちにあげるのだといふ人があるのだつたら、それは虚僞なんです。その反對で、私は、お前たちの持物と一緒にお前たちが、私どもの莫斯科の領地へ來て呉れることを頼むのです、で、私は、其所ではお前たちに不自由をさせ無いやうに爲ようし、又、必然さうすることを約束します。お前たちに、家もあげれば、麵包もあげます』

公爵嬢は止まつた。群集からは、溜息の外何にも聞え無かつた。

『私は、これを私自身で爲るのではありません』と、公爵嬢は言語を繼いだ、『私は、これを、お前たちに對して善い主人であつた亡くなつた私の父上樣や、兄樣や、その子に代つて爲るのです』

公爵嬢は再止まつた。誰も沈默を破る者が無かつた。

『吾々は、誰も同なじの困難を持つて居ます、で、吾々は同なじにそれを分けて共に苦勞を

爲ませう。私の物は悉皆お前たちの物です』と、公爵嬢は、自分の前にある幾つかの顔を見上げながら、云つた。何の眼も殘らず、何ういふ意味だか公爵嬢には測り得られ無い何れも同なじ表情で、公爵嬢を見詰めて居た。それは、好奇心であつたか、信服であつたか、感謝であつたか、それとも、危虞であつたか、疑念であつたか、何の顔の表情も皆同なじであつた。

『ご親切は眞に有りがたうございまする、が、唯だご主人の穀物を取るなんぞといふことは私どもの爲べきことではございません』と、背後から一人の聲が云つた。

『でも、何故なの?』と、公爵嬢は云つた。誰も答へる者が無かつた、そして、群集を見上げた公爵嬢マリイヤは、今は、誰の眼も、自分の眼に出會ふと直ぐ下げられることに、氣が付いた。

『何故お前たちはさう爲度く無いの?』と、公爵嬢は再尋いた。

誰も答へ無かつた。

公爵嬢マリイヤは、沈默の爲めに壓し着けられるやうに感じた、公爵嬢は誰か一人の眼を捉へようと爲た。

『何故お前たちは何とも云は無いのかい?』と、公爵嬢は、腕を杖に凭せて、公爵嬢の側に立つて居た極く年取つた男に話しかけて、云つた。『もつと何か要ると思ふのなら、さう云つておゝ呉れ。私は、何でも爲てあげるから』と、公爵嬢は、その老人の眼を捉へながら、云つた。が、公爵嬢がさう爲たのを怒つたかのやうに、彼は、頭を垂げた、そして、云つた——

『何うして承知できるものですかい?。吾々は貴女の穀物はいりませんのです』

『何故吾々が有らゆる物を捨て無ければなら無いんだい?。吾々は同意し無い』——『吾々はそれには同意でき無い』——『それは、吾々が納得してからのことでは無い』——『吾々はお氣の毒だと思ふ、だが、さうするのは嫌だ』——『貴女は勝手に去つてお了まひなさい、お一人で』と、群集の裡の八方から反對の聲が起つた。で、再、群集のなかの總ての顔が、何れも同なじ表情を帶びた、が、此度は、確に、好奇心とか、感謝とかの表情では無くして、憤激した決心の表情であつた。

『でも、それは、私の心持を取違へて居るのです』と、公爵嬢は愁はしげな笑顔で云つた。『何故お前たちは此所から動き度く無いのかい?。私は、お前たちの住へるやうにし、食べられるやうにしてあげようと約束するのですよ。で、此所に居れば、敵がお前たちを掠奪する……』。

が、公爵嬢の聲は、群集の聲々の裡へ溺らされて了まつた。

『吾々は嫌なんだ、敵が掠奪すればするで、寸毫も構は無えんだ。吾々は、貴女の穀物は貰は無え、吾々は同意し無えんだい』

公爵嬢マリイヤは、再、群集の裡の誰か知らの眼を捉へようと骨折つた、が、誰一人自分を見て居る者が無かつた。彼等の眼は、確に、公爵嬢の眼を避けて居た。公爵嬢は、奇異に、そして、照れた心持がした。

『眞個だ、彼の女は俺たちを欺しちまはうてえんだ……旨く欺しやアがらア……奴隷になりに隨いて來いてえんだ……貴樣たちの家を破して、奴隷になりに來いかね。旨えなア。私はお前たちに穀物をあげますつて、云やアがらア』と、聲々が群集の裡で云つて居た。

公爵嬢マリイヤは、群集の圏の外へ動いた、そして、悄氣た顏貌で家へ入つた。次の日自分の發つ爲めの馬を揃へて置くやうにといふ命令を、ヅロンにまで繰り返して、公爵嬢は自分の部室へ行つて、其所で一人で、自分自身の物思に耽つて居た。

（十二）

長い間、公爵嬢マリイヤは、自分の部室の開いた窓のところに坐つて、村から漂つて來る農夫等の聲々の音を聞いて居た、が、公爵嬢は彼等のことを思つては居無かつた。公爵嬢は、何れ程長く彼等のことを考へても、彼等を理解することの能き無いのを感じた。公爵嬢はその間始終唯つた一つのことしか考へ無かつた――それは、今現在の事に就ての心配の爲めに中斷されて、最早過去に屬することのやうに見えだした父親を失つた哀愁のことであつた。今は、公爵嬢は、憶ひだし、泣き、祈ることが能きるのであつた。

日が沒ると共に、風が無くなつた。夜は靜で、爽やかであつた。夜半には、村での聲々が止み始めた、雄鷄が鳴いた、滿月が菩提樹の彼方から昇つた、心持の好い、白い、露を含んだ靄が出た、そして、靜寂が村と家の上に支配した。

極く近い過去――父親の病氣や、その最後――の繪が、次ぎ〳〵に、公爵嬢の想像の前へ現て來た。で、悲しい氣な喜悅で、公爵嬢は、今はさういふ心象の上に自分の心を休ませたが、唯だ、最後の一つの光景は、慄然として、それを避けた、夜のその靜な神秘的な時間には、想像の裡ですら、そのことを思ひ廻すだけの力が自分には到底無いと感じたからであつた。で、さういふ心象は、公爵嬢の前へ非常に現然と、非常に詳細に現て來たので、公爵嬢には、それが、或時は今現在のことに見え、或時は過去のことに見え、又或時は未來のことに見えた位であつ

た。

公爵嬢は、父親が初めて病氣で倒れて、荒涼丘の園庭から家へ抱き込まれて來る時や、彼が、白い眉をビリ〳〵させ、公爵嬢をばオヅ〳〵と不安さうに見て、何か口の裡で云つた時の光景を今現然と眼前に見るのであつた。

『彼の時でさへ、父上樣は、お亡くなりになるその日に私に仰しやつたことを、私に仰しやらうとなすつたんだわねえ』と、公爵嬢は思つた。『父上樣は、彼の時仰しやつた通りのことを、何時も思つて居らしつたんだわねえ』

それから、公爵嬢は、父親が病氣になる前に何か心配事が起るだらうといふ豫覺で、自分が父親の心に背いて父親の傍に居た荒涼丘の夜のことを詳細に憶ひ起した。その時は、公爵嬢は眠無かつた、そして、夜になると、足を爪立てゝ忍んで歩いて、父親がその夜を送つて居た溫室の部室の戸へと行つて、父親の聲を伺ひ聞いたのであつた。彼は、疲れた、五月蠅さうな聲でティフォンに話を爲て居た。彼は、クリミヤのことや、暖かい夜のことや、皇后のことを、何か云つて居た。確に、彼は、誰かしらに話を爲度かつたらしかつた。

『それだのに、何故私を喚んでくださら無かつたのだらう?。何故私をティフォンの代りに彼所に居させてくださら無かつたのだらう?』と、公爵嬢マリイヤはその當時思つたのだが、それを、再こゝでも思つたのであつた。

『最早父上樣は、ご自分の心の裡にあつた總てのことを誰にもお話しなさることは決して無い。父上樣が云ひ度いと思つていらしつたことを悉皆私に仰しやつて、ティフォンで無く、私がそれを聞いて、悉皆解つて了まつたのであつたかも知れ無かつた時は、最早決して又と來ることは無い。何故私は彼の時父上樣の部室へ入つて行か無かつたのだらうね?』と、公爵嬢は思つた。『さうしたら、お亡くなりの日に私に仰しやつたことを、彼の時仰しやつたかも知れ無かつたのだわ。彼の時でも、ティフォンに話かけながら、私のことを二度お尋きなすつたわ。私を見度いと思つて居らしつたのに、その私は戸一枚此方に立つて居ながら、入つて行か無かつたのだわ。父上樣は、悲しさうに、退屈さうにティフォンに話していらしつて、ティフォンには、父上樣のお心持は寸毫も解ら無かつたのだわ。父上樣は、リザのことを、生きて居る人のやうに、云つて居らしつたわ——父上樣は、リザが、亡くなつたのを忘れて了まつていらしつたのだわ、で、ティフォンが、リザが亡くなつたことを、申しあげると、父上樣は「痴人」と、聲高に仰しやつたのだつけ。父上樣は甚くお心細かつたのだわ。私は、父上樣が寢床の上へ唸りなが

ら、お臥りなすつて、「あゝッ」と、大きい聲で仰しやつたのを、戸越しに聞いたわ。何故私彼の時入つて行かぬ無かつたのだらうね？。父上樣が私の困るやうなことを何で爲さるのであつたらう？。入つたが爲めに私に何の損があるのであつたらう？。で、さう爲たのだつたら、彼の時父上樣はお心が安まつて、彼の言語をその時私に仰しやつたかも知れ無いわ』で、公爵嬢マリイヤは、父親が死ぬる日に自分に云つたその優しい言語を聲高く云つた。『可愛い奴よ』と、公爵嬢マリイヤは、その言語を繰り返した、そして、歔欷あげて泣きだした、で、それで幾らか心が安められた。

公爵嬢は今父親の顏を眼の前に現然と見ることが能きた。それは、公爵嬢が憶ひだし得る往昔からずつと知つて居、そして、何時も離れてのみ見て居た顏では無かつた、それは、公爵嬢が、彼の云つて居たことを聞かうとして、その唇の傍へ耳を持つて行つて、生れて始めて、皺だらけのその顏を近々と見たその最後の日の、父親の、弱い、オヅ〳〵した顏であつたのだ。

『可愛い奴よ』と、公爵嬢は繰り返した。

『彼の言語を仰しやつた時には、何を思つて居らしつたのだらうか知ら？。今何を思つて居らつしやるのだらうか知ら？』といふのが、公爵嬢の心に不意に起つて來た疑問であつた、で、それに對する答として、公爵嬢は、棺の中の、白い手巾で縛つた顏の面で見た表情のある父親の顏を眼の前に見た。で、自分が父親に觸つて、それは父親では無くして、神秘な恐ろしい何物かであると感じた刹那に、公爵嬢を壓伏した恐怖の念が、今再公爵嬢の心へ襲つて來た。公爵嬢は何か他のことを思はうと骨折つた、祈らうと爲た、が、何にもすることが能き無かつた。眼を見張つて、公爵嬢は、月光と物の影を見たが、今にも父親の顏が見えて來るやうな氣が爲、そして、家の內部と無く外部と無く一體に行き渡つて居た沈靜に魅せられて了まつたかのやうな氣が爲たのであつた。

『ヴウニャシャ』と、公爵嬢は囁いた。『ヴウニャシャ』と、公爵嬢は、物狂しく叫んだ、沈靜から自分を振りもぎつて、女中部室の方へと駈けだしたが、公爵嬢の方へと駈けて來る年取つた乳母や女中たちに途中で迎へられたのであつた。

（十三）

八月の十七日にロストオフと、イリインは、佛蘭西人に捕虜になつてから直ぐ歸つたばかりのラヴルウシカと、從卒の勤務に就て居る一人の驃騎兵を伴れて、ボグチヤアロヴァから十五露

里のヤンコオヴァから乘り出した。彼等はイリインが買つた新馬を試すと共に、村で干草が得られるか何うか調べて見ようといふ積りであつた。

ボグチャアロヴァは、その三日以來、二つの敵對軍の間にあつて、露西亞軍の後衛と、佛蘭西の前衛が、何方からでも同樣に容易に村へ達することが能きたのであつた、で、ロストオフは、注意深い將校が爲るやうに、是非佛蘭西軍の先を越して、村に殘つて居るかも知れ無い一切の糧食を占領して了まはうといふ考慮であつた。

ロストオフもイリインも、非常な上機嫌であつた。

ボグチャアロヴァは、或る公爵の領地で、領主の館もあるのだと知つて居たので、彼等は、其所には大きい家内があつて、多分は奇麗な女中等が居るだらうなどゝ思つて居たのだが、それに向ふ道すがら、彼等は、ナポレオンのことをラヴルウシカに尋ね、そして、ラヴルウシカの談話で哄笑を爲た、それから、イリインの新馬を試す爲めに、競馬を始めた。

ロストオフは、自分が向つて居る村が、自分の妹の約婚者であつた公爵ボルコオンスキイその人の領地であらうとは、全然思ひ掛が無かつたのであつた。

ロストオフとイリインは、ボクチャアロヴァの前で、最後に疲れ切るまで、自分等の馬を十分に駈けさせたのであつた、で、ロストオフは、イリインを追ひ拔いて、一番に村の街へ駈け込んだ。

『貴下は、先に出たんだから』と、イリインは、赤くなつて、云つた。

『左樣さ、何時も先さ、牧場でも、此所でも』と、自分の泡だらけのドン馬を叩きながら、ロストオフが答へた。

『私の佛蘭西馬でも、閣下』と、ラヴルウシカが、自分が乘つて居た惨れな荷馬車馬を指した積りで、後から云つて、『閣下に追ひ付くことは能きたんですが、唯だ閣下に面目無がらすのがお氣の毒でしたんで』

彼等は、農夫等の多數の群集が立つて居た穀倉の方へと、並足で乘つて行つた。

農夫等のうちの五六人は、帽子を脫つた、他の者どもは、帽子を脫らずに、ロストオフたちを見詰めた。皺だらけの顏の、粗い髯の、二人の年取つた農夫が、居酒屋から蹌踉けながら、調子の無い歌を謠ひながら、出て來て、微笑みながら、將校たちの方へと進んだ。

『面白い奴等だな』と、ロストオフは、笑ひながら、云つた。『おい、干草があるかい？』

『二人とも、似て居らア、幾らか……』と、イリインが云つた。

『わが夏……を……面……白く……あそ……びて……』と、嬉しさうな笑顔で、農夫が謠つた。

一人の農夫が、群集の中から出て來て、ロストオフの傍へと行つた。

『お前さんがたは、何方なんだね？』と、農夫が尋いた。

『俺たちは佛蘭西人だぞ』と、イリインは、笑ひながら、答へた。『で、これがナポレオンなんだ』と、彼は、ラヴルウシカに指ざしして云つた。

『ぢやア、露西亞人だらうね？』と、農夫が尋ねた。

『お前さんがたは、此所で多數の軍隊を持つてるのかい？』と、今一人の背の低い農夫が、近寄りながら、尋いた。

『非常に多數だ』と、ロストオフが答へた。『お前たちは、何の爲めに此所に集まつてるのかね？』と、彼は云ひ添へた。『休日か何かかね？』

『年寄どもが、村の用で集會してるでがす』と、農夫は、ロストオフの傍を離れながら、云つた。

その途端に、公爵の家から、將校の方へと駈けて來る二人の女と、白い帽子の男とが見えて來た。

『桃色の衣服のは、俺のだせ、誰も手を出しちやア不好ぞ、宜いか』と、イリインは、自分等の方へと、ドン〳〵駈けて來るヴウニャシャに眼を付けて、云つた。

『彼女は吾々の女になりますね』と、ラヴルウシカは、イリインに眼眦を爲て、云つた。

『何の用かね、姉さん？』と、イリインは、微笑みながら、云つた。

『公爵嬢が、貴下がたは、何といふ聯隊のお方で、お名は何と仰しやるのですか、伺つて來いと、仰しやいますんで』

『この方は、騎兵中隊長の伯爵ロストオフで、居らしつて、私は、その從僕です』

『メル……メル……メル……アルブウル……』と、醉拂の農夫は、謠つて、嬉しさうに微笑みながら、娘と話して居るイリインを見詰めて居た。アルバアティイチが、ヴウニャシャに續いで來た、彼は、近寄りながら、帽子を脱つた。

『甚だ失禮ながら、貴下さまにお願がござります』と、彼は、胸に手を措いて、將校の年齢の若いのに對して輕蔑の色の襲つた丁寧さで、話しながら、云つた。『私の女主人、この月の十五日に亡くなりました元帥、公爵ニコラアイ・アンドレエーチ・ボルコオンスキイの娘は、其所に居りまする者どもの野卑な無智から生じました紛紜の爲めに』――アルバアティイチは、農夫等

に指ざしして――『貴下さまにおいでくださるやうにお願ひ申しまする……お前がたは、何うか』と、アルバアティイチは、悲しさうな笑顔で云つて、『少し傍へ行つて呉れ無いか、お邪魔になるのだから……』と、アルバアティイチは、馬の周圍の馬蠅のやうに、彼の周圍をうろ付いて居た二人の農夫に指ざしした。

『やアい。……アルバアティイチ……やアい。ヤアコフ・アルバアティイチ。傑いこつちやな。えゝ？』

『何卒、ご勘辨くださいました。傑いぞ、やアい』と、農夫等は、アルバアティイチに向つて、調戯けて、微笑みながら、叫んだ。

ロストオフは、醉拂ひの農夫等を見て、微笑んだ。

『それとも、閣下はこれを面白く思召すのか存じませんが？』と、ヤアコフ・アルバアティイチは、片方の手で年取つた農夫等に指ざししながら、生眞面目な風で云つた。

『いや、別に面白いといふのでは無いよ』と、ロストオフは云つて、傍へ動いた。『何うしたのかね？』と、彼は尋ねた。

『恐縮でございまするが、閣下にお聞きを願ひ度いのでございます、農夫どもは、女主人が領地を出るのを承知いたしません、彼等は、女主人の馬車から馬を放して了まうと、申して居るのでございます、で、今朝以來荷拵へは全然出來て居りまするのに、女主人は、發つことが能きませんのでございます』

『左樣なことがある筈は無い』と、ロストオフは叫んだ。

『全くの眞實を申しあげるのでございます』と、アルバアティイチは云つた。

ロストオフは、馬から下りて、馬を從卒に渡して、事態に就て尙詳しくアルバアティイチに尋ねながら、アルバアティイチと一緒に家へと歩いて行つた。

公爵嬢が、穀物を遣らうと云つたことや、ヅロンだの農夫等に會つたことが、ヅロンが到頭職務の鍵を渡して了まつて、農夫等に合體して、アルバアティイチが喚びに遣つても、出て來無かつた程までに、事態を一層惡くしたのであつた。公爵嬢が、出發する爲めに馬を着けるやうに命じた朝、農夫等は多人數の群集を爲して穀倉へ出て來た、そして、代表者をよこして、彼等は、公爵嬢を去らせることを欲し無いといふことや、人民は、各自の家を捨てゝはならぬといふ公示が出て居るといふことや、公爵嬢が何うしても發つといふのなら、彼等は公爵嬢の馬を解き放して了まうといふことを、云はせた。アルバアティイチは、彼等を諭しにと出て行つた、彼

等は、それに答へて、(カルプといふ男が、重な辯者になつて、ヅロンは群集の裡に引込んで居たのだが、)公爵嬢を發たすことは能き無い、それを禁ずる公示が出て居るのだから、けれども、公爵嬢にして止まつて居さへすれば、彼等は、これまで通り何事にも公爵嬢の命に服して、善く仕へると、アルバアティイチに云つた。

ロストオフとイリインが、村の街を駈けて居た丁度その時に、アルバアティイチや、年取つた乳母や、女中の止めようとする努力を顧みずに、公爵嬢マリイヤは、馬を附けることを命じて、發たうとして居たのであつた。が、騎兵等が駈け付けて來るのを見て、馭者等は、それを佛蘭西人だと思つて、逃げて了まつた、で、非常な嘆愁が、家内の女等の裡から起つた。

『親切な旦那さま。保護者さま。旦那は神さまのお使です』と、ロストオフガ玄關の室を通る時に、聲々が、非常な感情を籠めて、叫んだ。

公爵嬢マリイヤは、ロストオフが案内されて入つた時には、廣室に、爲方無げに、途方にくれて、坐つて居た。公爵嬢は、彼が誰なのか、何の用で其所へ來たのか、又は、自分の身に何樣なことが起りつゝあつたのか、寸毫も知ら無かつた。彼の露西亞人の顔を見、そして、彼の最初の言語と、姿勢で、彼が公爵嬢自身と同なじ階級の人であることを認めて、公爵嬢は、その深い、凉しい眼付で、彼を見詰め、感情で切れ〴〵になる、震える聲で、話し始めた。

ロストオフは、忽ち、この遭會の裡に一種のロオマンスを感じた。『悲愁の爲めに壓伏せられ、唯一人で、荒くれた、反逆の農夫等の慈悲に委ねられた、防禦力の無い娘なんだ。何といふ不思議な運命が、俺を此所へ伴れて來たんだらう』と、ロストオフは、公爵嬢の物語を聞き、公爵嬢を見て居るうちに、思つたのであつた。『それに、顔立や、表情の何といふ優しい、何といふ氣高い女だらう』と、彼は、公爵嬢のオド〳〵した物語を聞いて居るうちに、思つた。

公爵嬢が、總て斯ういふことが、父親の葬式の翌日に起つたのだと、ロストオフに話し始めた時に、公爵嬢の聲は震えた。公爵嬢は顔を背けた、そして、ロストオフが、自分の言語をば彼の感情を動かし度い爲めのものだと取りは爲まいかと虞れるかのやうに、公爵嬢は、心配さうな、樣子を伺ふやうな顔付で、ロストオフを一寸〳〵見た。

ロストオフの眼には涙が出て居た。公爵嬢マリイヤは、それに氣が付いた、そして、誰にも公爵嬢の顔の醜くさを忘れさせる例の凉しい眼付で、ロストオフを見た。

『私は偶然此方の方へ參りまして、何かしらで、貴女のお爲めを爲ることが能きるやうになつた私の喜悅は、到底言語では云ひ盡くせませんです、公爵嬢』と、ロストオフは、云つて、起ち

あがつた。『貴女は直ぐお發ちでせう、私は、私の名譽にかけて、お發ちになれるやうにお引き受します、若し貴女が私がお送り申すことを許してさへくださいますれば、誰にも貴女を困らせるやうなことはさせませんです』、で、皇族の婦人たちに對して爲るやうな非常に謹んだ點頭を爲て、ロストオフは戸口へと振り向いた。

自分の調子の鄭重なことで、ロストオフは、自分は公爵嬢と懇親になることを幸福と認めて居るのではあるが、此の際公爵嬢の不幸に乗じて、推し付けがましく懇親にならうとは、決して思つて居無いのだといふことを見せようと爲たのであつた。

公爵嬢マリイヤは、この調子を感じ、そして、それを認めた。

『眞個に、眞個に、有り難うございます』と、公爵嬢は、佛蘭西語で、ロストオフに、云つた。『ですが、全く何かの誤解なんでせうと思ひます、誰の咎といふのでもございますまいよ』。公爵嬢は、不意に泣きだした。

『ご免くださいましよ』と、公爵嬢は云つた。

ロストオフは、顔を顰めて、今一度低く點頭を爲て、部室を出た。

（十四）

『もし、奇麗な娘でしたか？。だが、君、僕の桃色娘はなか〳〵人好のする奴ですせ、名は、ヴウニヤシヤといふんです……』

が、ロストオフの顔を窺くと、イリインは止まつた。彼は、自分が崇拜して居る人であり且自分の長官であるロストオフが、自分とは全然異つた考慮に沈んで居るのを見た。

ロストオフは、イリインを、腹立たし氣に見た、そして、返答を爲ずに、村の方へとヅンヅン大股で歩いた。

『奴等に思ひ知らせてやる、奴等に眼に物見せてやる、惡黨奴等』と、ロストオフは一人呟いた。

アルバアティイチは、艱然駈け出さずに居られるばかりの速足で、ロストオフの後に續いた。

『何うお決しくださいましたでせうか？』と、彼は、ロストオフに追ひ付きながら、云つた。

ロストオフは、ピタリと立ち止まつた、そして、拳を握り固めて、不意に、恐しい權幕でアルバアティイチの傍へ詰め寄せた。

『決した？。何の決定だ、胡麻すり爺奴？』と、ロストオフは怒號つた。『貴樣は何を考へて居たんだ？。え、？。農夫どもが暴れる、それで居て、貴樣は奴等を取り締ることが能きんとは、何うしたんだ？。貴樣は自分が逆賊なんだぞ。俺は、貴樣のやうな奴の心持は善く解つて居るぞ。俺は、貴樣のやうな奴等の皮を叩き剝いでやるわい……』。で、自分の憤怒の勢を空費して了まうのを虞れるかのやうに、彼は、アルバアティイチの傍を離れて、速歩に進んで行つた。

アルバアティイチは、自分の傷けられた感情を嚥みこんで、尙且、目下の問題に對するロストオフの考慮の足になる事柄を話しながら、泳ぐやうな歩調で、ロストオフの後に續いて急いだ。彼は、農夫等が非常に頑强であることや、今の場合、武力無くして、彼等に對抗するのは無謀であるのだから、先づ以つて、兵を喚び寄せた方が宜くはあるまいかといふことを云つた。

『俺は、武力を奴等に喰はしてやる……俺は奴等に對抗して遣る……』と、ニコライは無法な動物的な憤怒と、その憤怒を誰か知らの上に洩し度いといふ望で以つて、息を塞らせて、意味も無く呟いた。自分が爲ようと爲て居ることを考へもせずに、無意識に、彼は、群集の方へと、速い、確乎した歩調で、動いて行つた。

で、ロストオフが群集へ近寄れば近寄るほど、アルバアティイチは尙一層彼の向ふ見ずの行爲が一番幸福な結果を生ずるのであらうと感ずるのであつた。群集の裡の農夫等も、ロストオフの、確乎した、急ぎ歩と、彼の、斷乎とした、睨み付けた顏を見ては、アルバアティイチと同なじやうに感じたのであつた。

驃騎兵が村へ入り、ロストオフが公爵嬢に逢ひに入つて行つた後で、意見の、或る躊躇と、乖離が、群集の間に表はれて來た。農夫等のうちの或者は、騎兵等は露西亞人であるのだから、自分等が若い女主人を發たせ無いのを惡く思ふかも知れぬといふことを、云ひ始めた。ヅロンもその說であつた、が、彼がそれを云ひだすや否や、カルブやその他の者がヅロンに喰つてかかつた。

『何年貴樣は村を喰ひ物にして肥つたか知れ無えぢや無えか？』と、カルブが怒號つた。『貴樣は何方だつて宜いだらうよ。貴樣は錢壺を掘り出して、それを持つて逃げりやア宜いんだ。俺たちの家が燒けやうが、燒けまいが、貴樣にやア何でも無えだらう？』

『何も彼も整然としといて、誰も家を捨てちやアなら無え、物一つ他所へ動かしちやアならぬ無えてえ命令ぢやア無えか――全くさうなんだい』と、今一人が怒號つた。

『彼りやア貴樣の息子の番だつたんだい、だのに、貴樣は、貴樣の肥つた倅を助けやがつた』